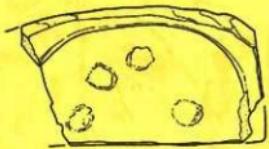


甲府城下町遺跡

(丸の内二丁目109地点)

— 立体駐車場建設に伴う発掘調査報告書 —



2011年9月

社団法人 山梨勤労者医療協会
財団法人 山梨文化財研究所

甲府城下町遺跡

(丸の内二丁目109地点)

— 立体駐車場建設に伴う発掘調査報告書 —

2011年9月

社団法人 山梨勤労者医療協会
財団法人 山梨文化財研究所

例 言

- 1 本書は山梨県甲府市丸の内二丁目109番地所在の甲府城下町遺跡（丸の内二丁目109地点）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は甲府共立病院立体駐車場建設に伴い、社団法人山梨労働者医療協会より委託を受けて（財）山梨文化財研究所が実施した。
- 3 第3章第5節の歴史的鑑定については植月学氏（山梨県立博物館）に依頼し、所見を執筆していただいた。植月氏には感謝申し上げる次第である。そのほかの原稿執筆・編集は複数功一が行った。
- 4 発掘調査における基準点測量、空中写真撮影、全体圖作成業務は株式会社テクノ・プランニングが実施した。
- 5 本書に関わる出土品、記録類は甲府市教育委員会で保管している。
- 6 発掘調査から報告書作成に至るまで、社団法人山梨労働者医療協会（理事長 上野洋）および甲府共立病院、木内正治氏（甲府共立病院副事務長）にはご理解、ご協力をいただいたことをまず感謝申し上げたい。また以下の諸氏、諸機関からご教示、ご配慮を賜った。記して感謝する次第である（順不同、敬称略）。

眞田組上木株式会社、小林邦之、水野公男（長田組上木株式会社）、望月祐仁、平塚洋一（甲府市教育委員会）、宮澤公雄、平野修、河西学、畠大介、鈴木稔、中山千恵、望月秀和（山梨文化財研究所）、今福利恵、正木季洋（山梨県学術文化財課）、春日正伸、浅川保、原正人（山梨平和ミュージアム）、森谷忠、柴田直樹（株式会社テクノ・プランニング）、三枝哲雄（三枝興業）、丸山昭裕

凡 例

- 1 遺跡全体図におけるX・Y数値は、平面直角座標第8系（原点：北緯36度00分00秒、東経（138度30分00秒）に基づく座標数値である（世界測地系数値）。各遺構半面図中の北を示す方位はすべて座標北である。
- 2 遺構および遺物の縮尺は次のとおりである。
全体図 任意
ピット 1 : 30
土坑 1 : 40
陶磁器 1 : 3
上管等大形土製品 1 : 6
土製品 1 : 2
石臼等大形石製品 1 : 6
- 3 十色説明における十色表示は農林水産省水産技術会議事務局監修「新版 標準上色版」を使用した。
- 4 遺物図版中の遺物番号は写真図版番号、遺物観察番号と一致している。
- 5 本書図1は国土地理院発行の1/200,000地勢図「甲府」、図3は1/5000「甲府市都市計画図」を使用した。
- 6 本文の註、参考文献については各節ごとにまとめた。

目 次

第1章 経過	1
第1節 調査の経過	1
第2節 発掘作業の経過	1
第3節 整理等作業の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	7
第3章 調査の方法と成果	7
第1節 調査の方法	7
第2節 展序	8
第3節 遺構	8
第4節 遺物	14
第5節 甲府城下町遺跡丸の内二丁目109地点より出土した ウマ追体（植月 学）	23
第4章 総括	24
第1節 調査の成果	24
第2節 戦災廃棄物について	25
報告書抄録・奥付	

挿図目次

図1 遺跡の位置	3
図2 甲府城下町概観図	4
図3 甲府城下町概観図と調査地点	5
図4 空襲による焼失範囲	6
図5 高田城下鍋屋町遺跡出土遺物	25

表 目 次

第1表 同定結果	24
第2表 土陶器ガラス器観察表	27
第3表 石製品観察表	28
第4表 土陶器ガラス製品観察表	28
第5表 金属製品観察表	28
第6表 木製品観察表	28

図版目次

第1図 画北区全体図	29・30
第2図 1～4号井戸	31・32
第3図 トレンチ配置図	33
第4図 分割図	34
第5図 1号建物跡	35
第6図 2号建物跡	36
第7図 3号建物跡	37
第8図 1～7号土坑	38
第9図 13～17号土坑	39
第10図 20～24号土坑、23・24・50・53号ピット	40

第11回	2～4号溝、1・2号石組	41
第12回	3・5・6分トレンチ	42
第13回	1～6号トレンチ	43
第14回	1・2号井戸 遺物	44
第15回	4号井戸、1・6号土坑 遺物	45
第16回	6・7・14～16号土坑 遺物	46
第17回	16号土坑 遺物	47
第18回	17・19・20・24号土坑、7・16号ピット 遺物	48
第19回	53号ピット、1・5号溝、2号建物、1号石組溝 遺物	49
第20回	2号石組溝、遺構外 遺物	50
第21回	遺構外 遺物	51
第22回	遺構外 遺物	52
第23回	遺構外 遺物	53
第24回	遺構外、2号建物、1号溝 遺物	54
第25回	遺構外 遺物	55
第26回	1～5号トレンチ 遺物	56
図版6	7号土坑検査状況(南より) 7号土坑半裁状況(西より)	8
	7号土坑完掘状況(南より)	2
	7号土坑遺物出土状況 4・3号建物跡(南より)	3
	3号建物跡根石(49号ピット)	5
	3号建物跡根石(50号ピット)	6
	3号建物跡根石	7
	3号建物跡根石(62号ピット)	8
	3号建物跡根石(63号ピット)	9
	3号建物跡根石(59号ピット)	10
	3号建物跡根石(48号ピット)	11
	3号建物跡根石 13・3号建物跡根石	12
図版7	1～3号井戸(南より) 2・1号井戸上層集石	1
	1号井戸集石断面(南より)	3
	1号井戸内石組 5・1号井戸半裁状況(南より)	4
	1号井戸内出土竹	6
	1号井戸完掘状況(南より)	7
	2号井戸上層集石	8
	2号井戸上層集石半裁(南より)	9
	2号井戸上層集石内出土馬	10
図版8	2号井戸下層集石	1
	2号井戸上層集石半裁状況(南より)	2
	2・3号井戸半裁・完掘状況(南より)	3
	2号井戸半裁状況(南より)	4
	3号井戸確認状況 6・3号井戸半裁状況	5
	3号井戸石積(南より)	7
	2・3号井戸調査風景	8
	3号井戸半裁状況(南より)	9
図版9	4号井戸コンクリート枠	1
	4号井戸内に残る桶	2
	4号井戸半裁状況(南より)	3
	4号井戸半裁・完掘状況	4
	4号井戸底の検査状況 6・調査風景(東より)	5
	1号土坑(南より)	7
	1号土坑遺物出土状況(南より)	8
図版10	3号土坑(南より) 2・4号土坑(南より)	1
	5号土坑(南より) 4・14・19号土坑(南より)	3
	20号土坑遺物出土状況(北より)	5
	16号土坑遺物出土状況(南より)	6
	24号土坑(北より)	7
	24号土坑内焰塔出土状況 9・5号溝(南より)	8
図版11	出土遺物	
図版12	出土遺物	
図版13	出土遺物	
図版14	出土遺物	
図版15	出土遺物	
図版16	出土遺物	
図版17	出土遺物	
図版18	出土遺物	
図版19	出土遺物	

写真図版目次

- 図版1 1 調査前駐車場風景(東より)
2 二の堀現況(南東より)
3 調査区臨の金山神社
4 重機による表土剥ぎの様子
5 完掘状況(上より) 6 完掘状況(東より)
7 完掘状況(北より)
- 図版2 1 2号建物跡基礎(東より)
2 墓石に転用された石材
3 2号建物跡と石列(東より)
4 二の堀脇の瓦礫地盤状況(南より)
5 2号建物跡付属基礎
6 2号建物跡基礎のアンカーボルト
7 1号建物跡(北より)
- 図版3 1 1号建物跡長方形施設 2 1号建物跡(東より)
3 1号建物跡(根石) 4 1号建物跡(東より)
5 1号建物跡(礎石・根石) 6 1号建物跡(礎石)
7 1号石組構造確認状況(南より)
8 1号石組構造確認状況(南より)
9 1号石組溝(西より)
- 図版4 1 1号石組溝 2 1号石組溝
3 調査区北側瓦堆積状況
4 2号土坑地盤状況(北より)
5 2号土坑下層検査出土状況(南より)
6 2号土坑部分 7 2号土坑ピット・溝検査状況
- 図版5 1 1号土管列と1号石組溝の連結部
2 17号土坑の裡桶底
3 17号土坑と2号石組溝(南より)
4 1号土管列内埋蔵
5 2号石組溝内埋蔵(透析)
6 1号土管列・2号石組溝
7 1号土管列・2号石組溝付近調査風景
- 図版6 7号土坑検査状況(南より)
7号土坑半裁状況(西より)
- 図版7 7号土坑完掘状況(南より)
7号土坑遺物出土状況 4・3号建物跡(南より)
- 図版8 3号建物跡根石(49号ピット)
3号建物跡根石(50号ピット)
- 図版9 3号建物跡根石(59号ピット)
3号建物跡根石(48号ピット)
- 図版10 3号建物跡根石 13・3号建物跡根石
- 図版11 1～3号井戸(南より) 2・1号井戸上層集石
- 図版12 1号井戸集石断面(南より)
- 図版13 1号井戸内石組 5・1号井戸半裁状況(南より)
- 図版14 1号井戸内出土竹
- 図版15 1号井戸完掘状況(南より)
- 図版16 2号井戸上層集石
- 図版17 2号井戸上層集石半裁(南より)
- 図版18 2号井戸上層集石内出土馬
- 図版19 2号井戸下層集石
- 図版20 2号井戸上層集石半裁状況(南より)
- 図版21 2・3号井戸半裁・完掘状況(南より)
- 図版22 2号井戸半裁状況(南より)
- 図版23 3号井戸確認状況 6・3号井戸半裁状況
- 図版24 3号井戸石積(南より)
- 図版25 2・3号井戸調査風景
- 図版26 3号井戸半裁状況(南より)
- 図版27 4号井戸コンクリート枠
- 図版28 4号井戸内に残る桶
- 図版29 4号井戸半裁状況(南より)
- 図版30 4号井戸半裁・完掘状況
- 図版31 4号井戸底の検査状況 6・調査風景(東より)
- 図版32 1号土坑(南より)
- 図版33 1号土坑遺物出土状況(南より)
- 図版34 3号土坑(南より) 2・4号土坑(南より)
- 図版35 5号土坑(南より) 4・14・19号土坑(南より)
- 図版36 20号土坑遺物出土状況(北より)
- 図版37 16号土坑遺物出土状況(南より)
- 図版38 24号土坑(北より)
- 図版39 24号土坑内焰塔出土状況 9・5号溝(南より)

第1章 経過

第1節 調査の経過

調査地点は甲府市丸の内二丁目、甲府共立病院の東側、もと株式会社土木の駐車場内である。甲府駅南口にごく近い甲府市中心部西方の一角落で、かつての甲府城外堀の二の堀外側、隣接地にあたり、現在でも二の堀の名残となる河川が西から東へと流れている。その駐車場内に共立病院が立体駐車場を建設することになったため、平成21年(2009)5~6月、甲府市教育委員会では予定地内に6本の試掘坑を設定し、確認調査を実施した。その結果、調査予定地西側を中心に、瓦礫類を埋め立てた整地層が確認され、赤く被熱した瓦類やさまざまな建築材、ガラスビン類、金属製品などが出た。それらは昭和20年(1945)7月6日深夜の甲府空襲により発生した大量の廃棄物で、さらに下層からは近世に遡ると思われる遺構も確認された。また二の堀沿いには粘質土が堆積することから、かつては低湿地ではなかったかと推測されている。したがって近世の遺構が想定される西側を中心に、教育委員会では本調査の必要性があると判断し、さらに堀にかけての東側についても、二の堀の立ち上がりラインを見極める必要性があることから一部を調査必要とした。

本調査については社団法人山梨労働者医療協会、甲府市教育委員会、財団法人山梨文化財研究所の三者協定にもとづき、甲府市教育委員会の指導のもとで山梨文化財研究所が実施することとなった。山梨労働者医療協会と山梨文化財研究所間で委託契約を交わし、委託期間を平成21年(2009)7月より平成23年(2011)3月31日(調査、整理、報告書刊行まで)とし、平成21年(2009)7月18日より調査を開始した。なお委託期間については、諸事情により平成23年(2011)9月末までと変更している。

【試掘調査の概要】

甲府市教育委員会では平成21年(2009)5月21日から6月9日までの間、試掘調査を実施した。

調査予定地内に試掘坑(幅2m×長さ12~15m)を6本設定し、1~6号トレンチとした。各トレンチの状況は以下のとおりである。

(1号トレンチ) 地表下20~160cmに赤褐色の瓦を主とする瓦礫層が堆積し、それ以下では黒褐色砂質土が堆積する。

(2号トレンチ) 地表下50~130cmまでが瓦礫層で、下

層は谷地形と考えられ、馬の下顎骨が出土している。〈3号トレンチ〉瓦礫の堆積は地表下50~70cmと薄くなり、70cmで造構確認面となる。東西方向に最大幅3mの溝が確認された。

〈4号トレンチ〉地表下15~130cmの間に瓦礫が堆積する。その下は黒褐色粘土層となり、地表下160cmで地山と思われる褐色粘土層となる。

〈5号トレンチ〉地表下25~55cmに瓦礫が堆積し、地表下90cmで地山となり、礎石の根固め石、土坑、柱穴など確認した。

〈6号トレンチ〉地表下30~40cmに瓦礫が堆積し、地表下60cmで地山となり、近世とみられる土坑を確認した。

以上を整理すると、調査区西半分では地山が確認されることから、安定的だったと考えられ、近世以降の土地利用が認められる。東半分では昭和20年の甲府空襲の後片付けによる瓦礫が堆積し、南から北へ、西から東へ堆積方向が認められた。昭和20年以前では低湿地と考えられ、その部分に江戸初期、1610年頃の開削とみられる二の堀が存在する。

第2節 発掘作業の経過

本調査は、平成21年(2009)7月18日より2ヶ月程度の予定で開始した。調査地点には道側、西寄りに平屋の屋根を設けた駐車場があったため、調査に入る前に上屋の撤去および舗装面の除去を工事側にお願いし、撤去工事が終わリ次第、直ちに調査に取り掛かった。

重機により表土剥ぎを開始してまもなく、厚さ1mもの多量の瓦礫、焼土層の堆積面が現われた。昭和20年7月の甲府空襲の際に周辺から集積された瓦礫で、重機により除去した。ただ、それらも甲府空襲を物語る生の歴史資料のため、被熱した瓶など目に付いた良好な資料についてはピックアップして遺物として扱うこととした。中には明らかに現山梨県庁の屋根の軒先瓦とわかるものもあったことから、調査地点周辺だけではなく、甲府市中心部から広く集められた廃棄物の集積であることがわかった。

東側では二の堀の立ち上がりを探すため、トレンチ状に長く掘り下げた。その結果、現二の堀に近い場所からセメントで半らに仕上げた土間と壁の基礎が立ち上がる倉庫らしき建物跡が見つかった。やはり戦災によって焼失したものであったが、残土置き場確保のた

め拡張して調査することができず、トレンチ状の細長い調査区の範囲内で実測、写真撮影を行ったのち重機により埋め戻した。

道に面した西側では、瓦礫層直下から戦災で焼失したとみられる民家跡が検出された。礎石や根石が配置し、土間状に堅い面が広がり、流しあるいは風呂とみられるセメントでできた枠や、井戸が見つかり、下水を流す排水溝も存在した。それらを調査したのち、重機を入れて下層を掘り下げ、ピットなどを調査した。また井戸が4基検出されたため、最終段階で重機により半蔵し、断面調査をしている。

調査終了後、埋め戻しを開始し、9月1日には埋め戻しを完了した。

【発掘調査担当】

柳原功一（財団法人 山梨文化財研究所）

【調査参加者】

秋山高之助・小幡敬一・河西元彦・岸本美苗・奥石邦次・小林求・坂本行臣・鷲田勝夫・清水征二・醍醐三郎・角田勇雄・早川栄藏・原島進・長谷川規愛・平賀早苗・藤巻敏弥・古郡明

【調査日誌】

平成21年(2009)7月18日(木)晴 調査区北辺を西側より東側へ向って重機で掘削した。甲府空襲後の片付けに伴う多量の瓦礫が出土した。甲府市教委平塚氏来歴。

7月19日(金)曇時々小雨 重機による表土剥ぎ。東端で甲府城二の堀の立ち上がりまで掘削。民家跡確認。原正人氏、平塚氏ほか見学者あり。

7月20日(土)晴 重機のみ稼動。

7月21日(日)曇 重機稼動。機材搬入。作業員による調査開始。東端の建物基礎精査。ポール撮影。共立病院木内氏と打ち合わせ。UTY・NHK来歴。原氏・春日正伸氏(山梨平和ミュージアム館長)見学。

7月22日(月)曇時々小雨 上層造構の精査、民家礎石の検出。ポール撮影。望月祐仁・平塚氏、林陽一郎氏(市教委)見学。山梨日々新聞記者取材。

7月23日(火)晴 東端トレンチ内実測。民家跡断面図作成。西側溝状造構の掘り下げ。山梨日々新聞に記事掲載。今福利恵氏(学術文化財課)見学。

7月24日(水)雨時々晴 調査区内の水抜き。上蓋作り。東端のトレンチを重機にて埋め戻す。民家跡の下層掘削、精査。

7月25日(木)曇 重機稼動。

7月26日(金)晴 重機稼動。本日で重機終了。

7月27日(土)晴時々雨 土蓋作り。シートを掛ける。溝精査。

7月28日(日)晴 北側溝内精査。

7月29日(月)曇 朝、調査区内の水抜き。溝状造構掘り下げ。

精査。木内氏米跡。

7月30日(火)晴 1号溝完掘。遺物取り上げ。木内氏米跡。
7月31日(水)曇 ピット半蔵のち完掘。搅乱、1号溝、土管列精査。

8月3日(木)晴 1・2号土坑、ピット等精査。木内氏米跡。

8月4日(金)晴 1~14号ピット実測。1号土管列完掘。2号土坑下層のポール撮影。土管列端に水溜めの発見。

8月5日(土)晴 3~5号土坑半蔵、実測。6号土坑完掘。17号ピット実測。1号管列中間で桶検出。基礎周辺の搅乱精査。土管列実測。

8月6日(日)休晴 1号溝のち雨 確認面の掘り下げ。ピット確認。溝実測。

8月7日(月)曇時々雨 溝付近掘り下げ。溝内精査。19~23号ピット完掘。実測。7号土坑写真撮影。

8月11日(金)晴 2号溝内完掘。23・24号ピット、7号土坑実測。土坑内配石精査、写真撮影。見学者2名、木内氏米跡。

8月12日(土)休晴 集石2箇所のポール撮影。2号溝掘り下げ。7号土坑調査。

8月17日(木)晴 7号土坑調査。集石土坑2箇所写真、半蔵。土馬出土。道構確認作業。

8月18日(金)晴 7号土坑内より茶臼出土。完掘、実測、写真、取り上げ。8~10号土坑は井戸と判明。小ピット調査。木内氏米跡。

8月19日(土)曇 ピット、土坑の平面図実測。8~10号土坑セクション図のち完掘。8号土坑からは石臼など出土。2号石溝調査。

8月20日(日)休晴 井戸口3基掘り下げ。上層をポール撮影する。2号配石溝周辺精査。正木季洋氏(学術文化財課)ほか見学者あり。

8月21日(月)休晴 井戸調査。土坑半蔵、実測、写真。

8月24日(木)晴 確認面の精査。土坑、搅乱調査。ピット実測。

8月25日(金)晴 20~21号土坑半蔵、次測。調査区全体を開け、空隙に偏る。木内氏米跡。

8月26日(土)晴 精査、ピット半蔵など。

8月27日(日)休晴 調査区内清掃。シート・土囊の片付け。

8月28日(月)休晴 井戸掘り上げ。ビルの屋上より空撮。ラジコンによる全体写真撮影。重機による埋め戻し開始。木内氏、平塚氏米跡。

8月29日(火)休晴 井戸を重機により断ち割り。断面および井戸内精査。重機による埋め戻し。木内氏米跡。

8月30日(水)晴 重機による埋め戻し。

8月31日(木)休晴 片付け。道具の整理。機材搬出。重機による埋め戻し。木内氏米跡。

9月1日(金)晴 重機による埋め戻しは本日にて完了。

第3節 整理等作業の経過

整理作業については、平成23年(2011)3月末報告書刊行に向け、発掘調査終了後より遺物洗浄などの作業を開始した。しかし諸般の事情により整理作業が一時中断し、作業が遅れたため平成22年(2010)11月25日付で委託期間延長依頼を提出し、6ヶ月延長の平成23年

(2011)9月30日までを委託期間とすることになった。

遺物は水洗、注記ののち、報告書に掲載する資料を抽出し、さらに実測を要する遺物と、写真のみ掲載の遺物に分けた。出土遺物は戦災時の瓦礫類、陶磁器類を主とするが、江戸・明治・大正期、戦前の資料も存在する。そこで近世に遡るとみられる資料は優先し、昭和20年前後の資料については状態の良いものを厳選して実測し、被熱により歪んだビン類や金属製品は写真のみとした。陶磁器類については外形、断面のみ実測したのち、デジカメ写真により撮影した絵柄のデータを合成した。またその他の遺物については従来どおり原図作成ののち、トレース、図版組みを行った。

なお、出土遺物のうち戦災資料の一部については、平成23年4月10日より9月30日まで、甲府市朝氣に所在する山梨平和ミュージアムの企画展「山梨の戦争遺跡展」において展示された。

【整理作業参加者】

伊藤美香、岩崎満佐子、大村明子、角屋さえ子、梶原薰、川崎二美、岸本美苗、鶴原ゆかり、河野さおり、小林典子、三枝千穂美、齊藤ひろみ、崎田貴子、佐野真雪、須田泰美、竜沢みち子、田中真紀美、中川美治、中川美千子、永沢淳子、永田恵、林紀子、原野ゆかり、藤井多恵子、藤原五月、古郡明、柳本千恵子、横田杏子

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

甲府城下町遺跡は甲府盆地中央北縁に位置する甲府市内にあり、県史跡甲府城跡を取り巻く周辺、現在の中心市街地とおむね一致する。昇仙峡方面より南流して笛吹川に合流する荒川の支流のひとつ、相川が形成した扇状地面（相川扇状地）に位置し、一条小山を中心に作られた甲府城の外堀にあたる二の堀、三の堀および相川に囲まれた範囲が甲府城下町遺跡である。このエリアには今日、山梨県の公官庁やJR甲府駅が所在し、山梨県の中心部となっている。

本調査地点周辺は甲府城西側の二の堀外側である。ごく緩い南傾斜をもつおむね平らな地形で、JR中央線に近く、病院、マンション、飲食店、店舗、住宅が密集する地域である。甲府駅南口から徒歩5分程度の至近距離にあり、近年では駅周辺の再開発、区画整

理に伴い、周辺各地点で発掘調査が実施されている。

二の堀は現在、石垣等で護岸された幅3m程度の細い水路として残っている。調査区北西より東へ流れ、調査区北東で直角に折れて南流し、再び折れて甲府市中心部へ向って東流する。かつては現在よりも規模が大きく、石垣のない素掘りの流路であったと考えられている。堀の幅については試掘調査でも確認できていおらず、今回の調査地点で西側の立ち上がりを確認することが課題のひとつとされた。

調査区東南、二の堀が折れた外側に東面して金山神社がある。「新青沼老人憩いの家」を兼ねた地区の公民館的な建物内に神殿を祀るもので、1918年の甲府市古絵図には「金山」とあることから、その時点では金山神社があったとみられるが、それ以前の古絵図には記載がみられない。



図1 遺跡の位置（丸印は調査地点）



図2 甲府城下町概念図

●	堀
- - -	甲府城下町塁路
—	水路
—	甲府上水
△	河

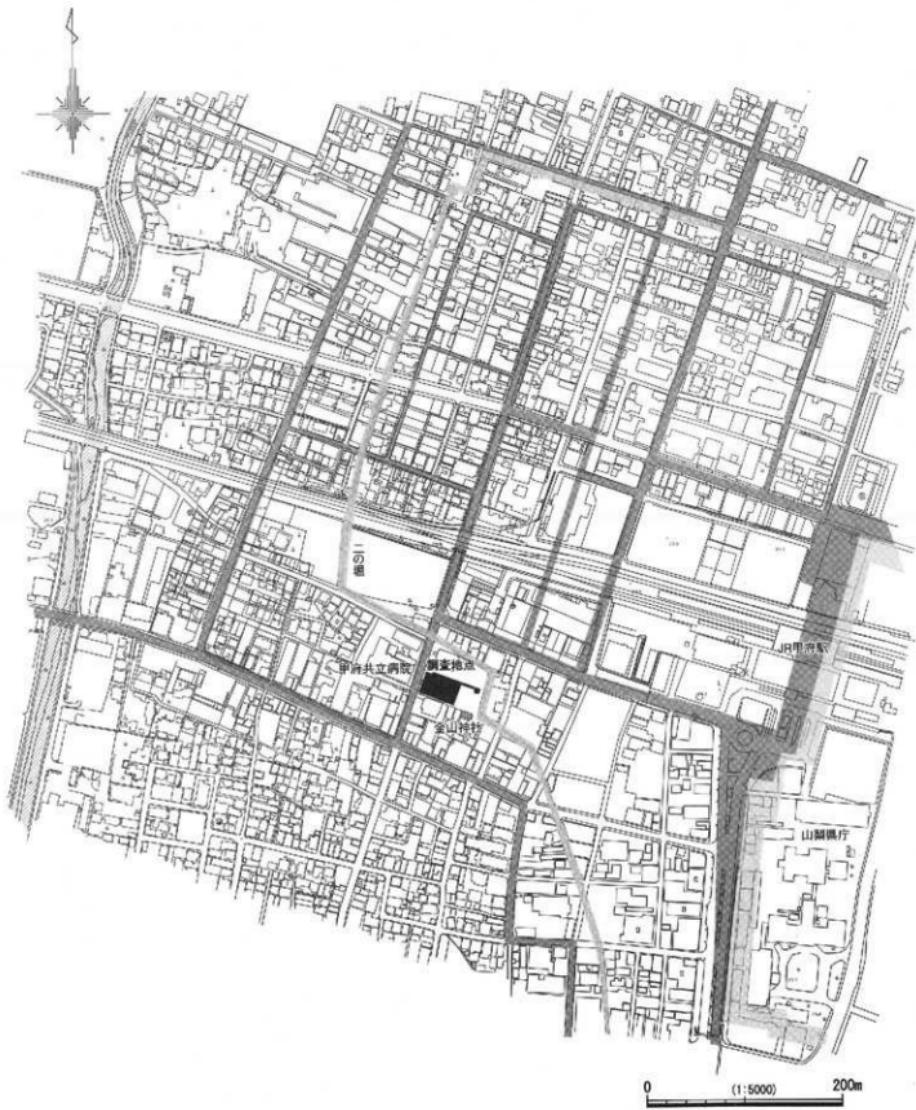


図3 甲府城下町概念図と調査地点



図4 空襲による焼失範囲（九印は調査地点、甲府市役所 1949『甲府市制六十周年誌』を改変）

調査地点は、調査前まで長田組土木株式会社の駐車場であった。屋根をかけた半屋の上屋が調査区南西側に2棟あり、東側は舗装のみのオープンスペースとなっている。長田組は1905年創業の県内では老舗の大手ゼネコンで、6階建ての社屋ビルが調査区北側に建つ。また西側には南北に通る道をはさんで甲府共立病院の建物が建つ。

第2節 歴史的環境

県指定史跡甲府城跡および城下町の形成については「甲府城跡」に詳しいので以下に要約する。

古代以前に関しては、各地で縄文土器片や奈良・平安時代の土師器が少量ながら出土している。

甲府城築城以前、鎌倉初期には一条小山（のちの甲府城）周辺に一条郷と一条氏館跡があり、一条忠頼が謀殺されると、その夫人が菩提の尼寺を建てたといわれ、のちに14世紀後半には一蓮寺（時宗）に改められた。また大永4年には武田館の前衛としての砦が築かれたともいわれる。

天正10年（1582）の武田氏滅亡のち、一時織田信長が甲斐を支配したが、本能寺の変ののち天正18年（1590）まで徳川家康が支配し、平岩親吉を城代とした。この頃築城に着手したという説があるが、調査では検証されていない。

天正18年の小田原の役で甲斐が豊臣領となると羽柴秀勝が一時支配したのち、加藤光泰が天正19年（1591）から文禄2年（1593）まで支配し、武田氏館を修築した。文禄の役のさなかに光泰が没すると浅野長政の支配下で甲府城が本格的に築城されたことが穴太積の石垣や浅野家家紋をもつ金箔瓦からわかる。この文禄2年（1593）から慶長5年（1600）は甲府城の築城期とされる。

関ヶ原の戦後、徳川が甲斐を再領し、平岩親吉が再度城代となり、その後寛文元年（1661）まで城番制と

なった。この頃の修築に関する資料は少ない。

次の徳川綱重・綱豊が甲府藩主となった寛文元年（1661）～宝永元年（1704）は甲府城の大規模修復が行われた時期である。

宝永元年（1704）～享保9年（1724）は柳沢吉保・吉里が甲府藩主となり、吉里が甲府城に入城すると家臣団とその家族らで推定2万人の人口増となり、城内のほか城下では武家地を中心に都市整備が行われた。また宝永3年（1707）には大改修が実施されている。

享保9年（1724）～慶応2年（1866）は甲府勘番支配となった。享保12年（1727）には大火により城内の多くの建物が罹災したが、大規模修復は実施されなかったという。

現存する甲府城下町の絵図、地図類より調査区周辺の土地利用を確認すると次のとおりである。

①甲府城下町絵図（柳沢文庫所蔵）1705年頃か 相川御門に面して通りが描かれているのみ。

②甲府城下町絵図（甲州文庫蔵）1845年 町崖として描かれた後、絵図補修時には白地である。

③棲家甲府絵図（坂田氏所蔵）1849年 緑地である。

④甲府古絵図 1918年「金山」と記され、調査区南東に存在する金山神社が記載されている。

⑤甲府市地図 1941年 新青沼町27、28一、28二、29番地の区画線を描く。

⑥甲府市地図 1950年頃 新青沼町27番を一、二に分割する。

調査区内では新青沼町段階の各番地に対応する地割りに連なる溝が存在し、調査区内で検出された民家跡もそうした中に収まるものである。また下層の遺構の一部は江戸後期の町屋の一部に相当するものとみられる。

参考文献

山梨県埋蔵文化財センター 2005『県指定史跡 甲府城跡』
山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第222集

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

試掘調査時のデータをもとに、まず重機で昭和20年の甲府空襲時の瓦礫を含む表土を除去した。瓦礫層直下に遺構があれば調査を行うが、近現代よりも近世段階の遺構の調査に主眼を置いた。近現代の膨大な遺物のうち、廃土内の遺物については、戦災資料としての価値をもつ遺物に限定し、選別しながら一括資料と

して目に付いたものを回収した。

上層、表土直下の戦前の遺構に入り込んだ遺物については、厳密には戦災時の遺物および直後の片付け段階の遺物に分けられるが、いずれにしても遺物量が多いため遺構一括として取り上げている。近世段階の上坑に関しては、通常どおり出土地点を光波測量機につないだパソコン（タブックおよび取り上げソフト「遺

橋くん』で実測した。

集石などの遺構についてはボール撮影による写真から図化を行い、また井戸については断面を重機で半蔵したのち、土層断面を写真から図化した。

全体図についてはおおむね掘り上がった段階でデジカメ搭載のラジコンヘリにより空撮を行い、図化した。そのほか俯瞰写真に関しては長田組土木および共立病院の屋上から撮影した。

第2節 層序

調査区南壁中央に深掘りを行い、地表下19mまでの土層を確認した。その地点での土層堆積状況は以下の通りである。

- 1層 アスファルト・パラス 駐車場の舗装面と基礎。
- 2層 黒褐色粘質土 (10YR3/2) 炭化物、礫、焼土、焼土小ブロックなどを含む。
- 3層 黒色粘土 (10YR2/1) 漆黒の粘土層で、緻密。
- 4層 黄褐色粘土 (25Y5/3) サビ粒入り。
- 5層 褐色粘土 (10YR4/4) 砂粒を含み、サビ粒が入る。
- 6層 黄褐色粘土 (25Y5/3) サビ粒入り。
- 7層 褐色砂質粘土 (10YR4/4) やや粗。サビ粒やや多。
- 8層 黄褐色粘土 (25Y5/3)
- 9層 黑褐色粘土 (25Y3/2) やや灰色味をもつ。

また1～3号井戸および4号井戸で断ち割りを行い、前者では深さ3m、後者では深さ4.5mまで土層断面を確認しているので参考になる。それによれば、おおむね黒色粘土層と青灰または黄オーリーブ粘土、砂質土、砂層の互層となっている。

第3節 遺構

調査区中央には南北方向に上管列および右組でできた2号水路が通り、北壁に沿うようにL字形状の右組溝に接続している。水路で左右に分けられた調査区西側には上層に民家跡（1号建物跡）が存在し、その周間に井戸が計4基見つかった。1号建物跡は戦災時に焼失したらしく、1号水路の中にも瓦礫や焼土が入り込んでいる。下層には蛇行する自然河道の2号溝が存在する。調査区東側では下層面の調査でピット群や根石が見つかり、建物跡が推定された（3号建物跡）。また中央には東西方向に7個の長方形を呈したセメントのベースが並んでいるが、それらは調査前に建っていた駐車場の屋根を支える柱の基礎列で、同じものが南壁にいくつか見え隠れている。調査区の北壁を東に伸ばすようにして二の堀方向へトレントを入れたとこ

ろ、東端ではセメントで土間を作った建物跡が検出され（2号建物跡）、昭和20年7月の戦災で焼失した建物と考えられた。東端は二の堀の立ち上がりの有無を探査するため、やや広めに調査したが、堀の痕跡は確認できなかった。

【建物跡】

〈1号建物跡〉（第5図、図版2・3）覆土上層検出の礎石建ち建物。重機による表土剥ぎの際、焼土を伴う礎石列および礎石下の根石の配列を確認した。褐色粘質土の確認面よりも上層にあたり、焼土のあり方から甲府空襲時に被災した焼失家屋であろうと判断し、礎石面を精査し、ボールにより図化用写真を撮影、断面図を作成した。断面図作成の際、礎石が残るものについては礎石下の根石を半蔵し、図化した。根石は場所によって礎の数や規模に違いがあるが、長径10～15cmの細長い礎を1か所につき少い場所で4～7個、多いところで20数個を、直径60cm、深さ20～40cm程度の掘り方に円形に詰め、長径35～50cm程度の角礎の礎石を載せた状態で遺存する部分がある。このように本来、根石上に礎石を載せたものであったが、根石の代わりに小砂利を掘り方に詰めたもの、根石上にセメントを流して礎石を載せたもの、掘り方内に収まるような礎石を入れたもの、根石を伴わないもの、根石の量が少ないものなどがある。礎石は材が直接接していた部分が黒変した例、表面が焼けて剥離した例などがみられた。中央に近い礎石はひとつ大きいか。

建物内には根石を幅30cmで、13×1mの大きさでL字状に巡らせた部分があり、レンガを部分的に敷き詰めている。その東脇にはセメントで長方形に作った1m×60cmの枠があり、炊事場施設かと考えられ、その周辺が土間のように硬化していた。

重機による廃土中に、1号建物付近から大形石臼などが出土した。石臼は水車用と思われる所以、この建物の性格を意味するものではなく、礎石あるいは飛び石などに転用したものと思われるが、確實に建物跡に伴うともいえない。

〈2号建物跡〉（第6図、図版2）二の堀脇の細長いトレント内に確認されたセメントの土間をもつ倉庫跡および隣接するセメントのたたき、石列を含む一角である。たたき面は東西5.5m、南北1mの範囲で確認でき、壁の基礎に相当する立ち上がりは幅25cm、高さ25cmで、たたき面からは5cmほど立ち上がる。西辺の一部と南辺が確認され、北辺は調査区外にかかるため未検出である。また東辺には立ち上がりの基礎が存在しないこ

とから東側に出入りをもつ倉庫とみられる。基礎の上には1.3m、1.8m間隔で六角形のボルトと方形の座金がついた径1.5cmの10cm程度の軸4本が立ち上がっており、いずれも西方向に強く曲がっている。被災時の建物の倒壊方向を示すものだろう。

南辺の基礎に沿うようにして炭化材が長く存在し、4箇所に礎石状の自然石、加工石材、レンガが置かれていた。礎石の上に角材を置き、その脇にセメントで上間を作っているらしい。礎石のひとつには一面のみ磨き上げて面取りをした角柱状の石材が用いられていた。石材の年代、用途は不明だが、非常に丁寧な仕上げで、建築石材か石碑の一部と思われる。

セメントの土間は強く焼けた部分と焦げて黒くなつた部分があり、建物が直接強い火力で焼けたことを示している。南側中央、基礎に接したところに土管が埋設しており、東側の二の堀方向に向かって直線的に排水溝が埋設され、その上には部分的にレンガを敷く。上管列は重機により大半を除去してしまったが、調査区外にまで伸びていることは確かで、調査区東壁に土管の統きが顔を出している。二の堀へ排水するための配管であり、建物の土間が水を扱う作業場だったのかもしれない。

二の堀に平行するように石列があり、建物基礎の東端とつながっている。その石列から東側は堀に向って傾斜面となっていて、落ち込みが始まっているとみられる。石列から西側にはセメントで土間が作られ、建物周辺のさまざまな構造物あるいは別の建物の土間の一部とみられる。なお、建物に伴う遺物は全くない。

堀への落ち込みが始まると考えられる2号建物跡東側は黒褐色粘土が堆積した低湿地状を呈し、水が浸み出すぬかるみとなっている。かつての堀の立ち上がりがどこにあったのか確認することができなかったが、土管列がさらに東へ伸びていることから堀の外側だったことは確かで、戦災時では現在とほぼ同じ状況にあったとみられる。ただし、調査区北壁断面を見ると、建物のすぐ東側から地盤が浅く窪み始め、さらに、ちょうど調査区北東コーナー付近から東へ向って瓦礫の堆積層が強く傾斜していることから、堀に向うようにして、法面が落ち始めているようである。焼土を多量に含んだ瓦礫層は、建物跡東側で1m以上あり、大量の戦災時の瓦礫で地盤を平らに埋め立ててかさ上げしている。

建物跡南側に続く石列は、倉庫状の建物跡とは直交し、二の堀に平行するように直線的に並んでいる。石

は1段のみで、石列脇にセメントを打ち、1条の隙間をあけて長方形のセメントの面があり、別棟の建物があつたことを示している。その面も直接焦げたかのように黒変している。

〈3号建物跡〉(第7図、図版6) 調査区南東、下層面で検出された根石をもつビット列で、33・47・48・49号ビットをはじめとするいくつかのビットを結ぶ範囲である。根石状の集石をもつビットは周辺にいくつか存在するが、うまく等間隔で配置しない。建物構造、規模は不明ながら、その一角に礎石立ちの建物があつたことは確かで、一応3号建物跡としておく。根石の構造は西側に位置する1号建物跡とほぼ同じことから、昭和以前、可能性としては江戸末まで遡ると考えられる。

【土坑】

〈1号土坑〉(第8図、図版9) 調査区中央、北壁寄りに位置する。1.65×1.2mの楕円形で、深さ53cm。覆土中には棗瓦類が多量に投棄されていて、被熱により赤変したものや、炭、焼土塊も含まれていた。戦災直後の片付けに伴う廃棄坑と思われる。土坑内は東側がやや深く、縁を4個伴うが、混入であろう。また南東隅には湯飲み茶碗が完形で1点出土している。

〈2号土坑〉(第8図、図版4) 調査区中央、北壁寄りにあり、1号水路の南側に位置する。2.5×1.5m、深さ26cmの東西に長い長方形の掘り方内に円礫を敷き詰めた土坑である。四隅およびその中间に柱を立てたらしい小ビットがあり、中间の小ビットをつなぐように中央に仕切り溝があって、1m×90cmの2つの方形スペースとなっている。底面には5~20cm大の円礫が1.7×1.2mの範囲で整然と敷き詰められ、縁下には砂が堆積する。縁は縁引きの上面にも重なっていたが、上層については敷き詰められた状況ではなく、乱れた状態である(平面図は下層縁出土状況)。縁の表面にはサビが付着していた。仕切り状の溝は東壁際にも存在し、両の柱穴をつなぐように直線的な溝となっている。また北壁中央西寄りには方形のビットがあり、腐朽した板材を2~3枚立て、その南側には直径1.5cm程度の細い丸木を8本程度、コ状に立て並べている。柱穴の柱と掘り方の隙間に材を詰め込んだようである。この土坑が何か判然としないが、水槽、水溜め、あるいは過渡装置的な施設、トイレかと思われる。伴出遺物はない。

〈3号土坑〉(第8図、図版10) 調査区東側、東壁寄り中央付近に3~5号土坑が東西に並ぶ。3号土坑は

1.05×1.05 m、深さ30cmの不整円形で、断面は皿状。サビ化した赤褐色の間層がある。

〈4号土坑〉(第8図、図版10) 1.05m×85cm、深さ23cmの精円形で、断面はボール状。覆土中には小礫を含み、焼土小ブロックが散在する。

〈5号土坑〉(第8図、図版10) 4号土坑の東側に位置する。1.1m×95cmの円形土坑で、深さ28cm、断面形は皿状である。

〈6号土坑〉(第8図、図版10) 調査区東側、東壁にかかるように存在する不整形土坑で、5号溝北端部に関連した土坑。2×2.4m、深さ60cmで、底面はでこぼこし、中央および北西隅の崖み内に複数の礫が入っている。覆土中には多量の焼土小ブロックを含む。

〈7号土坑〉(第8図、図版5・6) 調査区西側、2号溝に囲まれた内側に位置する集石土坑。径1.7mの円形で、深さは60cm。断面は円筒形で、底の中央に径40cm、深さ20cmの穴が開いている。底面は全体にサビ化しているが、中央の穴内は脊形があり、サビ化していない。上層には確認面と同レベルでやや大きめの礫が西側の一部を開けて詰め込まれている。礫はやや大きめで、角張ったものが目立つ。覆土は褐色土と黒色土の互層で、中央孔に向うように窪んだ堆積状況を呈していた。土坑の底には南壁に寄るようにして、底から3cm程度浮上して茶臼の上白が完形で見つかった。また上白に伴うタガラしき輪状の竹材が横にはずされたように置かれていた。中央穴の中から磁器片が出土している。

〈8号土坑〉1号井戸参照。

〈9号土坑〉2号井戸参照。

〈10号土坑〉3号井戸参照。

〈11号土坑〉(第9図) 調査区中央東寄り、4号井戸の南西に位置する。1.9×1.3mの不整円形。

〈12号土坑〉4号井戸参照。

〈13号土坑〉(第9図) 調査区ほぼ中央、埋め桶状遺構の17号土坑横に位置する。1.5×1.15m、深さ32cmの精円形土坑で、東側が丸く窪んでいる。

〈14号土坑〉(第9図、図版10) 調査区中央や南寄りにある1.5×1.2m、深さ30cmの不整円形で、東側には19号土坑と接している。土坑中には上層に建物根石の礫がまとまって存在し、底面には丸が1枚存在した。また木片も出土している。

〈15号土坑〉(第9図) 調査区中央南寄りに位置し、54~57号ピット群の上層にある。1.1×1.1m、深さ28cmの方形土坑。細かな炭化物が充満し、中间には白

色の石膏のような物質が間層をなしている。焼土小ブロックも散在する。覆土中の出土遺物としては堺瓶の類がやや日立った。戦災時の片付けに伴う土坑かと思われる。

〈16号土坑〉(第9図、図版10) 調査区南壁寄り、中央に位置する。下層に4号溝が重複する。4.4×2m以上の隅丸方形で、覆土中には炭、焼土ブロックを多量に伴い、ガラス瓶、板などを含む。また覆土下層からは腐りきっていない生の杉の葉が多量に出土した。戦災時の遺構と思われるが、杉の葉に関してはよくわからない。また下層から底面にかけて植木鉢、急須、茶碗、皿などが底に置いたように、完形に近い状態で出土している。底面は青みがかった粘土層である。

〈17号土坑〉(第9図、図版5) 2号水路中央やや南、東脇に接するようにして検出された埋め桶遺構。桶は直徑95cmで、5枚の板を木釘で留めた円形の底板を半らに埋設する。側板はわずかに木片が残るのみで腐食し、ほとんど形を残していない。内部には礫が多数入り込んでいたほか、戦災時に生じた焼土ブロックが含まれている。2号水路の栗石が樋にかかるようにして存在することから、樋よりも水路は新しいことは確かであるが、戦災時に桶は口を開けていたらしく、戦災の瓦礫、レンガ片などが入っていた。近世の遺構では埋め桶状遺構と呼ばれ、甲府城下町遺跡内ではいくつかの類例が調査されているが、機能については便槽とされている。

〈18号土坑〉(第9図) 調査区中央、南壁寄りに位置し、4号溝の上層にある。80×66cmの精円形土坑で、深さは10cm。断面は桶状である。内部から炭化していない板材片数本が出土した。

〈19号土坑〉(第9図、図版10) 調査区中央、やや南寄りに位置する。1.1×1.1m、深さ22cmの円形土坑で、西側に14号土坑が隣接し、19号土坑を切る。

〈20号土坑〉(第10図、図版10) 調査区東側、3号建物跡付近に位置する。1.6m×80cm、深さ30cmの不整精円形土坑。覆土は炭化物が多く、黒色を呈し、土坑右側からは破碎された多数の瓦片、さびた鉄製品が存在する。この土坑内からはまとまって三叉トチン、四又トチン、鋤型片、粘土塊などが出土し、鉄錠製作を中心とする遺物に関する廃棄物をまとめて捨てた廃棄土坑であろう。隣地の金山神社の存在と合わせて、鑄物師の活動が本遺跡内で行われた形跡とみることができる。

〈21号土坑〉(第10図) 調査区南壁寄り、4号溝東側

に位置する。3号溝の北端にある $2 \times 13\text{ m}$ の方形土坑で、深さは22cm。北西隅上層に3号建物跡の根石のひとつが乗る。土坑中央付近には礫が集まり、炭化物も多い。

(22号土坑) (第10図) 調査区東側、5号土坑南に存在する $80 \times 90\text{ cm}$ 、深さ14cmの円形土坑。東側に焼土層が存在する。

(23号土坑) (第10図) 調査区中央東壁寄りに位置する。一部掘り過ぎているが、 $75 \times 60\text{ cm}$ の楕円形で、赤褐色粘質土を主とする。

(24号土坑) (第10図) 調査区南東隅近くにあり、調査区南壁にかかるようにして検出された。 $90\text{ cm} \times 1.2\text{ m}$ の浅い円形土坑で、深さは10cm、断面形は皿状を呈す。土坑中央から東壁外にかけて礫が雜然と広がり、それらの中に焰片や陶器片が含まれている。近世に遡る土坑である。

【埋没河道・溝・石組溝・土管列】

(1号石組溝) (第4・11図、図版3・4) 調査区北壁沿いにある東西方向の石組溝(水路)で、長さ15m、幅約50cmを測る。溝中に2列の石組を設けたもので、2本の溝を掘削したのち石積みを行ったことが1号石組溝西端の2本の平行した溝の存在から推定できる。西端は2号水路の土管列北端とL字に連結し、1号民家跡付近の下水、雨水を二の掘へ排水する構造となっている。また1号水路中央には北方向から連結する同じ構造の石組水路があり、T字形を呈して接続する。北からの排水を東方向へ流す構造である。

(2号石組溝・1号土管列) (第4・11図、図版5) 調査区中央にある南北方向の土管列および暗渠。南半は丸太を2本置いた向脇に礫を置き、細かな礫を配した石組溝で、北半は土管列となって、1号溝の西端にL字に連結している。1号土管列の土管は直徑15cm、受け口部で20cm、長さ63.5cmの素焼きで、幅40cmの素掘りの溝中に設置されていて、わずかに南から北に向って勾配が付いている。中央、土管列と暗渠の中間に素焼きの甕が正位で埋め込まれている。底がない甕で、内部は灰色砂層が充満し、底部付近ではサビ化した褐色砂層となっていた。浸透井であろう。また甕の北側7mには溝の中央に橋が埋設されている。直徑45cm、高さ20cm程度の橋で、底はない。これも浸透井の一種であろう。溝の中央南寄りには溝の脇に接するようく埋め橋を埋設した17号土坑が隣接する。2号溝の礫が土坑上層にのることから溝よりは古く、溝との

関連性はないと考えられる。

(1号溝) (第4図、図版3) 調査区北壁寄りに位置する東西方向の自然河道で、1号水路の下層に存在する。2号溝に連続するようみると見えるが、接続部分が試掘坑に切られるため、同一溝かどうかが確定ではない。幅は調査区外にかかるため3.5m以上、長さは20m以上である。近世以前に遡る埋没河道と見られるが、時期不明。

(2号溝) (第11図) 調査区北西にU字形に蛇行する自然河道で、断面は皿状。長さは25m以上、幅約1.5~2.5m。黒色粘土層を覆土とし、底面は不明確で、立ち上がりもよくわからない部分が多い。礫や砂層は入っていないがサビ化した面がある。遺物は全くない。1号溝に連結し、1・2号溝は同一と考えられる。

(3号溝) (第7図) 調査区中央東側、南壁寄りに位置する南北方向の溝。北端に21号土坑があり、そこから南へ延びた形を呈する。長さ3.2m、幅30~80cmのはば直線的な溝で、断面形は皿状。西側に4号溝が平行する。

(4号溝) (第9図、図版10) 調査区中央東側、南壁寄りに位置する南北方向の溝で、東側に3号溝が平行する。また16号土坑と重複する。長さ6m以上で、南端は調査区外に延びる。幅は1.4~1.7m、深さ28cm。

(5号溝) (第10図、図版10) 調査区東壁寄りに位置する南北の直線的な溝で、北端は6号土坑中から派生し、長さ10m、幅40~50cm、深さ38cmを測る。53号ピットを切り、2号溝と平行することから、戰災直前の新しい時期の所産か。

【ピット】

(1号ピット) $44 \times 30\text{ cm}$ 、深さ14cmの楕円形。覆土は黒褐色粘質土で焼土粒、炭化物を含む。

(2号ピット) $74 \times 50\text{ cm}$ 、深さ32cmの不整楕円形。覆土は黒褐色粘質土でローム塊、鉄製品、炭化物を含む。

(3号ピット) $44 \times 35\text{ cm}$ 、深さ23cmの円形。覆土は黒褐色粘質土で炭化物、セルロイド片、陶磁器片を含む。

(4号ピット) $75 \times 67\text{ cm}$ 、深さ45cmの隅丸方形で、覆土は黒褐色粘質土で炭化物をやや多く含み、ローム塊、陶磁器片を含む。

(5号ピット) $85 \times 42\text{ cm}$ 、深さ18cmの楕円形で、覆土は黒褐色砂質粘土で、焼土塊を含む。

(6号ピット) $1.5\text{ m} \times 97\text{ cm}$ 、深さ26cmの溝状を呈した楕円形で、東側は調査区外にかかる。

(7号ピット) $1.22\text{ m} \times 70\text{ cm}$ 、深さ31cmの不整形。

〈8号ピット〉 31×25cm、深さ9cmの円形。

〈9号ピット〉 28×29cm、深さ18cmの円形。覆土は黒褐色粘土で、炭化物、黄色粘土塊を含む。

〈10号ピット〉 41×41cm、深さ7cmの円形。

〈11号ピット〉 32×30cm、深さ27cmの円形。

〈12号ピット〉 65×61cm、深さ57cmの不整円形。覆土は黒褐色粘質土で炭化物、遺物を含む。柱穴状。

〈13号ピット〉 30×23cm、深さ10cmの円形で、覆土は黒色粘土。

〈14号ピット〉 40×37cm、深さ20cmの円形で、覆土は黒色粘質土。焼土塊を含む。

〈15号ピット〉 44×42cm、深さ27cmの円形。覆土は黒褐色粘土。

〈16号ピット〉 45×44cm、深さ30cmの円形。覆土は黒褐色粘土。

〈17号ピット〉 1.26m×86cm、深さ7cmの楕円形。覆土は黒褐色粘質土へ暗褐色土。

〈18号ピット〉 27×26cm、深さ11cmの円形。覆土は黒褐色粘質土。

〈19号ピット〉 33×29cm、深さ9cmの円形。覆土は黒褐色粘土。

〈20号ピット〉 65×40cm、深さ7cmの楕円形で、覆土は暗褐色土。

〈21号ピット〉 36×28cm、深さ12cmの円形で杭が立つ。覆土は黒褐色粘質土。

〈22号ピット〉 35×32cm、深さ7cmの円形で、覆土は黒褐色粘土。

〈23号ピット〉 1号土坑南に位置する。74×80cm、深さ15cmの隅丸長方形で、中央に25×30cmの平たい疊が存在する。覆土は黒褐色粘土で、疊、瓦片、焼土などが入る。

〈24号ピット〉 調査区北西、壁近くに位置し、1m×70cm、深さ32cmの隅丸長方形土坑。西側は建物根石とみられる配石があり、断面観察では根石掘り方が土坑を切っている。

〈25号ピット〉 47×42cm、深さ11cmの円形で、覆土は黒褐色粘土。

〈26号ピット〉 82×71cm、深さ24cmの円形で、覆土は褐色粘質土で、被熱瓦など戦災時の遺物を含む。

〈27号ピット〉 33×31cm、深さ9cmの円形で、覆土は褐色粘質土。

〈28号ピット〉 50×45cm、深さ13cmの不整円形で、覆土は疊混じりの褐色粘質土。上層の根石の残りと見られる。

〈29号ピット〉 1.13m×43cm、深さ19cmと細長い溝状を呈する。覆土は黒色粘土。

〈30号ピット〉 22×20cm、深さ6cmの円形で、覆土は黒褐色粘質土で小疊を含む。根石の残りとみられ、1号建物の一部の可能性がある。

〈31号ピット〉 31×30cm、深さ8cmの円形で、覆土は黒褐色粘質土でサビ化している。

〈32号ピット〉 17×15cm、深さ11cmの円形で、覆土は黒色粘土。

〈33号ピット〉 34×27cm、深さ11cmの円形。覆土は黒褐色粘質土で、杭が立つ。

〈34号ピット〉 29×27cm、深さ9cmの円形。覆土は黒褐色粘質土で表皮を残した杭（自然木）が柱状に立つ。

〈35号ピット〉 1.26m×55cm、深さ18cmの不整楕円形。覆土は黒褐色砂質土で、角材片や戦災時の遺物を伴う。

〈36号ピット〉 2.39×1.62m、深さ11cmの隅丸長方形。

〈37号ピット〉 51×49cm、深さ17cmの円形で、36号ピットと重複する。覆土は暗褐色砂質土。

〈38号ピット〉 74×66cm、深さ12cmの不整円形で、断面は皿状。覆土は黒褐色粘質土で、焼土小ブロック、炭化物を含む。

〈39号ピット〉 56×39cm、深さ13cmの不整楕円形で、断面皿状。覆土は黒褐色粘質土で、焼土小ブロックを含む。

〈40号ピット〉 13×12cm、深さ6cmの円形。覆土は黒褐色粘土で杭を打ち込んだようなピットである。

〈41号ピット〉 67×52cm、深さ6cmの楕円形で、断面は浅い皿状。覆土は暗褐色砂質粘質土。炭化物、焼土小ブロックを含む。

〈42号ピット〉 32×30cm、深さ6cmの円形。覆土は暗褐色砂質土で、断面は浅い皿状。

〈43号ピット〉 1.42m×98cm、深さ22cmの半円形。覆土は黒褐色粘質土で、疊、コンクリート片、焼土小ブロックを含む。

〈44号ピット〉 1.4×1.05m、深さ10cmの不整形。覆土は黒褐色粘質土。

〈45号ピット〉 51×48cm、深さ12cmの円形。覆土は黒褐色砂質粘質土で、疊、陶器片、焼土塊など戦災時の遺物を含む。

〈46号ピット〉 74×45cm、深さ16cmの楕円形。覆土は黒褐色粘質土で、焼土塊を含む。

〈47号ピット〉 3号建物跡の礎石根石のひとつ。58×46cmの楕円形ピット内にやや大きめの平たい円疊3個を据え、小ぶりの平たい円疊5個が乗る。深さ17cm。

〈48号ピット〉 $54 \times 45\text{cm}$ の隅丸方形ピット内に $13 \sim 20\text{cm}$ 大の円礫 10 個を配した根石を伴う。

〈49号ピット〉 $96 \times 65\text{cm}$ 、深さ 13cm の楕円形で、 10cm 大の礫約 30 個からなる根石を伴う。

〈50号ピット〉 5 号溝南に位置する。 $1 \times 1.2\text{m}$ 、深さ 8cm の浅い皿状ピットで、内部に根石をもつ。根石は $90 \times 50\text{cm}$ の範囲に広がる。

〈51号ピット〉 $1.05\text{m} \times 77\text{cm}$ の不整形で、深さ 16cm 。内部に礫を複数伴うが、根石か否かの判断は難しい。

〈52号ピット〉 $38 \times 34\text{cm}$ 、深さ 9cm の円形。

〈53号ピット〉 5 号溝に切られるようにして存在する半円形の根石を伴うピットで、 $90 \times 60\text{cm}$ 、深さ 25cm を測る。根石は $40 \times 50\text{cm}$ の範囲に重なるようにまとまる。 3 号建物内の根石のひとつとみられるが、周囲の根石との関連性が明確ではない。

〈54号ピット〉 $2.05\text{m} \times 46\text{cm}$ 、深さ 20cm の溝状。覆土は黒褐色粘質土。

〈55号ピット〉 $15\text{m} \times 38\text{cm}$ 、深さ 10cm の溝状。覆土は黒褐色粘質土。

〈56号ピット〉 $2.02\text{m} \times 89\text{cm}$ 、深さ 21cm の不整形。覆土は黒褐色粘質土。

〈57号ピット〉 $2.83\text{m} \times 96\text{cm}$ 、深さ 17cm 。覆土は黒褐色粘質土。

〈58号ピット〉 $1.76\text{m} \times 64\text{cm}$ 、深さ 18cm の不整長辺円形。覆土は黒褐色粘土。

〈59号ピット〉 $57 \times 53\text{cm}$ 、深さ 8cm の円形。覆土は黒褐色粘土で、集石が入る。

〈60号ピット〉 $37 \times 30\text{cm}$ 、深さ 11cm の楕円形。覆土は黒褐色粘土。

〈61号ピット〉 $95 \times 71\text{cm}$ 、深さ 19cm 。覆土は黒色粘土。

〈62号ピット〉 $63 \times 61\text{cm}$ の根石の範囲をピットとした。

〈63号ピット〉 $39 \times 27\text{cm}$ の根石の範囲をピットとした。

〈64号ピット〉 $25 \times 17\text{cm}$ 、深さ 15cm の円形。覆土は黒色粘土で、炭化物を含む。

〈65号ピット〉 2 号石組溝南端脇に位置し、 $42 \times 33\text{cm}$ 、深さ 8cm の円形

〈66号ピット〉 1 号土管列南端の漫透枠とみられる高さ 40cm の甕を埋設したピットで、 $45 \times 45\text{cm}$ の円形。

【井戸】

〈1号井戸〉(第2図、図版7) 調査区西寄りに位置し、 $2 \cdot 3$ 号井戸とともに1列に並ぶようにして存在する。当初、 8 号土坑として調査開始した。確認面では直径 2.3m の円形で、断面形は上に向って広がる漏斗状を

呈す。 -80cm のところに段があって平たい礫を円形に組んだ1段程度の石組みがあり、そこから下はやや狭くなる。石組みの面は半たく、足場のようである。深さ 3.3m で底面に達し、底面は直径 1m である。上層の石組みまでは多量の礫で埋めていて、一部空洞になっていた。また井戸の断面形は底部近くが膨らんでいて、何らかの理由で径を大きく確保している。井戸内には竹筒が2本立つようにして存在し、井戸を廃棄して埋める際に、儀礼として井戸が息をできるように埋めたものであろう。

〈2号井戸〉(第2図、図版7・8) 調査区西側に位置する。調査時には9号土坑として調査を開始した。遺構確認面よりもやや浮いた状態で集石が存在する。円形に並べた配石中にやや細かな礫を詰め込んだ集石の状態を示し、その外側にまで礫範囲が広がっている。その円形配石は1段のみで、整然としたものではなく、井戸廃棄時に伴う詰め石であろう。上層の集石を半截したところ、集石中から土馬が1点出土している。井戸の廃棄に伴う供犠とみることができよう。井戸は直径 1.8m の円形で、底面は -2.6m 、直径 50cm を測り、深さは1号井戸より 90cm 深い。断面は上に開いたラッパ状。井戸の廃棄の時期は、土馬の存在から近世と思われる。

〈3号井戸〉(第2図、図版8) 調査区西側に位置する。調査時には10号土坑として調査開始した。直径 1.7m 、深さ 2.5m で、2号土坑とほぼ同じ深さ、断面形であるが、底面で直径 86cm を測り、2号井戸よりやや径が大きい。上層のラッパ状に開いた部分に $3 \sim 4$ 段程度の石積みで壁を固めている。ただし全周せず、北側から東側にかけて約半分が遺存するが、その他の石積みは井戸内に崩落したものと思われる。上層には細かな礫を多量に投棄し、集石状を呈していた。

〈4号井戸〉(第2図、図版9) 調査区中央西寄りに位置し、民家跡の北東隅に当たる。直径 80cm の円筒形のセメントでできた井戸枠を載せていて、昭和40年代頃まで使われたらしい。確認面から 20cm 程井戸枠が突出して検出された。枠の内側には板状の材が残存し、また枠に接するように腐朽した竹筒が直立していた。井戸を埋める際の行為であろう。また覆土上にはいくつかの大形礫が投棄されていた。井戸の掘り方は直径 1.4m の円筒形で、内部に幅約 15cm 、長さ 182cm 、厚さ 2cm の板で組んだ直径 $60 \sim 65\text{cm}$ の桶状の筒 4 本程度を積み上げている。筒は竹製のタガで 4 箇所程度を継めていて、下側がやや広く、上側が狭くなっている。

井戸上層には石とともにビール瓶、ジュース瓶、ゴムホース、鉄パイプ、木材、タワシ、硯、レンガ、湯飲み茶碗、長靴など昭和40年以前の多様な廃棄物が投棄してあった。

重機により筒の構造を残しながら断ち割って可能な限り掘り下げたが、周囲の土砂を除くと、桶はたちまち崩壊した。これは内部に土砂や大きな礫が入っているため、内部の重みに耐え切れず筒が分解した。4本目の筒の頭が見えたところで、それ以上を深く掘ることができなかつたため調査を断念したが、3本目の下で深さ4.28m、直径1.22mの掘り方を示し、4段目で底面に達するとすると、深さは推定5mとなる。4段目の筒は上端で直径6.5cmを測り、-14cmの深さまで確認している。覆土中には砂利層が充満し、3段目までの覆土とは全く異なっていた。4段目の深さは不明だが、ろ過的な装置とも思われ、3段連結した桶の規模よりも短い構造だったかもしれない。いずれにしても最下部を確認することはできなかった。

井戸の年代については、昭和40年代まで維持されたことはわかるが、開削時期については不明である。上端の井戸枠がセメントの円形枠に張り付いていたことから、意外と新しいとみられる。他の井戸に比べ格段に深く、江戸期に比べ、近現代の井戸は深い傾向があること、傍らに1号建物跡があることから、1号建物跡に付随する井戸であろう。

第4節 遺 物

(1号井戸) (第14図、図版11) 1は直径34cmの穀白(上白)で、供給口と側方打込み挽手孔を結ぶ直角付近で約半分に破損する。供給口は一辺3.5cm程度の方形で、裏面の分画数はわかりにくいか、5か。溝は彫り込みが弱く、また著しく磨耗し、中央部では厚さ2.5cmと磨り減っている。2は直径31.5cmの穀白の下臼で、軸穴を通るラインで割れ、一部欠失する。中心に直径3.5cmの輪孔が貫通し、丸く盛り上がる。裏面は上げ底状を呈し、裏面の縁に相対する溝をもつ。表面の目は磨耗し、溝は明瞭ではない。1よりも径がわずかに小さいがセットで組み合うとみられる。3は長さ7.5cmの方形の砥石で、各面とも研磨するが、主に表面を磨り面として盛んに用いる。表面には段差が生じ、一部亦変する。4は石鉢で、直徑は推定33cm。底面に削り出しによる短い脚があるが、全体像は不明。内面はやや磨耗し、外側は薄く黒変する。

(2号井戸) (第14図、図版11) 1は直径10.5cmの土師

質皿で、内面は黒変し、外側は向かい合うようにして黒いシミが垂れ、灯明皿とみられる。2は鉄釉碗。3は土師質の土馬で、井戸上層の集石下層から出土した。頭部と4本の脚を欠き、鞍を付けていない。推定長6cm程度の小形品である。たてがみや尾はつまみ出しにより形成する。県内にいくつかの事例があり、これまで時期が定かでなかったが、近世の事例を確実に含むことが明確になったといえる。

(4号井戸) (第15図、図版11) 1は磁器盃で、直徑5.4cmの小形品。徳利を持ち、茶色い筆を被った狸の絵と、「酒買ふて今日も狸の腹づみ」の句をプリントする。2は直徑7.7cmの湯呑み茶碗で、側面に「月」等の4文字を盛り上げるように書く。全く同じものがもう1点ある。3は高さ8.5cmの湯呑茶碗で、側面に青地を削ることで白い文字としている。4は直徑11.8cmの御飯茶碗で、側面に2と同じ文字をもつ。5は直徑11.9cmの御飯茶碗で、口縁部内外に向き合うように褐釉を垂らし、底部外面に幅広の面取りをする。6は長さ15cmの長方形の硯で、上側の縁にブドウが実る様子を浮き彫りにし、裏面には線刻で「雨傘」と刻む。山梨県早川町雨畠地区の特産品、「雨畠石」で作った「雨畠硯」である。ほぼ完存するが、ほかの茶碗類同様に井戸内に遺棄された理由はわからない。茶碗類は昭和40年代かそれ以前で、井戸の廃絶時期を示唆する。

(1号土坑) (第15図、図版11) 1は直徑7.5cmの磁器杯で、外側には対照して花の文様を型紙摺りで施す。なお、型紙摺りは明治4~19年頃の技法である。

(6号土坑) (第15・16図、図版11) 1は直徑15cmの土製蓋で、中央に大きな擬宝珠形の摘みをもつ。表面、側面には4の表面に似た紋肌状の細かな凸凹文様がある。竈、釜関連の何らかの小道具とみられ、4の蓋とセットとなる蓋と推測される。長石などの大型粒子を含む。2は土製コロコロ(七輪)で、ラッパ状に開いた口縁部には縦位の隆帯が3箇所に付く。また口縁部内面には横位のスタンプがあり、「燃料/経済/熟強/特許/第一九四五六号」と特許番号を記している。内面には灰が付着する。3は「敷輪(しきわ)」と呼ぶ竈道具。直徑32cmの土製で、筒状を呈し、側面上下がタガ状に隆起する。小形の移動式竈の上に載せることによって羽釜をのせて使用できる。径が広い方をして用いる。4は土製(瓦質)蓋で、直徑推定48cm。半円形のドーム状で、側面には下向きC字状の把手がある。把手周辺はよく研磨されている。外側には細かな凸凹の文様をもち、1の表面の凸凹文様と同じであ

る。頂部に煙突状の短い立ち上がりが付き、その上に1の蓋が載るのであろう。少量の木炭で御飯を炊くための蒸し竈の蓋である。5・6はセットとなる陶器壺と蓋。5は遺構外出土だが、明らかに6とセットになることから、ここで図示しておく。直径8cmの蓋で、上面には灰釉を施釉し、鉄軸で3つの点を描く。6は内外面灰釉を施釉した蓋で、側面に蓋の文様と対応するように鉄軸の点の文様が3ヶ所ある。7は磁器の植木鉢で、口縁は半縁で縁部が波状をなし、底部には脚が3個付いている。胴部には向き合うようにして、口縁部上面には3ヶ所に梅が咲いた様子を盛り上がるようにならべて描かれている。8は灰色の素焼きの植木鉢で、高さ11cm、底部中央には直径1.6cmの孔が開く。9は小形描り鉢で、直径は25cm、内外面鉄釉を施釉する。10は全面に施釉した白色の陶製オロシで、碗状を呈する。磨り面には3.5mmと2.5mm四方の2種類の小さな四角錐をびっしりと並べ、非常に鋭利である。側面には3段の細かな方形の文様を付けている。11は石臼上白片で、側面に方形の挽手孔をもつ。裏面の分両面は推定6で、溝の彫りは深い。全体にタガで丁寧に整形するが、とくに側面は継位のタガ痕が密に付けられている。穀臼にしては径がやや小さく、茶臼かと思われる。

〈7号土坑〉(第16図、図版11) 1は磁器茶碗で、土坑の中心にある小ピット中より出土した。手描きによる草花文を描いた染付で、肥前。近世、18~19世紀。2は完存の茶臼上臼。直径21cm、高さ12cmで、中央には直径2.5cmの円形の供給口がある。側面には対称して2箇所の打込み挽手孔がある。2.5cm四方の方形の孔で、挽手孔周辺は菱形文を削り出している。裏面の磨り面は磨耗により溝がない状態となっている。

〈14号土坑〉(第16図、図版11) 1は茶色のガラス製おはじき。円形で、表面には円い線に囲まれたもみじの葉のような文様を陽刻する。

〈15号土坑〉(第16図、図版11) 1・2は薬瓶。1は高さ約7cmの透明ガラス瓶で、外面には日盛り線を陽刻する。2は「大木製剤」と文字を陽刻した透明ガラス小瓶。

〈16号土坑〉(第16・17図、図版11・12) 1・2は小形の急須壺と身。1は直径5.6cmの蓋で、上面には薄く褐色味のある白色釉上に赤と黒で梅の花を描く。2は高さ5.5cmの身で、側面に赤と黒で梅の絵を描き、黒の吹き絵により葉を描く。把手を失し、表面には嵌入がみられる。3は湯呑み茶碗で、直径8cm。「寿」

と書かれた扇と梅の花の文様を6単位、放射状にゴム印で施文する。4は直径18.4cmの磁器皿。表面に縦・横で線を円を描く。5・6はガラス製小瓶。5は下膨れの無花果形を呈し、高さ6cm。白髪染めの染料瓶に類似がある。6は薬瓶で、体部は円筒形。7はピストル形のガラス小瓶で口はスクリュー栓である。長さは11.2cm。シロップ等の甘味料の小瓶か、ニッキ水など清涼飲用の小瓶と思われる。8は正面に「菊地原医院/電話三〇三」と陽刻のある断面扁円形の薬瓶で、側面には目盛りがある。9・10はインク瓶。9は緑色透明のインク瓶で、高さ4.8cm。底部外面には「45410」という数字を陽刻し、11はスクリュー栓。10は高さ6.4cmのインク瓶で、底部外面には「M」(丸善)を陽刻する。11はビール瓶。側面、底部近くに「NIPPON

BEER KOSEN CO LTD」、底部外面に「5」と陽刻がある。12・13は陶器植木鉢。12は素焼きで、直径20cm、底部は板目直底をもち、直径2.7cmの孔がある。被熱により赤変した部分が多いが、元は黒色だろう。13は直径26cmで、外面から内面の上側に青色の施釉をした植木鉢。底部は上げ底、口縁部は肥厚し、底部中央に直径2.7~3cmの孔がある。底部には抉りを3箇所もつ。14は瓦質火鉢(火消し臺)で、直径19cm、高さ23cm。外面は横磨きが顯著で、黒色処理によりツヤをもつ。肩に把手が対称して付き、取手上面には沈線による施文がある。脚部は板目直底をもち、上げ底で、推定3箇所に脚を貼付する。

〈17号土坑〉(第18図、図版12) 1は御飯茶碗で、外面に銅版転写により百人一首の絵札らしき僧、公家、姫の3種の人物柄を配し、隙間を花文で埋め尽くす。2は直径88cm、厚さ2cm程度の埋積底板で、5枚の板を両端の尖った木釘2本ずつにより接合している。なお、図は自然乾燥した状態で同化したため、若干の縮小がある。周縁は片側(図の上側)のみ、面取りを行う。

〈19号土坑〉(第18図、図版12) 1は直径8cmの磁器碗で、御飯茶碗にしては小振りである。外面に染付により文様をもち、底部外面に中國製品の模倣かと思われる「咸□年製カ」の文字をもつ。

〈20号土坑〉(第18図、図版12) 1は鉄型状製品。長さ7.6cmで、細長い半円形を呈する板状の金属製品の型で、4つの円形の凸部(孔)をもつ。鐵鍋の把手(耳)鉄型である。胎土は焙烙に類似する。内面(円形内部をもつ側)のみ灰色に変色し、強い被熱で還元状態になっている。同様な資料が3号トレンチから出土している。

2～4はトチン状土製品。2・3は二叉トチンで、ともに長さ5cm程度と小さい。2が赤褐色の酸化状態を示すに対し、3は表面のみ灰が付着したように変色する。4は4本脚のトチンで、幅8.5cmと大形である。脚は太く、上面は丸い。これと同形のもの、脚のみのものが別にある。全体的に変色するが、とくに脚側の裏面が強く変色し、被熱を受けている。

（24号土坑）（第18図、図版12）1は直径7cmの磁器小碗または盃。外面にロクロナデ調整痕がある。2は陶器碗で尾呂茶碗に似た灰釉が内外面にかかる。外面から底部にかけて回転削りにより整形する。胎土の色調は灰色で、須恵質である。3は直径31cm、高さ5.8cmの土製焰燈で、内側に耳が付いた内耳となる。耳の上には唐印かと思われる円内に3つの刺突を加えたようなスタンプをもつ。またやや上げ底になった底部の中央には、直径5mmの孔が貫通する。焼成後の穿孔であるが、なぜ孔が開けられたのか不明。底部外面には細かな凹凸があり、土器制作時の圧痕が付いている。外面（側面）を中心にスス状の付着があるなど強く黒変する。

（7号ピット）（第18図、図版12）1は直径約7cmの磁器小碗。外面に白色釉を施釉する。2は高さ4.1cmの小瓶で、インク瓶型だが、やや小さい。

（16号ピット）（第18図、図版12）1は直径約29cmの敷輪で、側面に2箇所の円孔をもつ。瓦質で、外面とも黒い。下側（洋の狭い方）の設置面は、安定感を与えるために裾が張り出すようにわずかに広がっている。内面には推定3ヶ所に、補強のためと思われる縦位の隆線が付く。

（53号ピット）（第19図、図版12）1は御飯茶碗で、内外面に型紙摺りによる文様をもつ。

（1号溝）（第19・24図、図版12・13）1は高さ推定7cmの小形壺。鉄釉を内外面に施釉し、肩部には把手をもつ。胴径は8cmで、丸く膨らむ。胎土はやや軟質である。2・3は陶器ヒヨウソク。2は灰色の胎土に灰釉を施釉した白い色調である。3は中央に芯立てをもち、内外面鉄釉を施釉し黒っぽい。脚部は平安末の高台付环のように中実で、糸切痕をもち、底部中央に刺突状の円孔をもつ。4は陶製キセルで、扁平な胴部には表裏面に竜とみられる文様をもつ。両端の文様のない部分に茶色の施釉がある。5は鍛型状土製品で、内面には花弁状の型をもち、底部には2つの脚を割り出している。内面は黒変し、特に縁部が黒く、被熱を受けている。6は石板で、表面には片面にのみ縁に沿っ

て線を引いている。7は桶の底板と見られる円板で、左右に木釘2箇所ずつで板をつないで円板としている。表面は何らかの使用痕とみられる窪みをもつ。また縁部（側面）は内傾するようやや斜めに削っている。第24図35は蓮華座をもつ水盤で、直径29cm。内面は非常によく磨かれている。側面に8葉を彫刻し、蓮華座としている。寺院の水盤か、石鉢と思われるが定かではない。

（5号溝）（第19図、図版12）1は直径9cmの白色円筒の磁器容器で、戦時中の統制食器か防衛食容器かと思われる。

（2号建物）（第19図、図版12）1は土管で、内外面に黒褐色の釉を施釉する。

（1号石組溝）（第19図、図版12）1は高さ11cmの御神酒利で、肩部には沈線文をつける。内面は口縁部にのみ白色釉を施釉する。外面は被熱により黒変する。2は皿で、外面に2箇所の花をゴム印とみられるスタンプで施文し、内面には鮎と松を描く。3は染付皿で、内面には海あるいは川で網漁をする2人の男を描き、底面には四角内に「貞」を記す。4は長さ9cmのプラスティック製石鹼入れの蓋。

（2号石組溝）（第20図、図版12）1は漫透拂として溝の下に埋設されていた甕。底部を欠く。口縁部の複合口縁側面に花と蝶形を組み合わせた文様を回転により施文する。上の内外面が薄く変色する。2・3は土管で、長い土管列に用いられた土管の一部。2は長さ64cmで、素焼きのままの無釉で褐色を呈し、3は長さ62cmで、2と全く同形だが、表面には内外面に黒色の釉を施釉する。織ぎ手部は直径17～19cm、円筒部の径は12～13cm。

（遺構外）（第20～25図、図版13）1は焼塙壺の胴部片で、胴部にはスタンプで「・・麻生」と押す。内面は焼塙壺特有の薄紫がかった赤色に変色している。2・3は碗。2は口縁部外面から内面を灰釉、口縁部脇下半から底部を鉄釉掛けとした陶器碗で、内面には嵌入が入る。3は青磁碗。4は花瓶で、長さ12cm、口径5.8cmの竹筒形。側面には草花文様を染付する。5は直径10.6cmの碗。外面に5人程度の異人を描き、内面見込み部にも松竹梅をデザイン化した文様を描く。人物には金・赤・黄など多彩な色を用いている。6は直径約6cmの記念盃で、底部は銃弾が交差したデザインで高台をつくる。外側に星印と「齊藤」の文字、内面には「機関銃隊」「除隊記念」の文字を印字する。7～15は瓶類。7は高さ10cmの調味料瓶。底に「味の素」、

側面底部近くに「K」の文字を陽刻することから、内容物は味の素とわかる。8は高さ10cmの断面方形の小瓶で、底部外面にトンボとモモの図柄の商標を陽刻する。「桃谷順天館」の化粧水瓶で、内面に白褐色の付着物が残る。9~12は調味料瓶。9・10は食塩瓶とその蓋で、ともに緑色透明ガラスである。9は機械栓の蓋で、側面に穴がある。10の胴部には「TABLE SALT」底には菱文中に「S」を陽刻する。

11は高さ16.4cmの断面六角形の調味料瓶で、底には「分福」等の文字を陽刻する。12は高さ15.7cmの瓶で、底部付近に「MURA」の文字を陽刻する。瓶の内面にわずかに内容物が付着している。13は高さ5.5cmのインク瓶。14・15は薬瓶。14は高さ14.4cmで、正面に「菊地原内科醫院」、側面に目盛りがある断面円形の瓶。15は断面円形の瓶で、高さは13cm。側面に日盛りを陽刻する。16はハエ取りで、直径12cmの長い筒の端部が無花果形を呈している。筒部は破損しているが、おそらく1m程度であろう。17は磁器製オロシで、白色釉を施釉し、向かい合うようにして鋸く日を立てている。18~20は銅製碗で、仏具の六器とみられる。銅物製。18は直径5.6cmとやや小さく、19・20はほとんど同形で、口径は9cmと大きい。いずれも被熱破損し、変色する。21・22は瓶と蓋でセットとなる。21の蓋はいわゆる機械栓で、白磁の下半をコルクで巻いている。弦は欠失するが、鉄製とみられる。22は青色系の瓶で、底に「大閨」と陽刻することから日本酒の瓶である。高さ26cm。23は口径27.5cmの植木鉢。底には中央の径4cmの穴の脇に径2cmの穴を2個配している。脚は3。24はホーロー加工の白色の弁当箱。25は山梨県章の三つの人文字で「山」をデザインした軒丸瓦で、軒丸部の直径は24cm、長さ34cmと大形の瓦である。現在の山梨県庁舎別館(旧館、1930年=昭和5年建設)や山梨県議会議事堂(昭和3年建設)の瓦と同じであることから、甲府空襲の際に破損した県庁の瓦を廃棄したことがわかる。26・27は軒丸瓦で、三つ巴の周囲に珠文を巡らせている。26は軒丸部の直径14.5cmの丸瓦、27は軒丸部の直径7cmの桟瓦である。ともに被熱のため黒味が消え、灰色を呈している。意匠が同じことから、ともに同一の屋根を葺いた瓦と考えられる。28は鉄カブトと思われる鉄製品だが、遺存状況が悪く、錆で腐食している。29~34は石臼。29は6分画の溝をもつ直徑27.5cmの上臼で、供給口は直徑3.8cmの円形。裏面中央には直徑4cmの軸孔がある。供給口と逆側の側面に打込み挽手孔をも

つ。30は直徑35cmの完存する上臼で、裏面は4分画とみられ、間隔の広い粗雑な彫りの溝をもつ。供給口は直徑4cmで、その対側に打込み挽手孔をもつ。31は上臼の1/4程度の破片。32は直徑49cmと大形の上臼。供給口は12×9cmの方形で、非常に大きく、また上面に縁がないのが特徴的である。裏面は8分画で、深く整然とした目をもつ。水車小屋の石臼だろうか。側面には供給口と軸孔を結ぶラインと直交する方向に打込み挽手孔が向かい合う。33は上臼の1/4の破片で、直徑3cmの供給口があり、供給口側の側面に打込み挽手孔がある。34は約半分の上臼で、直徑は37cm。供給口は直徑3cmの円形で、裏面の溝は推定6分画である。36・37はその他の石製品。36は石鉢で、底部に削り出した短い脚部をもつ。直徑25cmで、内面には粗い鑿痕を残す。37は2号建物跡のコンクリートの基礎の下に用いられていた石材。一面のみを研磨し、3方の縁に面取り装飾を施した長方形の灰色の石材で、研磨面の中央付近を中心に台石として転用したらしく使用痕が10×20cmの範囲で残る。圓の下側にあたる部分は、粗く削った面に細かく叩きを加えていて、別の部材をL字につないだようである。記念碑や墓石周辺の部材のようにみえるが、本来何であったのかわからない。38は表裏面の中心に軸受け孔をもつ直徑52cmほどの円盤状の石材で、側面には正面に相当する側にのみ、格座間にてもみじの葉で均整唐草文を浮き彫りにする。無縫塔の下部、基礎の上に載る「中台」という部分に相当する部材である。墓石とすればかなり立派で、調査区周囲には寺院がないことから、民家の庭石、飛び石に転用されていたものか、あるいは瓦礫とともに廃棄されたものかと思われる。39・40は2cm四方、厚さ1.7cmの白色磁器製立方体で、それぞれ十文字に紐を通す孔が貫通する。裏面は無釉で、下駄状のごく短い隆線を2本並行にもつ。合計108個を安土刺ぎの最中に覆土中より回収した。うち2つには上面に直徑6mmの円孔がある。これは昭和初期~戦前に流行した陶枕で、中に紐を通して連結し、枕にカバーのように装着し用いる。涼しさを求めた夏用の枕で、かなり高価なものだったようである。復元によれば縦9列、横12列で、縦17.5cm×横23.5cmの長方形となっているが、現存例によれば横方向に更に5列存在し、横33.5cm程度と考えられる。被熱により一部溶け、付着物がある。出土遺物としては珍しい。

〈1号トレンチ〉(第26図、図版13) 1は現状で高さ8cmの磁器製人形で、中空。コートを着て右手をポケッ

トに、左手を曲げ胸に当てている。外套を着た軍人のようにみえる。靴底には赤色塗装が薄く残り、外套にはところどころに青色塗料が残っている。2は銅製の皿らしい円板で、直径17.5cm。径8.2cmの円板にドーナツ状の板を接合しているが、被熱し、平らに押しつぶされて亀裂があり、歪んでいる。3は「精神薬」「イセヤ商店」の文字を陽刻した高さ5.7cmの青色ガラス小瓶。4は「山寺」の文字をもつ鬼瓦。被熱のため、本来いぶしにより黒色のはずだが、褐色の酸化した色調に変色している。

〈2号トレンチ〉(第26図、図版13) 1は高さ2.8cm程度の小形の土人形で、飼を抱えた恵比寿像の背面である。素焼きで、本来は表裏重ねることで立体感のある像であったと思われるが、表面は剥離欠失し、指頭痕が付く。2は寛永通宝文鏡で被熱する。

〈3号トレンチ〉(第26図、図版14) 1は近世の土師質土器小皿で、口径8.8cm。2は磁器蓋で草の葉の文様を染付にて描く。3は磁器碗。鶴が飛ぶ風景を染付にて描く。4は口径11cmの陶器行平で、把手が付いた小鍋である。外面上半および内面に青黒い釉を施釉する。5は培壟で、推定直径31cm。外面～底部外面は黒変する。6は錫型状土器品で、直径7cmの容器形を呈し、底にあたる中央に直径8mmの孔が貫通する。底部外面には放射状沈線が3本みられる。内面は被熱のため灰色に変色している。7は平坦で、表面に文様をもつ十製錫型片。内面は被熱により灰色になっている。

〈4号トレンチ〉(第26図、図版14) 1は14×7.5cmの長方形の硯で、ほぼ完存する。文様や線刻はない。表面は黒色だが、割れ口は灰褐色を呈し、石材は砂岩とみられる。墨を擅る墨堂は楕円形に歪んでいる。

〈5号トレンチ〉(第26図、図版14) 1は2.5cm四方の方形基壇の一面上のみ階段をもつ、塔あるいは堂社を模した素焼き(土製、土師質)ミニチュアで屋根を欠く。近世、箱庭道具の一種。裏面には丸い窓みをもつ。

【実測外遺物】

〈1号井戸〉(図版14) 1は鉢底部類で、内外面、底部外面に鉄釉を施釉する。2は磁器碗皿類で、いずれも近世か。

〈4号井戸〉(図版14) 1はゴム製長靴。2は建築材の床面の一部とみられるタイルで、8角形の褐色タイルと小形方形の赤褐色タイルを組み合わせた床面のタイルと思われる。3は磁器湯呑み茶碗で、国化資料と同形製品。4は長さ50cmの鉄製バール。

〈1号土坑〉(図版14) 1は磁器碗で、直径5.6cm。外

面に染付で草文を施文する。

〈2号土坑〉(図版14) 1は緑色透明ガラスの小形皿で、直径1.4cm。おはじきか。2は磁器片碗皿類で、類似押捺などの施文をもつ。3は磁器碗ほかで、左の碗には焼き継ぎの跡があり、底部に朱で文字を書く。4は透明ガラス製管で、スポットのように中心に穴が開き、先端が細くなっている。

〈3号土坑〉(図版14) 1は水晶の結晶片。2は磁器製人形の一部で、青い上着を着て肘掛け椅子に手をかけた右腕である。3はキャップ状の磁器製品で、直径7cmの器の口縁内面がスクリューとなっている。用途不明。

〈4号土坑〉(図版14) 1は内面に葉の浮き彫りがある磁器皿で、内外面に青磁色を施釉する。底部外面には「□般店」の文字を印字する。2は茶色系の化粧クリーム瓶。底径5cmで、資生堂の「花椿」の陽刻がある。3は直径2.2cmの銅貨で、銭種は不明。4はふすま戸の引き手金具。直径8.5cm程度の銅製で、被熱により歪んでいる。

〈5号土坑〉(図版14) 1は磁器碗類。

〈6号土坑〉(図版14) 1は素焼きの筒状構造の器甕に直径2~2.5cmの円孔をもつ製品で、コンロの一部か。2は素焼き製火鉢またはコンロで、取手状に開いた口は下側か。裏面には剥離した受けがある。3は素焼きコンロで、口縁はL字に曲がり、外面には口縁部寄りに沈線をもつ。4は素焼き火鉢またはコンロで、長さ5.8cmの片口をもつ。5は22.2×10cm、厚さ3.8cmの赤褐色レンガで、2つの角を斜めにカットしている。6は青い容器形鉄製品で、洗面器かと思われる。7は直径4cmの磁器碗で、外面に線等の色絵をもち、底部には「東洋硬質磁器」の文字と富士山の商標をもつ。7は鍋等の取手で、取手部は幅7cm。8は鉄製戸車で、7×4cm。9はガラス主体の溶融したブロックで、大きさは17×12cm。強い被熱により白色に変色する。10は壺面部で、褐色釉の面に黒褐色の亀のデザインを押す。11は土管の受け口状の部分で、素焼き。側面に沈線をもち、土管とは異なる。12は陶製把手付き鉢で、内外面に灰白色釉を施釉する。13は型起しによる文様をもち、内外面に茶色釉をかけた灰皿か。14は青磁灰皿で、口径8cm。15は磁器製碍子で、1.8×5.3cm以上、厚さ1.4cm。円孔を2つもち、片方には釘状鉄製品が残る。16は磁器碗皿類で、スタンプ、吹き絵により施文する。17は直径14cm、長さ47cmのスレート製煙突片。18は被熱によりひどく溶けた透

明ガラス瓶で、「KIR □」の文字とキリンビールの商標を陽刻することから、ビール瓶と判る。19は被熱により溶けた高さ5.7cm、幅3.6cmの透明ガラス瓶で、断面は六角形。20は陶器片。21は磁器製人形とみられ、茶、青、緑、白で文様を施文する。

〈11号土坑〉(図版14) 1は土製ブロックで、全体像は不明。被熱により色調は還元状態を呈する。2は黒色系消酒あるいはワイン瓶で、上げ底を呈する。

〈15号土坑〉(図版15) 1は併詰片で、ひどく鏽びているが「□ KYO JAPAN」の赤い文字と魚あるいは竜の絵柄がかすかに残る。高さ6cm。2は直径4.7cm、高さ4.3cmの円筒形の鉄製缶で、周囲に石灰状白色物が付着する。3は魚焼用と思われる鉄製網。14×20cmの長方形で枠内に4本の鉄棒を通す。4は高さ6.5cm、幅4cmの茶色系薬瓶で、蓋が残り、内部に小さく固まつた黒色の内容物が貼り付いている。底部には「BF」の商標を陽刻する。5は口径2.2cm、高さ12cmの茶色系薬瓶で、底部に菱形中にSの「三共製薬」商標の陽刻がある。6は直径1.8cmの円筒形透明ガラスで、ハエトリ瓶の筒部。遺構外16と同一か。7は透明薬瓶で完存する。口径2.2cm、高さ14.2cm。正面に「タカシマ薬局」(縦)、左脇に日盛がある。

〈16号土坑〉(図版15) 1は白色磁器製の機械栓で、直径3cm、長さ3.4cm。2は黄色のアンプル瓶で、使用済のため11の部分を欠くが、高さ4.5cm、幅1.4cm。3は青色系半透明ガラスで無花果状を呈した高さ5.8cmの薬瓶で、被熱により潰れている。

〈17号土坑〉(図版15) 1は銅版転写による施文を含む磁器碗類。2は内外面、底部外面に黄色釉を施釉した陶器碗。なお、銅版転写は明治22年～戦前頃の技法である。

〈19号土坑〉(図版15) 1は七輪内に入るスノコ状土製品で、円孔が複数開く。2は高さ7.2cmの湯呑み茶碗で、上半に染付風プリント、下半に緑色釉を施釉する。

〈20号土坑〉(図版15) 1は内側に溶けた付着物をもつ鏽型状土製品。推定径30～40cmの容器形の部分で、外側は赤く変色し、内面はガラス質が付着したものがある。2は何らかの鉄製品。長いものは24cmある。3・4はレンガ状の土製品および粘土塊で、いずれも強く被熱している。一部には湾曲した部分があることから、鏽型片を含むとみられる。5は鏽型状土製品18点で、いずれもほぼ同じ文様である。完存するものは7.5×4.3cmで、4個の円文があり、三方に線をもつ。短

辺の2辺には輪花状の切り込みがある。18点中、内面(文様面)が灰色に変色したものは9点、赤味があつてほとんど変色していないものが5点、その中间色が4点存在する。これらは鉄鍋の把手(耳)鉢型で、2枚を重ねて鍋本体の鉢型に接合して用いたと考えられる(第4章第1節および図5参照)。6は無文の軒平瓦で、左端に丸いスタンプがある。7は燃しにより黒色を呈した軒平瓦片で、重郭的な陰線文を施文する。残瓦か。8は四脚トチの脚部。暗灰色に変色している。9はガラスが溶着した塊で、鉄分が付着して鏽化している。

〈21号土坑〉(図版15) 1は鼠志野に似た施釉を外面にもつ陶器碗で、高台側面に赤色の線を釉の上から引いている。内面は無釉あるいは釉が剥げた状態で呈す。2は崩壊した繩文土器(曾利II式)。3は12世紀代の青磁碗底部で、底部は削り出し高台。胎土は緻密な灰色粘土で、外面に薄い緑色、内面には緑・青緑色釉を施釉する。

〈3号ピット〉(図版15) 1は高さ約8cmの薄いセルロイド製人形。セーラー服のような赤い衣装で、手に何か持つが、土圧で潰れているため、どのような人形か不明。

〈7号ピット〉(図版15) 1は磁器製碍子で、5.5×1.7cm。直径5mmの孔を2つもつ。

〈16号ピット〉(図版15) 1は12.5×4.5cm大の黒色石板片で、厚さは2mmと薄い。2は長さ10cmのスポット状銅製品。先端は1.5mmと尖っている。3は長さ10.5cmの鉄片。

〈23号ピット〉(図版15) 1は緑釉地に緑・茶で施文した碗。

〈34号ピット〉(図版15) 2は陶器製ヒヨウソクで、内外面に鉄釉を施釉する。

〈45号ピット〉(図版15) 1は陶器甕底部で、外面全體に茶色の釉を施釉する。内面は灰色の色調である。

〈46号ピット〉(図版15) 1は磁器皿で、草花をスタンプした洋食器。

〈51号ピット〉(図版15) 1は方形の土板で、直径13cmの円孔をもち、内外面が被熱することから、コンロか釜の中敷きとみられる。2は陶器製ヒヨウソクで、内外面に茶色釉を施釉する。3は土師質皿で、底径6.3cm。近世か。

〈53号ピット〉(図版16) 1はおはじきとみられる青色系透明ガラス円板で、直径3.7cm。表面に交差した日本の旗を陽刻する。

（1号溝）（図版15・16）1は口径4.5cm、高さ3.3cmの化粧クリーム瓶。ピンク色の不透明ガラス瓶で1にはスクリュー栓。底部に「Pomgee」の文字を陽刻する。2は陶器の片口鉢で、内外面に灰釉を施釉する。3・4は磁器碗皿類で、型紙摺りのほか、色絵を付けたもの、スタンプ施文によるものなどがあり、明治以降、戦前の所産である。5は陶器碗皿類で、青の染付で文様を描く。近世か。6は脚の痕跡をもつ素焼きの火鉢で、器壁は1.2~1.5cmと厚い。近世に遡る可能性がある。7は1辺2.5cmの方形タイルで、表面には緑色釉を施釉する。8は土師質皿に鉄釉を掛けた灯明皿で、縁に黒色物が付着する。推定直径8cm、高さ2cm。9は土師質器皿で、底部は糸切のままで、高台状を呈す。近世か。10は磁器製立方体を呈し、上面隅に孔を持つ水差しと思われる。上面には何らかの文様をもつ。11は磁器皿類で、染付をもつ内湾した皿、方形の小鉢、四角い台をもつ皿のほか、戦前の統制食器とみられる食堂で使用されたらしい皿片がある。12は白色磁器皿で、内面口唇部に緑線、緑文字で「食B堂」（逆配置）とある。13は白色の磁器皿片。高台径3.1cmで、外面に文様、底部に「三日町」「富士柳（？）」の赤色印字がある。

（5号溝）（図版16）1は格子状の鉄製品。2は磁器製茶碗、皿片で戦前以前。

（1号建物）（図版16）1は方形の内側を円形に切り抜いた角に当たる部分の板状銅製品で、端は折り返す。表面には唐草文を浮き彫りにする。2は管の連結などに使う金属製リングで、両側に突起が付き、内側はスクリュー式のネジ溝がある。3は直径2cmの碁石。いわゆる那智黒である。4はかわらけ小皿片で、近世に遡る資料。直径10cm、高さ2.5cm。5は14.7×3.7cmの鉄製錠とスノコ状鉄製品。6は磁器碗皿類。銅版転写、紙版摺りを主とする。底部に「三添商店」と印字した徳利もある。7は直径1.6cmの球状土製品で、素焼き。

（1号石組溝）（図版16）1は長さ57cm、直径5cmの円筒形の鉄管。中ほどで潰れている。2は長さ13.8cm、幅8.5cm、高さ2.2cmのホーロー加工の石鹼入れで、底面には円孔が多数開いている。3はホーロー加工の蓋で、直径15.5cm。縁および中央の取手部を欠失している。4はコイルで、7×6×6cm。内部には銅線を巻いた巻線がある。5はコの字状を呈した錐状鉄製品で、20×7.5cm。断面は長方形で、先端は尖っている。6は電球の基部らしき円筒形の金属製品で、ほかにこれ

らが多数接着して塊になったものが複数存在する。7は17×15cmのJ字の鉄製品で、ネジが2ヶ所に付いている。棚受けのような金具か。8は長さ8cmの石英の結晶。9は緑色系のガラス瓶の底で、底は直径3.5cmで丸い。10は口径23cm、高さ18cm以上のホーロー加工の容器で、バケツか。底はない。11は鬼瓦の一部。褐色に変色する。12は陶器製大便器の破片で、高さは13cm。直角の角をもち、縁に染付で文様を描く。13も陶器製便器で、厚い白色釉を施釉し、染付で草の葉の文様を描く。内面は黒く変色している。14は口径22cm以上の椎木鉢で、色調は灰色。15・16は鬼瓦で、褐色に変色する。17はラッパ状に開いた鉄製品で、大きさは19×5cm。18はガラス瓶や板ガラスが融着した塊。19は枕瓦で、三つ巴文をもつ軒瓦。軒丸の直径は8cm。褐色に変色する。20は陶器製蓋皿の蓋で、直径9.5cm。上面には黒色釉を施釉し、木製蓋を模したように把手が付いている。21は陶器急須の把手。黒褐色で、長さ4.3cm。22は化粧クリーム瓶で、口径3.8cm、高さ6.5cm。乳白色の不透明ガラス瓶で、口はスクリュー式。23は「TABLE SALT」と墨刻された断面方形のガラス瓶で、青色透明ガラス。高さ9.7cm、幅4.8cmで、機械栓式の丸いガラス蓋を伴う。24は磁器製フックで、表面に緑色釉を施釉する。25は表札。白色磁器、長方形の蓋形で、表面に縦文字「□社員／□文徳」、左側面にも文字と印（朱）がある。9×6.5×2cm。

（2号石組溝）（図版16）1は角釘と鉤状鉄製品。2は「P.」の文字をもつインク瓶で、白色の磁器製。口径3.5cm、高さ5cm。3はセルロイド製の透かしをもつ薄い板状の一部で、直径4cmの青緑色。4はプラス柄で、骨製。10×12cmで、端に孔をもつ。5は3.5×4cmの水晶結晶片。6は金属製鉛で、直径3.3cm。

（遺構外）（図版17~19）1・6は電球の金属製芯部らしき部品が數十個まとめて接着した塊。ひとつの基部は直径2.7cm、長さ4cmの片側が閉じた円筒形で、製造工場の被災部品が廃棄されたものとみられる。2は鉄製鍋で、直径20cm、高さ5cm。3は錫製スノコ状鉄製品で、直径22cm。4はセメント製の流しかと思われる破片で、25×14cm大。タイルは貼っていない。5は磁器湯呑み茶碗で、口径6.2cm、高さ6.2cm。外面口縁部に文様があるが、剥げかけている。7は11×6×22.5cmの素焼きレンガを4段積み重ねた壁の一部で、27×34cm大。側面は黒変する。96の外壁タイルの壁体部か。8は白色磁器製碍子で、直径3.3cm、高さ

4.5cm以上。9~11は溶けたガラス塊。12は自転車のタイヤのホイールとみられる鉄製品の一部で、外側に両側を折り返した推定直徑70cm程度の輪の中心に、4.4cm間隔で径4mmの孔が開く。14は直徑12.5cm、高さ15cmの円筒形で、上面に2つの端子が突出するバッテリーのような構造を示す鉄製品。15は鉄板で、幅16cm、長さ70cm程度あり、縁には段が付く。16はスタンドの台のような鉄製品で、直徑18cmの皿状の中央に鉄棒が立つ。18は太い針金の束を針金で巻いた金属製品で、2つの束が連結されている。何らかの支線であろう。19は鉄筋の類。直徑8mm、15cmなど数種類ある。20~22は鉄製品。23は青色系ガラスが溶けて変形したもので、元は板ガラスだったのか、瓶だったのか定かではない。24は激しい高温で発泡した瓦とみられる。表面はツヤのある褐色に変色している。25は6.3×5.4cmの水晶の結晶体。打ち欠いた面があり、加工をしようとした石材か。26はセルロイド製の人形顔面部で、潰れかかっている。直徑9cm程度のドーム形を呈し、口には赤色、目には黒・白・青、髪の毛には茶色の薄い着色が残る。27は片面に布目痕をもつ9×5cmの長方形の黒色のゴム製品で、縁には糸でかがった小さな穴が連続する。29は溶けた鉛状の物体で、ともに長さ15.5cm程度。30は8×11cm以上、厚さ2.1cmのタイルで、縁に条線を引き、薄い緑釉を施釉する。96と同種のタイルで公的な建物外壁タイルか。31はコーナーにあたるタイルで、青緑のマーブル状の施釉をもつ。窓枠等の建築外壁タイルと見られる。32は19.5×4cmの長方形で、箱状を呈した鉄製品。直徑1cmと1.5cmの孔が4箇所開いている。33は4枚の鉄板を連結した何らかの機械部品で中央の軸には鋼線が巻いてある。8×4.8×9.5cm。34は溶けた緑色系ガラス小瓶で、側面には日盛りがある。口にはガラスの蓋があり、やはり溶着している。長さ15cm。35は青・白・緑の菱形のタイルを6角形に組んだ床面あるいは壁面タイルの一部で、6.5×5.8cm。36は幅1cm、長さ14cmの帯状鉄製品。37は溶けた板ガラス。38は鉄釜または鍋の底で、体部は欠失する。底径は13cm。39は14×10cmの鉄製品で、コ字状の間に断面四角形の軸を通して不明鉄製品。40は直徑20cmの鉄製円盤状製品で、2cm程度の立ち上がりがある。裏面には摘み状の突出が付属する。重量感がある。41は長さ59cmの直線的な鉄骨材で、片方の端部が丸く、鋼製の丸い受けをもつ突起が付いている。何らかの建築材の一部であろう。42は60cm以上のカーブした鉄製フレームで、何らか

の建築材の一部と思われる。フレーム側面にはネジが数箇所に付いている。44は電球で、直徑2.5cmの鋼製ソケットにガラス部が付いている。透明青色ガラスの電球部は欠損してほとんど残っていない。45は犬等の歯骨。長さ6cm。46は鉄釘、鉄片、鉄筋などの鉄類。V字状のものは爪切りで、長さ7.5cm。47は鉄製かすがい、鉄釘。48は12×2.5cmの細長い鉄板で、長さ13cmの梢円形の孔を2箇所もつ。49は7.3×5.5cmの長方形鉄板で、中央に直徑1.4cmの円孔をもつ。座金か。50は直徑9cmの皿状鉄製品で、中央は盛り上がりで2孔があり、周囲には花弁状の装飾をもち、縁に釘穴が3ヶ所ある。何らかの台座か壁に付けられた座金状のものだろう。51は櫛で、材質は不明ながら、木やプラスティックではない。赤味を帯び、骨または鼈甲かと思われる。52は壺か瓦片が溶着したブロックで、長さ17cm。53は鉄製かすがいで、長さ17.5cm。54は針金。55は長さ28cmの鉄棒。断面は円形。56は便器かと思われる陶器片で、白色釉の上に花鳥文様を染付にて描く。57は10.5×4.8cmの梢円形の鉄製品で、2枚を8個の銀で留める。パックの把手かと思われる。58は12×7cmの長方形鉄製品で、円形に近い穴が縦に2箇所開き、コンセントカバーと思われる。被熱してひどく歪んでいる。59は皿状に湾曲した鉄製品。60は直徑4.3cm、長さ8.5cmの金属製の円管で、端部がラッパ状に開く。器壁は2mmと厚く、被熱により赤変する。9×5.5cm。61は直徑9.5cmの金属製の花弁状の文様をもつ台座で、側面に3ヶ所のネジで固定するようになっている。62は鉄製の筒状製品で、直徑7.5cmの座金状を呈している。63は長さ13cmの鉄製トンネで、先端に5本の爪をもつ。被熱し、歪む。64は道具瓦で、11×8cmの梢円中に菊の花の文様をもつ。65は鉄製鍊で、長さ11.5cm以上。66はバケツ蓋で、表裏面がホーロー加工されている。中央が盛り上がり、把手を付ける孔が開く。67は直徑9cmの円板状ドーナツ形金属製品の四方に帯状の突出をもつ不明製品で、釘穴をもつ。68は透かし状の装飾をもつ鉄製品で、側の受けか。69は鉄製の蓋。22cm以上×17cm以上の長方形で、裏面に2箇所の突起がある。壁厚は6mmと厚く、重量感がある。70は半球状鉄製品で、25×10cm大。71も70と同一個体と思われる金属製品で、ひどく潰れている。72は銅板。3方の縁を折り返した21×10cmの長方形で、釘孔が4箇所ある。大きく歪んでいる。73は幅4cm、長さ26cmの梢円形鉄製品で、内側に機械仕掛けがある。何の部分かは不明。74は円筒形

鉄製品で、側面のボルト3本で連結している。直径8cm、長さ9.5cm。75は直径12cmの円板状を呈した缶の底で、内面はホーロー加工となり、3ヶ所に孔がある。76は連結された帯状の金具で、幅1.2cm、長さ10cm以上。77は直径4mmの銅製円管にボタン状の金属製品がついた不明金属製品で、被熱により一部溶けている。78は円筒形の碍子で、直径1cmと直径1.5cmの2種類のタイプがあり、後者では長さ18.2cmの完存例がある（写真下）。79は高さ8.8cmの碍子。下面以外には施釉し、側面下には緑色の商標と、青で「MK」の文字がある。80は高さ9cmの碍子で、正面には「岐定錘」などの文字が青で印字され、裏面にも「正」の印字がある。上寄りに貫通孔があり、下寄りにも孔がある。81は白色不透明ガラスの整髪料瓶で、口径5.2cm、高さ5.2cmの円筒形で、スクリュー栓。外面には4面の円文をもち、底部には中央に「星冠」、その周囲に「STAR CROWN SB ZEAL&CO HAIR POMADE」の陽刻がある。内面には緑色の付着物が残る。82は口径3.3cm、高さ5.2cmの不透明ピンクガラスの化粧クリーム瓶で、スクリュー栓。ブドウの実の陽刻を4つもつ。被熱により歪み、ガラス片が付着している。83は土製（瓦質）コンロ、あるいは行火片で、角に丸みがある立方体で、脚をもち、赤褐色を呈す。84は土製四脚トシンで、3本の脚を欠く。表面は被熱により黒く変色し、裏側は赤褐色のままである。表面に文様らしき沈線文がある。85は鉛涙とみられる平板状の土製品で、表面は丸みを持って反っている。86は高さ4cmの透明ガラス製品。87は砥石で、20×7cm、厚さ4.2cm。表面のみ使用する。88は淡い褐白色の建物外壁のタイル片で、L字に曲がったコーナー部分。1枚が6×11cm以上で、縦に筋が入る。89は鬼瓦片。表面が薄い灰色に変色する。90は樹枝状に溶けた金属で、鉛か。15.5×6.5cm大。91は陶器行平で、外面は回転削りのうち上半から内面に白色釉を施釉する。外面が薄く扁変する。92は網入りガラスで、左は裏面に細かな溝が平行に入り、右は透明のままである。93は石英が結晶化しつつある花崗岩で、15×9cm、高さ13cmある。珍石として昇仙峡方面から採集されたものと思われ、甲府駅周辺のみやげ物屋の店先に置かれた石であろうか。94は鉛物の鉄製鏡で、直径約30cm、高さ6.5cm。底部には高さ3mm程度の高台が付く。95は鍋または洗面器が平らに潰れた金属製品で、大きさは26×20cm。96は7のレンガ積み壁の表面を仕上げたと見られる外壁タイルで、7×22.5cmの縦に条線を

もつ褐色タイルを3段セメントで貼っている。裏面のセメントにはレンガの圧痕があり、7のレンガのサイズと一致する。タイルは厚さ2.2cmと厚く、セメントと同じ厚み分レンガ表面に塗っているため、タイルとセメントの厚みは4cm程度ある。97は直径15.5cmの白色磁器製味噌瓶。円筒形で、高さ12.3cm以上。樽形を模す。側面に「本天然純味噌」「一久●」「一久酒造甲府支店」「電話三三一二番」、両脇に稻穂と豆のデザインをもつ。内外面被熱により表面を中心に灰が付着する。98は口径4cm、高さ15cmの緑色ガラス瓶で完存する。胴部が歪んで潰れる。内外面に薄く灰が付着。99は銅製の仏具、ろうそく立て。口径3.2cm、底径3.9cm、高さ14cm。5段の膨らみをもち、内部は空洞。歪んでいる。全体に灰が付着し、脚部に欠けがある。100は自転車ペダルと思われる鉄製品で、全体にひどく歪む。大きさは長さ32.5cm。101は鉄製モーターで、13×16cm。102は民家の軒瓦。棟瓦で、三つ巴紋をもち、被熱により赤褐色に変色する。103は建築部材タイル。28×20cm、厚さ5.5cmで、セメントに15.5cm四方の青・緑・白の文様が描かれたタイルを貼る。外壁あるいは床材か。104は磁器皿片で、内面に文様、外面に高台（径4.3cm）、その内部に縦字「穴切新造」「□○堂支店」「電三四八六番」と青字で印字する。

〈1号トレーナー〉（図版18）2は白色不透明ガラスの化粧クリーム瓶で、高さ6.7cm。口縁はスクリュー栓で、被熱により歪んでいる。底部に資生堂「花椿」の商標を陽刻する。3は化粧クリーム瓶とみられる不透明白色ガラス瓶で、底径4.2cm。底部外面に三つ葉状の「ウテナ」の商標の陽刻があることから、ウテナクリームの瓶と判る。4は円筒形とみられる赤色の陶器壺口縁部片で、花菱の押印がある。5は陶器便器で、L字に折れ曲がった縦に蛸唐草文をもつ。6は直径推定17.2cmの磁器鉢で、内面に吹き絵により風景をプリントする。7は口径7.5cmの磁器急須蓋で、上面に青・赤字で異体字を6つプリントする。8は陶器便器で、外側に鶴を持ち、内外面に草花文を染付で描く。9も陶器便器片。10は磁器壺で、外面にスタンプで亀甲文などを押印する。11は陶器壺・鉢底部。

〈2号トレーナー〉（図版18）1は銅版転写の杯洗で、内外面に松、外面に唐人を施文する。2は徳利片。鉄釉にて文字を書く。3は磁器皿。4は直径14cmの型紙摺りの蓋で、外面に2匹の竜を施文する。

〈3号トレーナー〉（図版19）1は直径8cmの陶器急須蓋で、中凹みの中央に8の字状の摘みをもつ。蓋上面は

白色釉を施釉し、摘み周囲に5つの文様を描く。2は銅製スプーン。3はガラス製おはじき。4は型紙摺りなどの施文をもつ明治～近世の磁器碗皿類である。5は陶器便器。直角に曲がったコーナー部で、L字に曲がった縁に青で文様を施文する。高さは11.8cm。6は青磁皿または蓋で、口径12.4cm。外面には簾状の線刻を施し、白・青色釉で籠の葉を描き、内外面に薄緑釉を施釉する。7は素焼き（土師質）壺底部で、底径は22.5cm。内面には厚く白色付着物がある。正位で出土したことから、何らかの施設に伴って設置された可能性がある。8はSD1、P4出土の尾呂茶碗で、底径（高台径）は5cm。9はSD1、P6出土の小形扁円形の底部の陶器で、内外面に灰釉を施釉する。10はSD1、P7出土の長方形の箱状を呈した小形陶器で、内外面には灰釉を施釉し、側面に茶色の釉で花を描く。11はSD1P8出土の土師質火鉢？で、底径は推定27cm。外面は褐色を呈する。12はSD1出土の口径10cmの磁器碗で、外面に菊花文などを施文する。13はSD1、P3出土の肥前徳利で、外面に褐釉、縞状白色釉を施釉する。14はSD1、SK1出土の陶器壺底部で、底径は7.8cm。内面に鉄釉、外面に白色釉を施釉する。15は口径8.4cmの陶器ヒヨウソクで、内外面に鉄釉を施釉する。16は石筆で、長さ1.7cm、直径7mmの破片。17は磁器碗頭で、近世を主とする。18は土器類で、上は輪羽口状の土製品。環状で、内面に金属残滓が付着し、他の地点で出土した鋳型状土製品との関連性が窺える。下は焙烙または内耳土器底部。19はSD1上層出土の人物像と思われる陶器。中空で、表面には鉄釉を施釉する。底は平らで、高さは4.5cm。20は京・信楽系陶器碗で、底径は4.7cm。淡褐色の胎土で、見込み部に鉄釉で文様を描き、黄褐色の施釉をする。高台内側には「次カ」の刻字がある。近世（18世紀中）。21は磁器碗類。22はSD1上層出土の陶器志野碗。底径6.5cmの削り出し高台を持ち、内外面に白色釉を施釉する。23は陶器尾呂茶碗で、底部高台は削り出しを行い、内外面に暗緑色釉を施釉する。直径6cm。

〈5号トレンチ〉（図版19）1は被熱により溶けて潰れた透明ガラス瓶。2は口径6cm、高さ12.3cmの透明ガラス瓶で、被熱により歪んでいる。底部には陽刻の文字があるが、判読はできない。

〈6号トレンチ〉（図版19）1は直径11.6cmの磁器茶碗で、内外面に銅版転写による僧侶と歌を載せている。2は磁器（肥前）輪花皿で、内外面に染付で風景等を描く。3は底径6.4cmの陶器急須または片口。4は陶器擂鉢で、内外面は被熱により変色する。5はP1出土の磁器鉢で、口径14cm。

引用参考文献

小川望 1995 「シキワと称される器台形土製品について」『民具マンスリー』28-4 神奈川大学日本民俗文化研究所 桜井幸也 2006 「ガラス瓶の考古学」六一書房

第5節 甲府城下町遺跡丸の内二丁目 109 地点より出土したウマ遺体

植月 学（山梨県立博物館）

本遺跡の2号トレンチよりウマの下顎骨が出土した。正確な年代は不明だが、調査によれば層位的には近世以降に属すると判断される。

下顎骨は出土時にはある程度原形を留めており、周囲の土ごと取り上げられていたが、並者が受け取った時には崩れにくつかの部分に分かれていった。

埋土は粘性の強いシルト質土で、乾燥状態では除去が困難であった。そこで、1mmメッシュの篩上で水に浸し、軽くゆするところと、骨と土を容易に分離することができた。ただし、骨は非常に脆く、この段階で割れてしまう場合もあった。

表に同定結果を示した。左右の下顎歯が同定されたが、細かく割れていて歯種の同定に至らなかった歯もある。その数から見て、前臼歯・後臼歯はかなり揃っていたと推測される。他に下顎骨の破片も出土している。

西中川・松元（1991）の推定式よれば、右P2から推定される年齢は約16歳であった。

引用文献

西中川 謙・松元光幸 1991 「遺跡出土骨同定のための基礎的研究—とくに在来種および現代種の骨、歯の計測値の比較—」『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡米時期とその経路に関する研究』 平成2年度文部科学省科学研究費（一般研究B）補助金研究成果報告書 164-188頁

第1表 同定結果

上下	左右	歯種	残存状況	歯冠長	歯冠幅	歯冠高	備考
下頬	左	P2	頬側			HB13	
		P/M	舌側				
		P/M	頬側				
		P/M	頬側				
	右	P3/4	頬・舌側	25.8	15.5	HB25, HL20	
		[M23]	完存	M2 22.9 M3 30.8		HL17	
	?	P/M	頬側				
		P2	完存			HB13.5, HL9	推定年齢16.0歳
		P/M	頬側				
		P3/4?	舌側			HL18.5	
		?	I	破片			

HB: 頬側面エナメル質の高さ、HL: 舌側面エナメル質の高さ

第4章 総 括

第1節 調査の成果

甲府城下町遺跡丸の内二丁目109地点での調査成果をまとめると次のようになる。

検出された遺構には大きく2時期あり、戦災時の焼失遺構を主とする近現代の遺構群(1・2号建物跡、1・2号溝、4号井戸ほか)、近世に遡る可能性をもつ遺構群(3号建物跡、7・17・20・24号土坑、1~3号井戸ほか)である。ここでは後者を1期、前者を2期とする。また1期以前の可能性をもつものに1・2号埋没河道がある。1号井戸との重複関係をみると、1号井戸のほうが確実に新しいことから、先行する遺構ではあるが、人工的ではなく自然地形であり、遺物も伴っていないことから、ここでは取り上げないことにする。

さて、1期では調査区東側に3号建物が存在し、2期の面を重機で下げて確認されていることから、近世に遡りうる建物跡と推定した。建物の柱穴とみられる根石は8箇所程度存在するが、1間×2間程度の建物基礎を示すものの、配列が部分的で、建物構造の把握は難しい。建物北西の17号土坑の埋め桶を便槽と考え、西側にある1~3号井戸を3号建物に伴う井戸群と考えると、おおむねひとつの町屋とみなすことができよう。

井戸については、周辺で調査されている近現代の事例が深い傾向にあり、近世の事例はそれよりも浅いことから、1~3号井戸はいずれも近世の所産とみなしてておく。1~3号井戸は直線的に配置し、2・3号井戸が深さ2.5~2.6m、1号井戸が深さ3.3mとやや深い。構造は3例とも口がラッパ状に開いた漏斗状を呈する

点で共通性があり、とくに2・3号井戸は断面形がほとんど同形、同規模であるが、1号井戸が口に中段を設け、円形の配石を施す点でやや異なっている。また2号井戸は素掘りのまま、3号井戸は口に石積みを設けている。浅い井戸から深い井戸へ、という甲府城下町遺跡での傾向をあてはめると2・3号井戸から1号井戸へという変遷を推定できる。2・3号井戸は、廃棄の過程で井戸内部に入頭大の礫を多数入れたうえで埋め土し、上層を集石で覆う点も類似する。その2号井戸の集石中からは土馬が出土し、井戸廃棄に伴う祭祀礼行為として注目される。

2期に下る4号井戸については、断面形が単純な円筒形で、内部に4段の細長い桶を積み重ね、タガで締めている。地表面の井戸枠にはコンクリートの円筒を置いていて、内部からは昭和40年頃に廃棄された際のゴミ類が多数出土した。周囲の聞き取りで会社の敷地内に井戸があったと記憶している人があった。ただ内部構造的には近世以来の伝統的な工法を採用しており、井戸掘削は明治期ころに遡る可能性もある。いずれにしても4号井戸は戦時中、それ以前に遡る遺構であり、1~3号井戸とは区別しなければならない。

甲府城下には、近世初期段階ですでに西側の相川方面より上水道が引かれていたが、武家屋敷優先で、町人、職人町は水下に置かれ、その用途も防火用水を第一義とするものであった。調査地点は上水道より北側にあたり、この付近一帯では飲料水用に井戸が普遍的に利用されていたことがわかる。井戸跡は、甲府上水よりも北側にあたる甲府駅北口、南口周辺では必ず存在し、しかも重複することはないものの同一地点に集

中する傾向がある。

甲府駅43街区の調査（山梨県教委ほか 2004）では素掘タイプ、井戸桶を伴うタイプ、石積みを伴うタイプの3大別がなされている。時期的には中世に遡る可能性があるものとして石積みを伴うタイプ、17世紀末～18世紀初頭のものとして素掘りタイプ、18世紀～19世紀および明治期のものとして井戸桶タイプの事例が知られるという。石積みタイプにも上層のみのもの、中位までおよぶものの、本遺跡1号井戸のように1段のみ石積みとするものなどの諸例が存在する。また井戸桶タイプにも時期的、城内、城下町などの場の差による構造の違いが知られている。今後、事例を集成、検討して井戸変遷を明らかにする必要性があるだろう。

7号土坑については機能、性格がよくわからない不明遺構である。円筒形で中心に丸い穴をもつ点が特徴で、上層が礫敷きのようになり、茶臼の上臼のみが完存して遺存してた。規模としては井戸に近いが、桶状の木製品を埋め込んだ埋め桶の一種かもしれない。

近世に遡ると考えられる遺物のなかで注目される遺物に土馬がある。鞍を着けない裸馬であるが、県内でかつて行った集成では、金峰山採集品をはじめ数例があり、胎土から平安時代の可能性も想定された。しかしその後の調査で中～近世段階の資料が見つかり、近世まで下る事例があることが判明している。

また20号土坑から集中的に鉄型状土製品、トチン類が出土した点にも注目しておきたい。20号土坑は長さ1.6mの小形土坑である（第10図参照）。近世に遡ると考えられる遺構で、鍋の把手部分の鉄型とみられる土製品多数とともに、鍋の内外の鉄型らしき被熱粘土塊多数や大小のトチンが存在することから（図版12・15参照）、鉄鍋製作に関する廃棄土坑とみられる。この種の遺物は製作地から遠くまで移動する性格ではないことから、近くに工房的な施設があったことが想定でき、3号建物跡が関連施設であった可能性を考えてよかろう。鉄造遺構は未検出であるが、調査区南東の隣地に金山神社が存在し、古絵図の検討によれば1849年以降、1918年ま

での間に創建されたとみられる。金山神社は鉄物師が祀った祭神といえることから、近くとも近世末、甲府城下町の外縁に鉄鍋を主とする製作工房が存在したことがわかる。

なお、鉄鍋把手鉄型の類例として、菅見では新潟県上越市の高出城下鍋屋町遺跡出土品がある（渡辺2003）。高出城下町の北のはずれにあり、地名が示すように鉄鍋を主とした鉄物師町で、出土遺物から鉄鍋のほか、梵鐘、半鐘を製作したことがわかる。そこでは18世紀末～19世紀前半の遺構に伴って鍋把手（耳）鉄型が出土し、鉄型には鉄物師の山岸氏を示す「山」の陽刻がある。また三叉トチン（三叉状土製品）があり、「鉄型を乾燥させる時に焼き炭を乗せる台として使用されるもので、二次被熱がみられる」という（図5）。本遺跡の年代観を探るうえで参考としたい。

2期の遺構群は1・2号建物跡、1・2号溝、4号井戸を主な遺構とする。調査区中央に左右に区画する2号溝が南北に走り、その西側に礎石列および根石群からなる民家と思われる建物跡1棟が存在する。礎石は東側の残りが良く、大部分は根石のみという状況であった。建物は東西4間×南北4間以上で、西および北側に縁をもつらしい。調査区南壁にかかる部分にも根石状の集石が見えて、南側にさらに建物が続くらしい。北側には長方形のセメントの枠があり、さらに西側にコ状の栗石がある。枠の脇には部分的なレンガ敷きがあり、炊事場、あるいは風呂場の可能性がある。土間状の硬化面をはさんで屋外には4号井戸がある。さらに東側には、井戸脇あたりから北へ向って土管列、石組みでできた水路があり、排水を2号溝から1号溝を経て二の堀方向へ誘導している。

二の堀寄りにある2号建物跡は、床にセメントを打ち放った倉庫的な建物である。コンクリートの基礎から立ち上がったアンカーボルトが、いずれも西側に強く曲がっていて、建物が西側に倒壊したような状況を示し、さらに床が赤土に被熱していたのが印象的であった。そのほか1号土坑、24号ビット、16号土坑などがあり、16号土坑からは戦災時の植木鉢、皿などと共に杉の葉が多量に出土していて、戦災前後の何らかの状況を示している。

第2節 戦災廃棄物について

調査区内のほほ城には、太平洋戦争末期の昭和20年（1945）7月6・7日に米軍により行われた甲府空襲後の多量の廃棄物が埋め土として堆積しているの

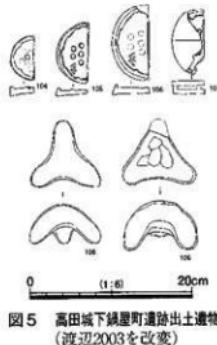


図5 高田城下鍋屋町遺跡出土遺物
(渡辺2003を改変)

が本遺跡の最大の特徴であり、特筆すべき調査成果となつた。

甲府空襲は7月6日深夜11時23分頃から翌日1時45分頃まで行われ、市街地の74%を焼失し、死者、行方不明者775名に及んだといふ。

空襲ののちの復興については、『甲府市制六十周年誌』(甲府市役所 1949)、『甲府市史 通史編 第4巻 現代』に詳しい。それによれば空襲直後の7月17日には軍隊・学徒・義勇隊の応援を得て鉄屑類の回収が始まられ、終戦後も整理事業として瓦礫清掃、鉄屑等の金属回収作業が継続的に行われた。復興整理には戦災直後から甲府市の土木課があつたが、機構としては8月、県に外局として戦災復興局が、9月26日に甲府市に戦災復興局が設置され、7部のうち土木部が清掃整地などを担当した。土木部には經理・整地・工事の3係が置かれ、昭和21年3月には復興局土木部員2名を採用、同年8月および10月には臨時事務員20名を採用し、本格的に着手した。昭和22年1月からは工事係内に清掃整理係が置かれたが、同年12月には都市建設部として3課が設置され、その後昭和24年には3課が統合されている。したがって瓦礫等の片付けは、甲府市が戦災復興局を設置した昭和20年9月から22年12月までの間、とくに21年3月以降に本格的に行われたとみられる。

空襲による焼失地域内で行われている各地点の発掘調査では、今回のような生々しい資料が多量に出土した調査例はあまりないように思う。被災した焼上瓦はよく見出されるが、今回のように大規模な捨て場として廃棄遺物がまとまって検出されることはない。

空襲後の廃棄物を集積して埋め立てのために利用した、という行為の結果を示すもので、この調査地点を中心とする限定的な特殊な状況といえる。

出土遺物の割合などを検討することができなかつたが、被熱で赤く変色した屋根瓦が目立つほか、溶けた一升瓶や、山梨県の「山」マークが入った県庁の軒瓦、ビール瓶などのガラス瓶、米瓶、化粧瓶、統制食器類、植木鉢、表札、磁器製おろし金などのガラス・陶磁器類、何らかの機械、白軽車などの部品、鉄かぶとの鉄類、建物のタイル類、工場で生産された何らかの部品の集積、店先に置かれていたと思われる水晶の結晶、洗面器や弁当箱などのホーロー挽きの製品、蓋で用いられた省エネのための敷輪、セロイド製の人形の首、歯ブラシなど、あらゆるもののが集積されている。

本報告ではそれらのうちの一部を示すことにどまつた

が、そもそも遺物取り上げ時点でどのように対処したらよいのか戸惑つたのは事実である。今回の本調査に際して市教育委員会が提示した調査仕様では、昭和時代の遺構、遺物については調査対象とする必要性についての指示がなく、対象にしなくてもよい、という方針であったが、このような出土遺物が得られる機会はそうあるものではないことから、甲府市にとって空襲の悲劇を物語る第一級の資料群ではないか、という判断により、特徴的な資料を一部回収することとした。

調査区間に建つ長田組土木株式会社(調査時)は、県内では七木工事会社の老舗のひとつで、明治38年に長田組として発足、昭和13年1月に合名会社長田組、昭和24年2月に長田組工友株式会社、昭和27年に長田組土木株式会社となって現在に至っている。終戦時の状況については聞き取りで明らかにできなかったが、市内中心部の瓦礫を今回調査した敷地内に集積し、盛り土として地盤造成を行ったのは、戦災後の復興整理に長田組が関わっていたからと推測しておきたい。調査区画面の断面観察では、二の堀に向って西側から東側へと瓦礫を堆積した状況を見ることができた。

戦災資料の取り上げについては、考古学的な調査に加えて史資料調査、聞き取り等の手段を駆使すべきであった。甲府市内では今後もこうした現場に遭遇することがあるかと思われるが、現場でどのような調査をすべきか、調査理念と目的を明確にし、実際の調査マニュアルを確立すべきであろう。また今回、回収した戦災遺物については博物館や資料館、学校教育等で有效地に活用されることが期待される。

最後に、この調査にご理解、ご協力を賜った社団法人 山梨労働者医療協会および関係者の皆様、調査に参加された方々には心より感謝申し上げます。

参考文献

- 甲府市役所 1949 『甲府市制六十周年誌』
- 甲府市 1974 『甲府空襲の記録』
- 甲府市役所 1993 『甲府市史 通史編 第4巻 現代』
- 渡邊ますみ 2003 「高田城下町遺跡」[上越市史専門委員会考古部会]
- 山梨県教育委員会ほか 2004 「甲府城下町遺跡—甲府駅周辺土地区画整理事業地内 43 街区埋蔵文化財発掘調査報告書—」
- 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第215号
- 甲府市教育委員会・(財)山梨文化財研究所 2007 「甲府城下町遺跡Ⅳ—集会所建設工事に伴う発掘調査報告書—」
- 甲府市文化財調査報告書 39
- 山梨県教育委員会 2008 「甲府城下町遺跡(北口県有地)一 北口県有地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—」
- 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第258号

第2表 土陶磁ガラス器觀察表

第3表 石製品観察表

回数	地点	No.	分類	長/幅/厚cm	重さ	石材	色調	性質	備考
14	1号井戸	1	鏡口(上)	39.0/30.0/10.4	5548	安山岩	暗灰	-	供給口13.0cm 間穴2.8×4.8cm
14	1号井戸	2	鏡口(下)	31.5/21.5/7.2	10295	安山岩	暗灰	9.1/11	供給口3.0cm
14	1号井戸	3	鏡石	7.7/6.2/2.8	5695	砂岩	灰白	-	細粒
14	1号井戸	4	鏡石	10.0/9.0/2.0(高11.3)	5689	安山岩	灰	10.1	外表面は無度
16	4号井戸	5	鏡口(上)	13.0/9.2/2.3	596	林産石	灰	12.1	裏面に削れ、表面にゴリゴリのループ
16	4号井戸	21	石口(下)	(26.0)/26.0/2.1/1.9	1669	安山岩	灰	17.1	研磨3.0×1.2cm
16	2号井戸	22	鏡口(下)	21.9/21.6/12.4	9660	安山岩	灰	7.7	供給口1.5cm 間穴2.2×3.5cm
19	1号井戸	6	鏡石	12.1/12.0/2.4	971	林産石	灰	-	表面に花崗岩
22	鏡井戸	23	鏡口(上)	16.2/15.2/9.5	-	安山岩	灰	-	鏡鏡
22	鏡井戸	24	鏡口(下)	34.2/34.0/11.4	-	安山岩	灰	-	鏡鏡
22	鏡井戸	31	鏡口(上)	12.1/12.0/2.4	3220	安山岩	灰	-	鏡鏡
22	鏡井戸	32	鏡口(下)	35.0/34.5/12.0	-	安山岩	灰	-	鏡鏡
23	鏡井戸	33	石口(上)	16.0/16.0/10.6	2620	安山岩	灰	-	鏡鏡
23	鏡井戸	34	石口(下)	16.0/16.0/12.6	5400	安山岩	灰	-	鏡鏡
24	1号井	35	水盤か	直徑15.0/厚2.5	22600	安山岩	灰	-	鏡鏡
25	鏡井戸	36	鏡石	10.0/10.0/15.0/厚11.0	1760	安山岩	灰	-	鏡鏡
25	鏡井戸	37	石材	55.5/53.8/19.1	-	安山岩	灰	-	鏡鏡
25	鏡井戸	38	鏡石?	82.0/82.0/18.0	-	安山岩	灰	-	鏡鏡
26	4号レシナ	1	鏡	11.6/6.2/2.1	364.3	粘岩	黑・褐灰	-	鏡鏡

第4表 土陶磁ガラス製品観察表

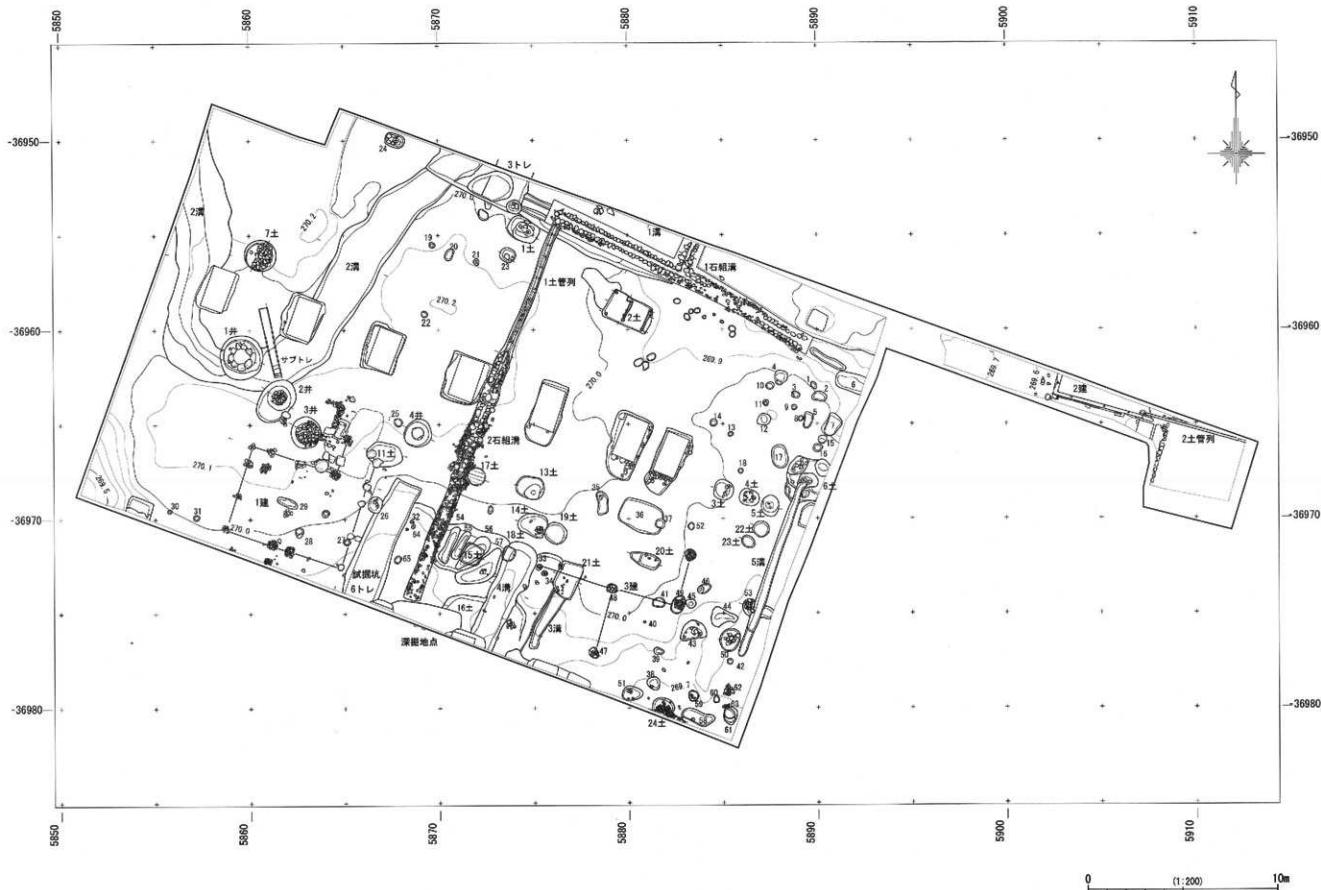
回数	地点	No.	種別	器種	長/幅/厚cm	重さ	重量g	断面接法	外/内	色調	地土	漆皮	性質	備考
14	2号井戸	1	土	馬	4.5/2.3/4.1	70	19.8	ナラ	ナラ	灰	良	ナラ	ナラ	ナラ
15	6号七瓶	10	陶	陶製オロシ	16.0/12.0/3.0	20	160.2	墨色・白色地・要裂り	白	灰白色	良	0上	裏面に印込み	
15	14号土瓶	1	ガラス	おもむき?	3.4/3.4/0.6	100	12	空盃形	系縫	透明	良	14.1		
18	7号土瓶	1	土	焼型	6.7/1.5/0.8	90	32.5	壺底?	青灰	灰・青・角	良	20上	内側のみ被熱により変色	
18	7号土瓶	2	土	三又トチソ	//	60	12.9	千人頭	青灰	青灰	良	20土		
18	20号土瓶	3	土	三又トチソ	5.0//	99	13.4	千人頭	青灰	青灰	良	20土		
18	20号土瓶	4	土	山文トチソ	//	70	213.3	千人頭	青灰	青灰	良	20土		
19	1号陶器	1	陶器	土壺	13.3/10.2/30.1	100	3700	塑型切	墨	墨色・灰	良	被熱外		
19	1号井	4	陶器	ヒカル	青灰5/1.6/0.5	80	7.2	錐尖型	墨	墨・黒・角	良	11.1	墨の文様	
19	1号井	5	土	焼型	(10.0)/(9.0)	40	171.6	ナラ?/壺底二槽	墨	墨色・青	良	11.1	墨の文様	
20	2号石瓶	2	土	上置	17.1/12.0/61.3	100	6600	空盃形?	明茶色	白・青・角	良	21.0/35		
20	2号石瓶	3	土	上置	19.0/13.4/62.6	100	6100	空盃形?	白	白	良	21.0/33		
21	透井戸	17	透井戸	オレンジ	//	?	28.3	白	白	白	良	透井戸		
21	透井戸	20	透井戸	瓦	34.0/21.6/	70	10	切	白	白	良	透井戸		
21	透井戸	26	瓦	新丸瓦	14.7/	-	554	左巻二戸・透井戸(14)/ナ	天	良	透井戸			
21	透井戸	27	瓦	新丸瓦	7.4/	-	148	ナラ三巴・美輪(12)/ナ	天	良	透井戸			
25	鏡井戸	35	陶器	陶柱(陶柱)	2.0/2.0/1.2	100	11.8	-	原	青	良	透井戸		
25	鏡井戸	40	陶器	陶柱(陶柱)	2.0/2.0/1.2	100	10.7	-	原	青	良	透井戸		
25	1号レシナ	1	土	筒型	人形	70	23.2	原	青	11.1	良	1号レシナ		
25	1号レシナ	4	瓦	鬼瓦	厚0.3	-	3600	青黄緑	青	良	1号レシナ			
25	2号レシナ	1	土	筒型	厚0.1	-	3	青	青	良	2号レシナ			
25	3号レシナ	6	土	筒型	厚0.7	-	87.4	ナラ?	青赤色/灰	白・黒・火	良	3号SDIP1	底部孔径0.8cm	
26	3号レシナ	7	土	筒型?	14.0/3.5/1.8	47.3	10	青瓦	青瓦	青・明茶色	良	3号SDIP1		
26	5号レシナ	1	土	ミニチュア塔	3.1/3.1/1.6	-	4	網	青瓦	青瓦	良	5号レシナ		

第5表 金属製品観察表

回数	地点	No.	分類	長/幅/厚cm	重さ	材質	性質	備考
21	透井戸	18	六脚	口5.6/底2.7/厚2.9	-	銅	透井戸	
21	透井戸	19	六脚	口9.2/底5.9/厚3.5	110.9	銅	透井戸	
21	透井戸	20	六脚	口9.3/底6.2/厚3.5	137.2	銅	透井戸	
21	透井戸	24	六脚基	14.6/5.5/厚2.7	67.2	銅・ガラス	透井戸	中一ノハ1.1
21	透井戸	28	ハーメット	厚(2.6)/総重14.3	141.8	銅	透井戸	
23	1号レシナ	2	円筒	17.5/17.3/0.3	88.5	銅	1号レシナ	
23	2号レシナ	2	魏柱	高2.5/底0.6	4	銅	2号レシナ	

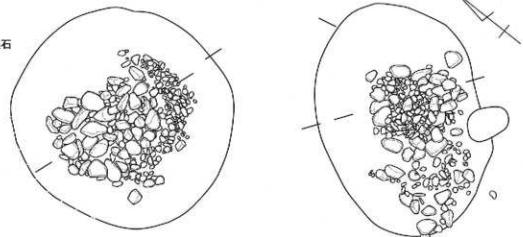
第6表 木製品観察表

回数	地点	No.	分類	長/幅/厚	重さg	材質	性質	備考
18	17号地点	2	横底板	18.5/98.5/2.6	6200	木材	17.1/27	釘穴跡
19	1号床	1	1	26.5/20.1/2.6	332.6	木材	1度	釘穴跡

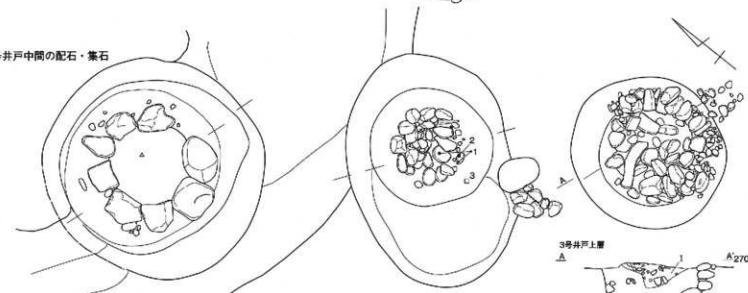


第1図 調査区全体図

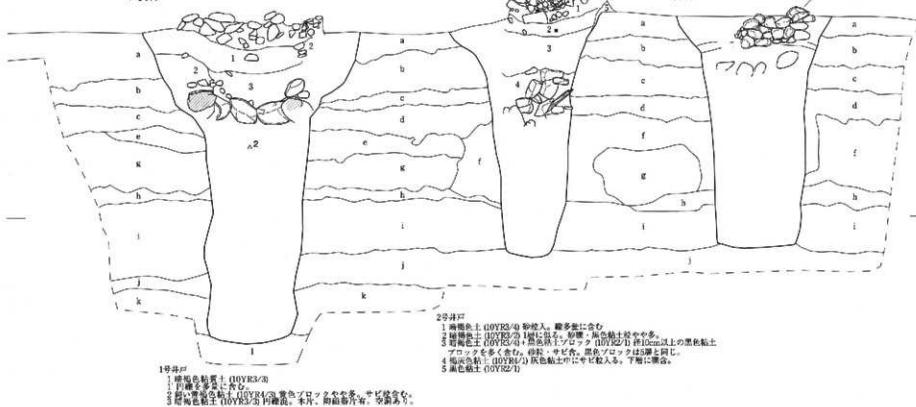
1・2号井戸上層集石



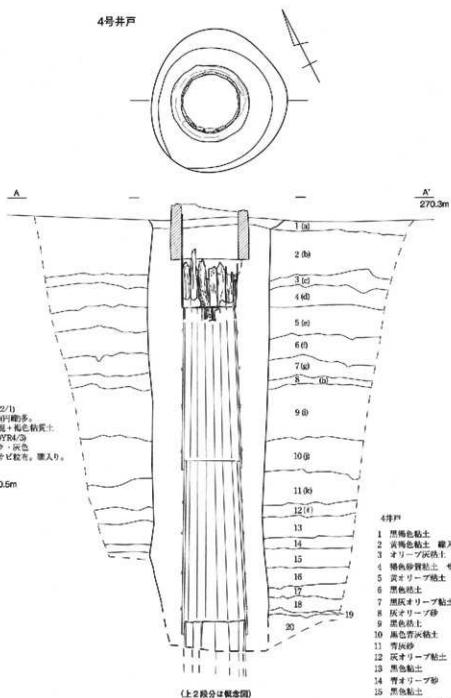
1・2・3号井戸中間の配石・集石



1号井戸



4号井戸

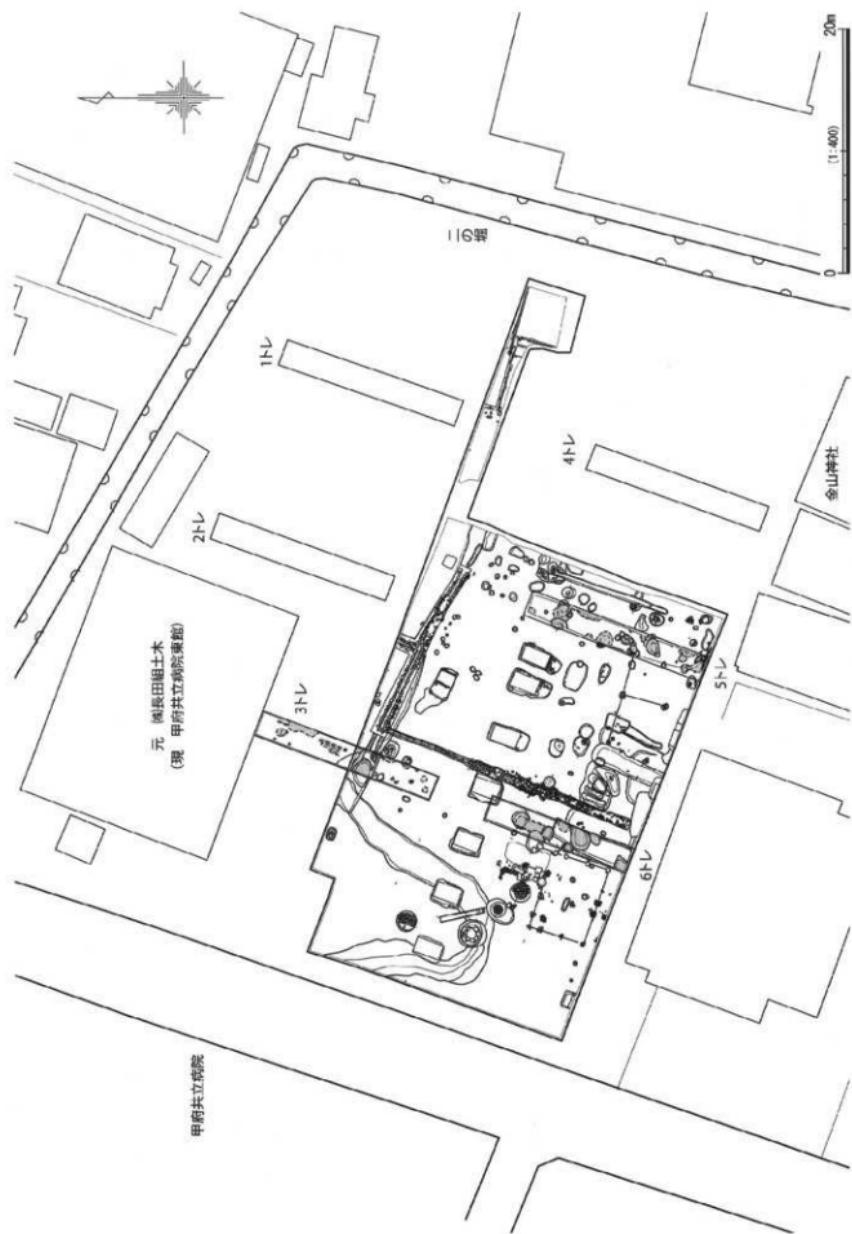


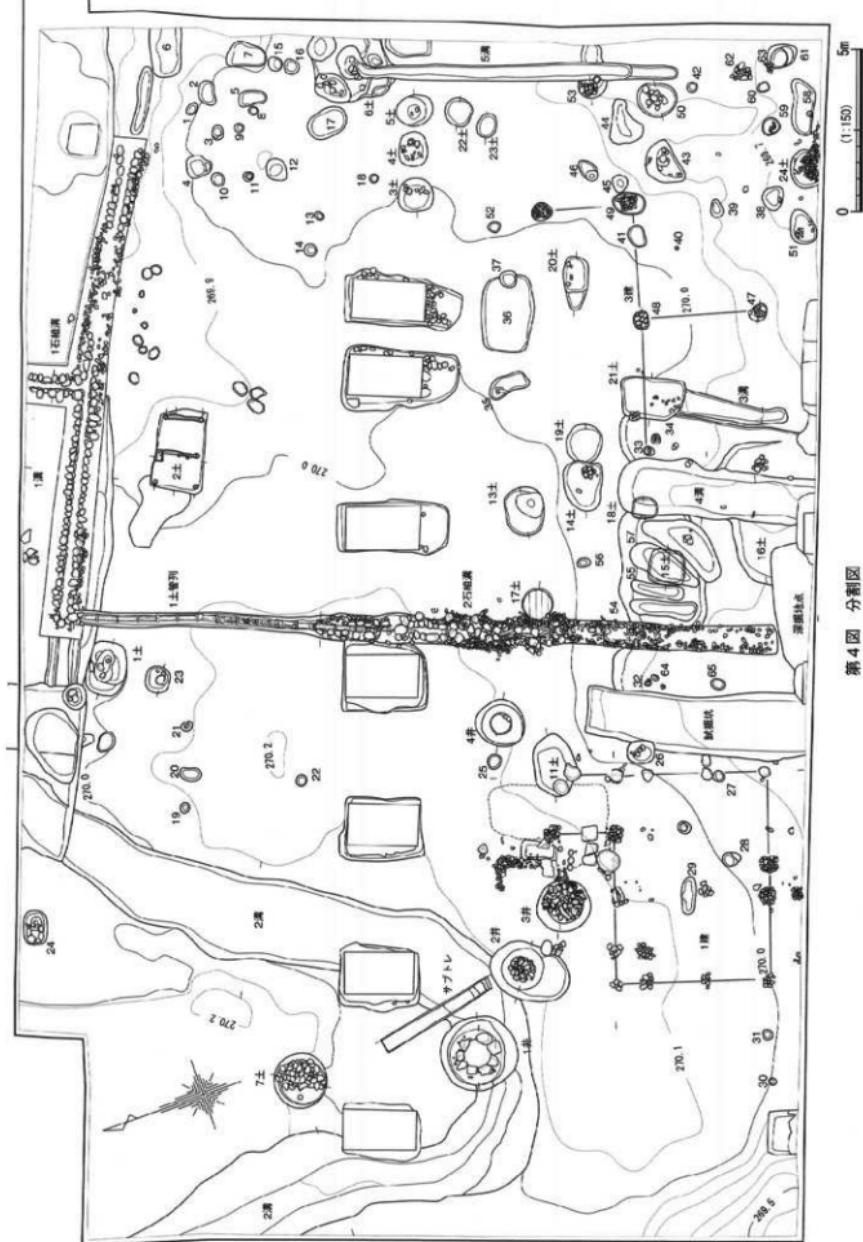
1-3号

a 黑褐色土 (GYV2/2)
b 黄褐色粘土 (GYV2/2)
c クリーム色粘土 (GYV3/4)
d 黄褐色粘土 (GYV3/4) 黄褐色土
e 黄褐色粘土 (GYV3/4) 黄褐色土
f 黄褐色土 (GYV3/4) 黄褐色土
g 黄褐色土 (GYV3/4) 黄褐色土
h 黄褐色土 (GYV3/4) 黄褐色土
i 黄褐色土 (GYV3/4) 黄褐色土
j 黄褐色土 (GYV3/4) 黄褐色土
k 黑褐色粘土 (GYV3/2)
l 黑褐色粘土 (GYV3/2)

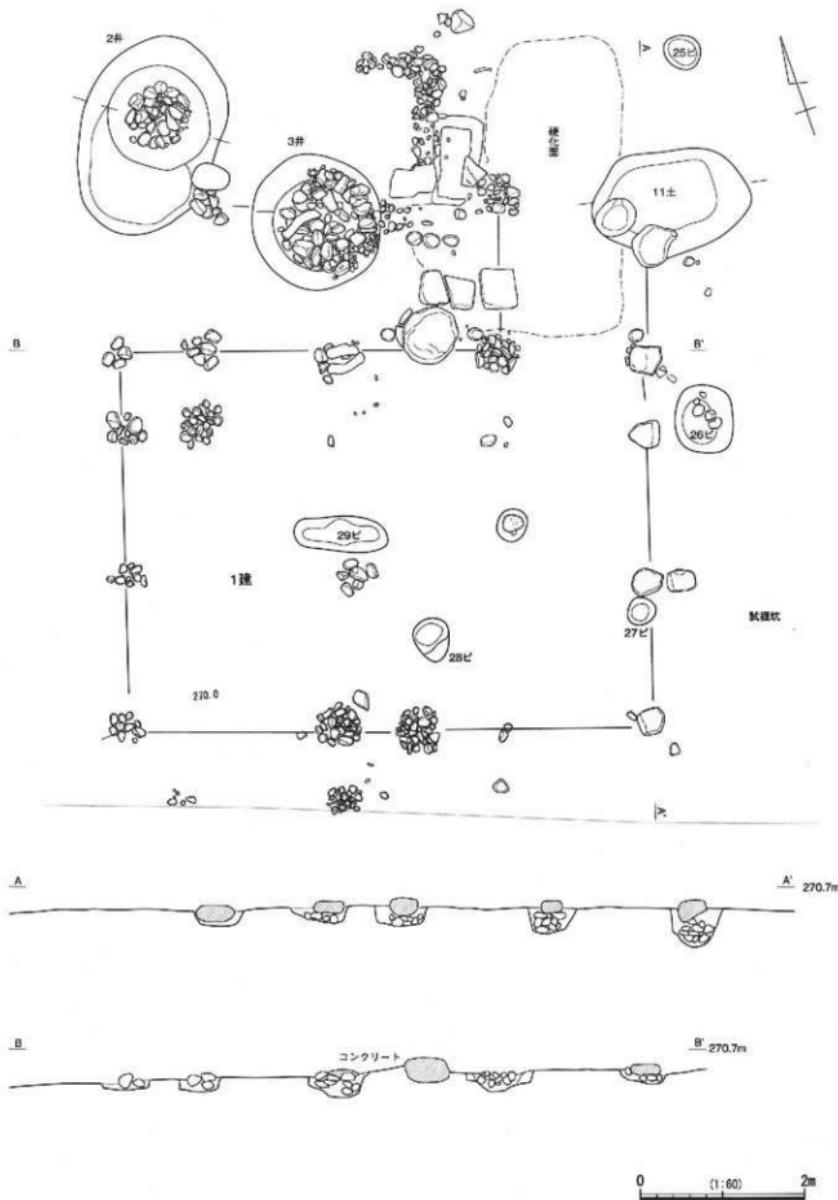
0 (1:40) 1m
第2図 1～4号井戸

第3図 トレンチ配置図

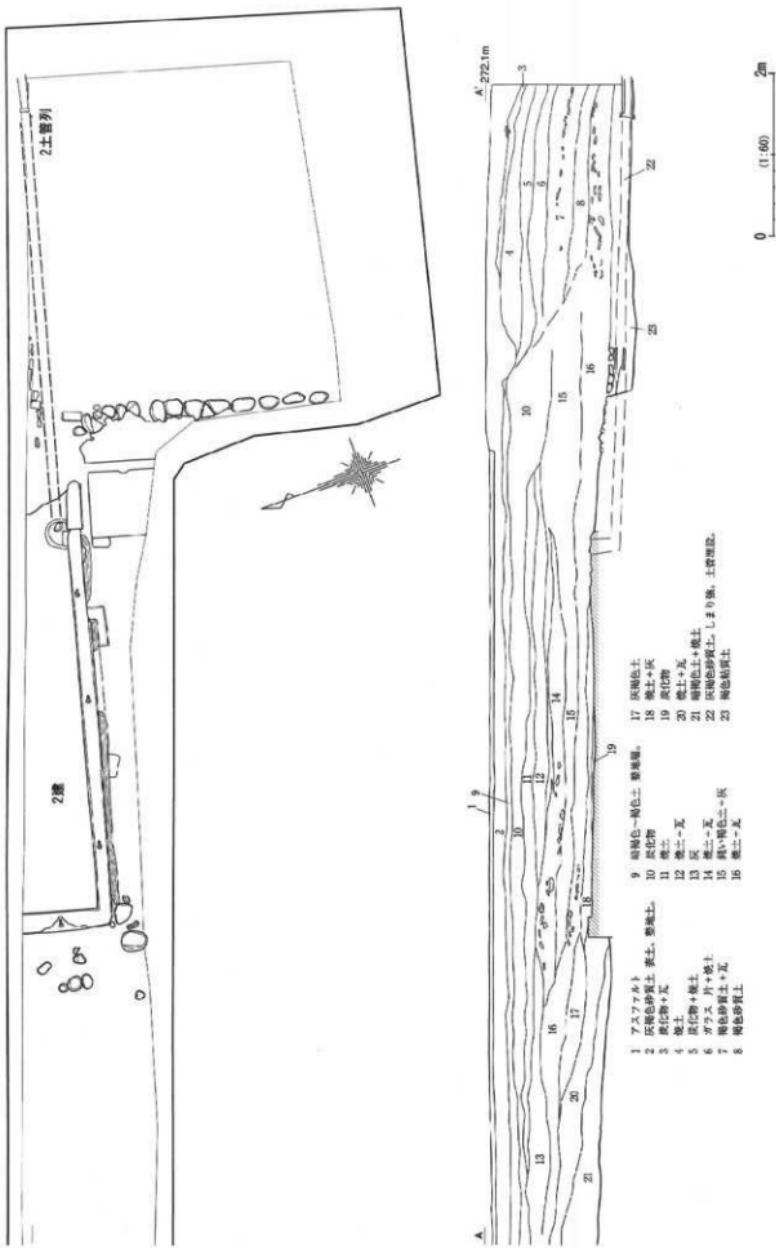




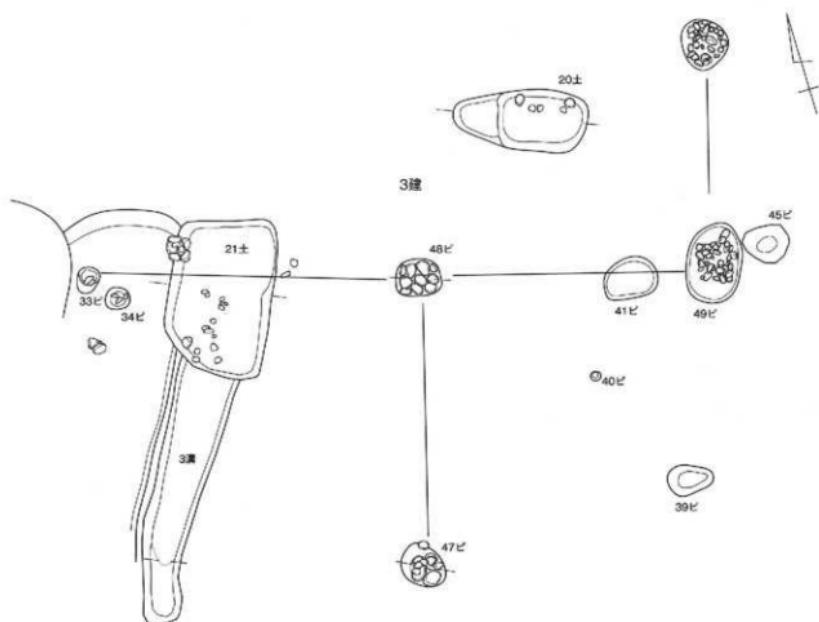
第4回 分割図



第5図 1号建物跡



第6図 2号遺物跡



47号ピット



1 黒褐色粘土 (25Y3/1) ナビブロック入。黄色粘土ブロック入。

48号ピット

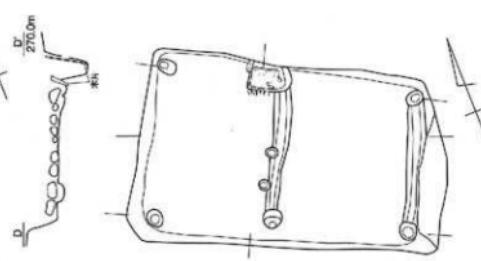
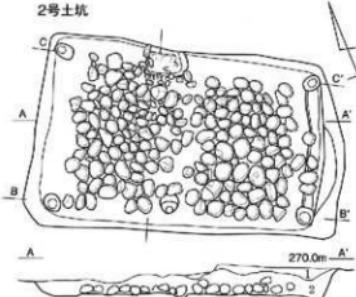


1 黒褐色粘土 (25Y3/1) 黄色小ブロック入。

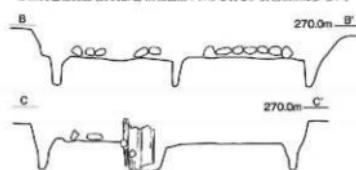
0 (1:60) 2m

第7図 3号建物跡

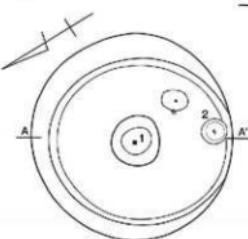
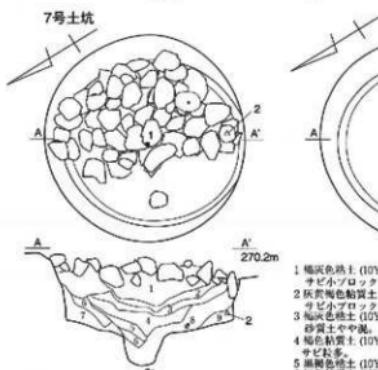
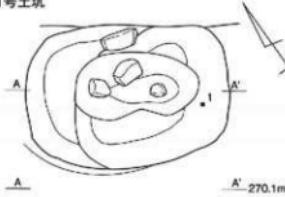
2号土坑



1 黒褐色粘土 (I0YR3/1) 黒色粘土と茶色粘土の混土。粘性：あまり強。
2 黒褐色粘質土 (I0YR2/2) 黒色粘土中に砂を含む、食化粘土は少ない。

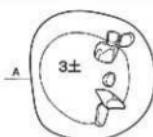


1号土坑



- 1 棕灰色粘土 (I0YR3/1) サビ小プロック入。炭化物少々有。
- 2 灰黄褐色粘質土 (I0YR4/2) サビ小プロックや多。砂質土層。
- 3 黑褐色粘土 (I0YR3/1) 黒色粘土。
- 4 黑褐色粘土 (I0YR4/4) 砂質土や多。
- 5 黑褐色粘土 (I0YR3/1) 黑色粘。
- 6 黑褐色粘土 (I0YR4/4) サビや多。
- 7 黑褐色粘土 (I0YR3/1) 黑色粘土。
- 8 黑褐色粘土 (I0YR3/1) やや青味のある粘土。
- 9 黑褐色粘土 (I0YR4/4) サビ小プロック入。

3・4・5・6号土坑

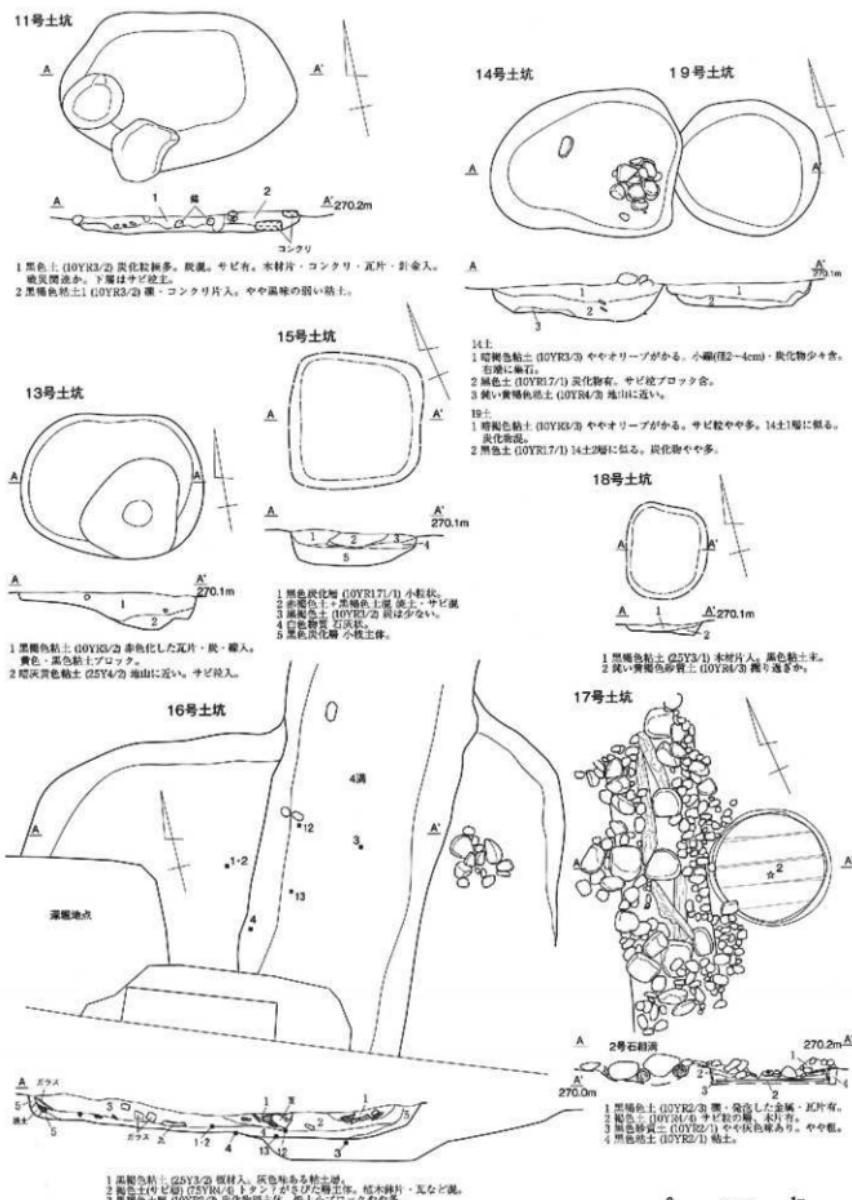


- 1 黒褐色粘土 (I0YR2/3) 小卵・黃色粘土
プロック少、鉄鉻少々、鐵入。
- 2 赤褐色粘土 (I0YR4/4) 細い淡土。7段。
- 3 黑褐色粘土 (I0YR2/1) 2層の小プロック
少々入。黄色粘土小プロック入り。

- 1 黒褐色粘土 (I0YR2/3)
鉄鉻片など有。古鉄有。
- 2 赤褐色粘土 (I0YR4/4) 黃土。7段。
- 3 黑褐色粘土 (I0YR2/1) 黑色粘土中に
鐵土小プロックが入る。
- 4 黄褐色粘土 (I0YR5/4) サビ鉄、灰色
粘土小プロック、黑色粘土小プロック有。
黄色の強い粘土。粘性強。

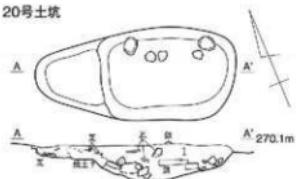
0 (1:40) 1m

第8図 1～7号土坑



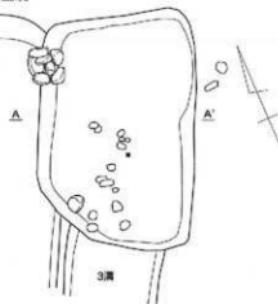
第9圖 13~17號土坑

20号土坑



1 黄色土 (GYT) 水土共。瓦・繩・鉢(サビ)・コンクリート片など含む。やや粗。

21号土坑



22号土坑



1 黒褐色粘土質土 (GYR4/6) 黄土?。
2 黑褐色粘土 (GYR3/2) サビ粒・炭灰有。
3 黃色粘土 (GYR4/3) 黄色土主体の地山。

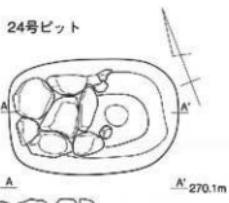
23号土坑



1 黑褐色粘土質土 (GYR4/6) 黄土?
2 黑褐色粘土質土 (GYR3/2) サビ粒・炭灰有。
3 黄色粘土 (GYR4/3) 黄色土主体の地山。

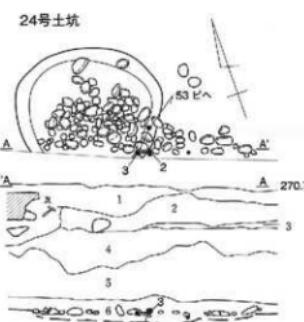
1 黑褐色粘土 (GY3/1) 黄色小ブロック・礫混。
2 黒オリーブ色粘土質土 (GYR3/3) 赤色小ブロック・白色土粒有。
3 黄色土 (GYR4/6) 黄色土主体。
4 黑褐色粘土 (GY3/1) 1層に似た黑色粘土で、
1層よりも細味有。

24号ピット



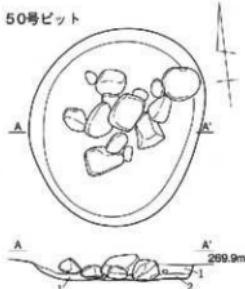
1 黑褐色粘土質土 (GYR3/2) 黄色粘土ブロック・サビ粒有。
2 黑褐色粘土質土 (GYR3/2) 黄色粘土ブロック・サビ粒有。
3 黑褐色粘土質土 (GYR3/2) サビ粒有。褐色粘土ブロック入。
4 黑褐色粘土質土 (GYR3/2) サビ粒少々有。サビ粒有。

24号土坑



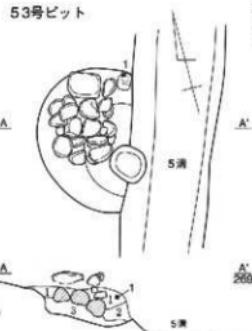
1 土上(プラス筋)
2 黄色土主体
3 ローカス1付の層
4 黑褐色土 (GY3/1)

50号ピット



1 黑褐色粘土 (GYR3/2) 黄色小ブロック有。礫石入。
2 黄色土 (GYR4/4) サビ化したような黄色土ブロック主。

53号ピット

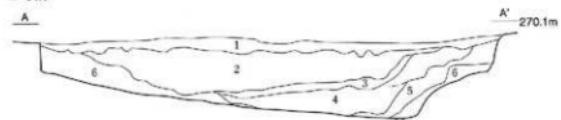


1 黑褐色土 (GY3/1) やや灰色味のあるや。筋一合。
2 黑色土 (GY3/2) 灰化帶主。筋十小ブロック入。
3 黄褐色粘土 (GYR4/2) 黄色土。

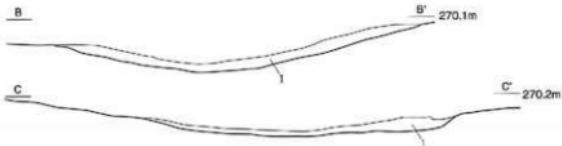
0 (1:30) 1m

第10図 20~24号土坑、23・24・50・53号ピット

2号溝

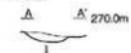


- 1 黒褐色粘土 (10YR3/1) サビ粉含む。しまり・粘性ともに強。
- 2 暗褐色粘土 (7.5YR3/4) サビ粉や多。黒色ノック含む。しまり・粘性ともに強。
- 3 黒灰色粘土 (10YR4/1) サビ粉含む。黒色小ノック少々含む。しまり・粘性ともに強。
- 4 黄色砂質土 (10YR4/4) 砂较多。部分的にサビ化。しまり・粘性ともに強。
- 5 黑灰色粘土 (10YR4/1) サビ粉含む。しまり・粘性ともに強。
- 6 黄色粘土 (10YR4/4) 全体的にサビ粉多。しまり粘性ともに強。



- 1 黑色粘土 (10YR2/1) しまり、粘性強。透层の黑色粘土。サビ層(スキの根に入り込んだサビ分)下面はサビ分が発達する。

3号溝



- 1 黑褐色粘土 (2.5Y3/1) 黒色小ブロック。赤色较少。

4号溝

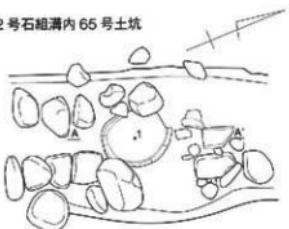


- 1 黑褐色粘质土 (10YR1/2) 地上部らしき赤色粘土。小根入。
- 2 黄褐色粘土 (10YB4/3) 黄色粘土ブロック主体。サビ粒・炭? 含。

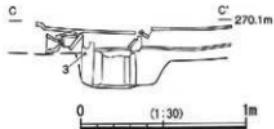
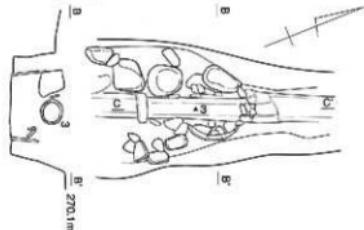
1号石組溝



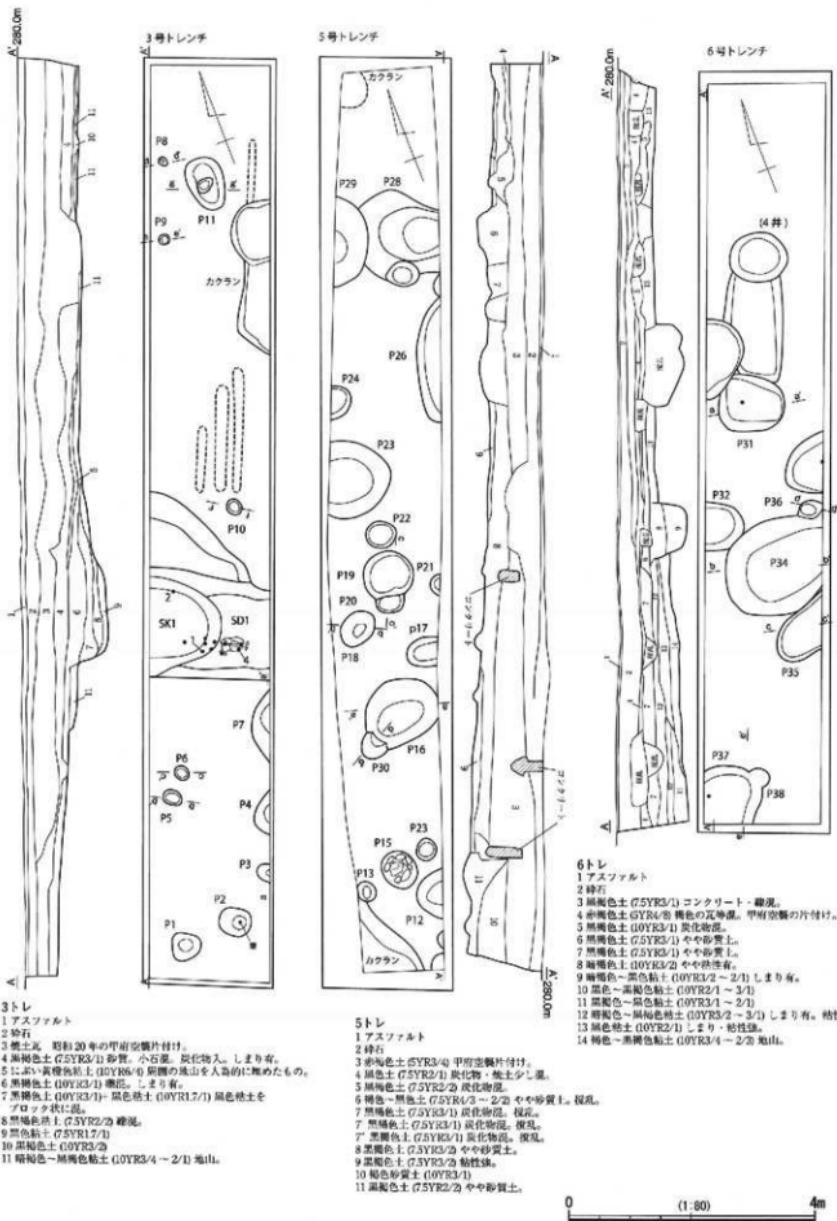
2号石組溝内 65号土坑



2号石組溝



第11図 2~4号溝、1・2号石組



3トレ
1アスファルト
2砂石

3焼土層 約昭和30年の甲府空襲時に付いた。

4深褐色土 (GVR3/1) 深度。小石混入。炭化物有。しまり有。

5にぶつ黄褐色粘土 (DVR6/6) 開削の堆山や人為的に埋めたもの。

6深褐色土 (GVR3/1) 深度。しまり有。

7深褐色土 (GVR3/1) 黑色粘土 (GVR1/1) 黑色粘土を

ブロック状に混入。

8黒褐色土 (GVR2/2) 碾圧。

9黒褐色土 (GVR1/1)

10黒褐色土 (GVR2/2)

11暗褐色～黒褐色粘土 (GVR3/4～2/1) 地山。

12暗褐色～褐褐色粘土 (GVR3/2～3/1) しまり有。粘性質。

13黒褐色土 (GVR2/1) しまり・粘性質。

14褐色～黒褐色粘土 (GVR3/4～2/3) 地山。

5トレ
1アスファルト

2砂石

3赤褐色土 (GVR2/1) コンクリート・礫混入。甲冑空襲片の片付け。

4黑色土 (GVR2/1) 成分物・焼土少し混入。

5深褐色土 (GVR2/2) 成分物混入。

6褐色～黑色土 (GVR4/3～2/2) やや砂質土。根糸。

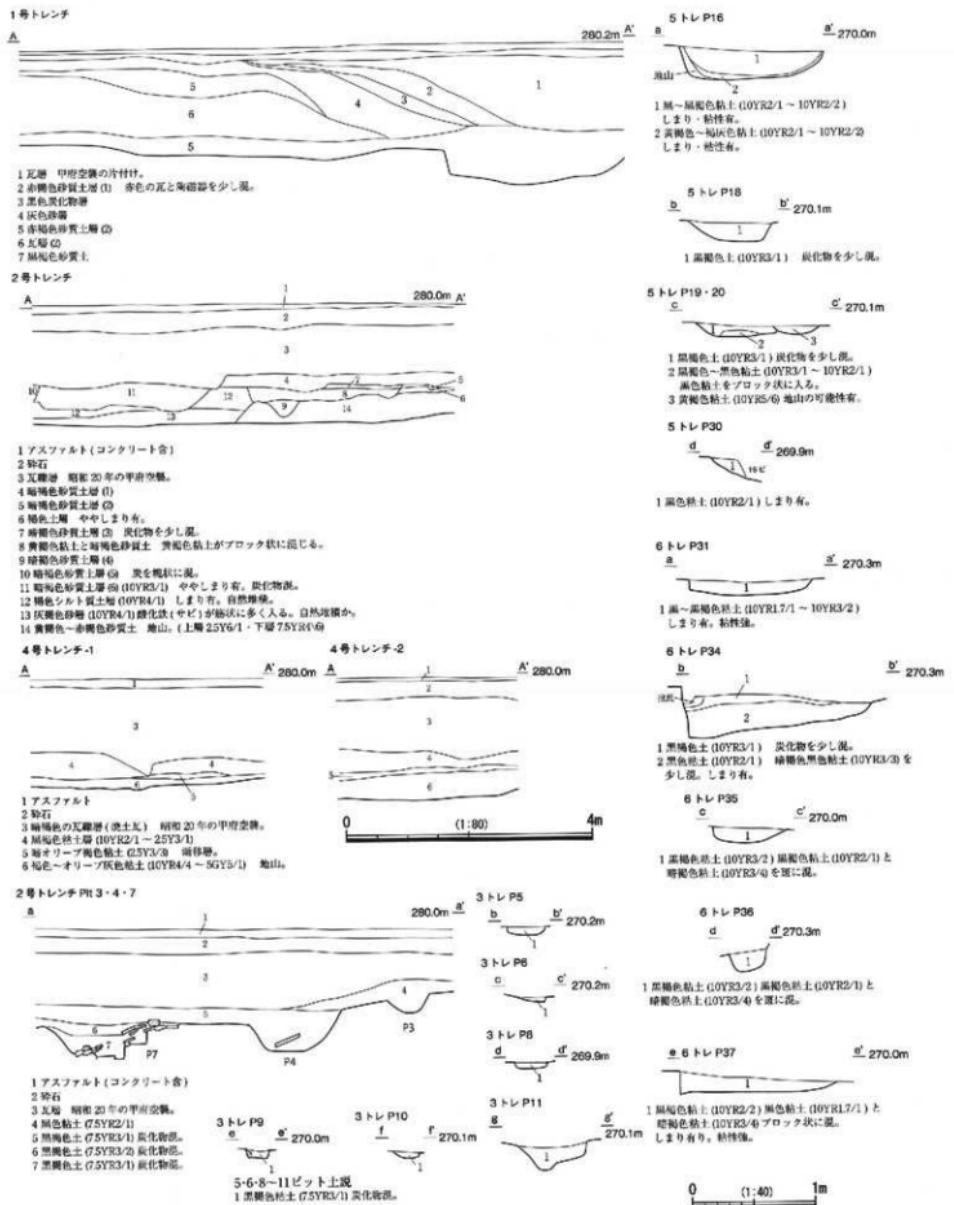
7黒褐色土 (GVR3/1) 成分物混入。根糸。

8黒褐色土 (GVR3/2) やや砂質土。

9黒褐色土 (GVR3/2) 成分物混入。

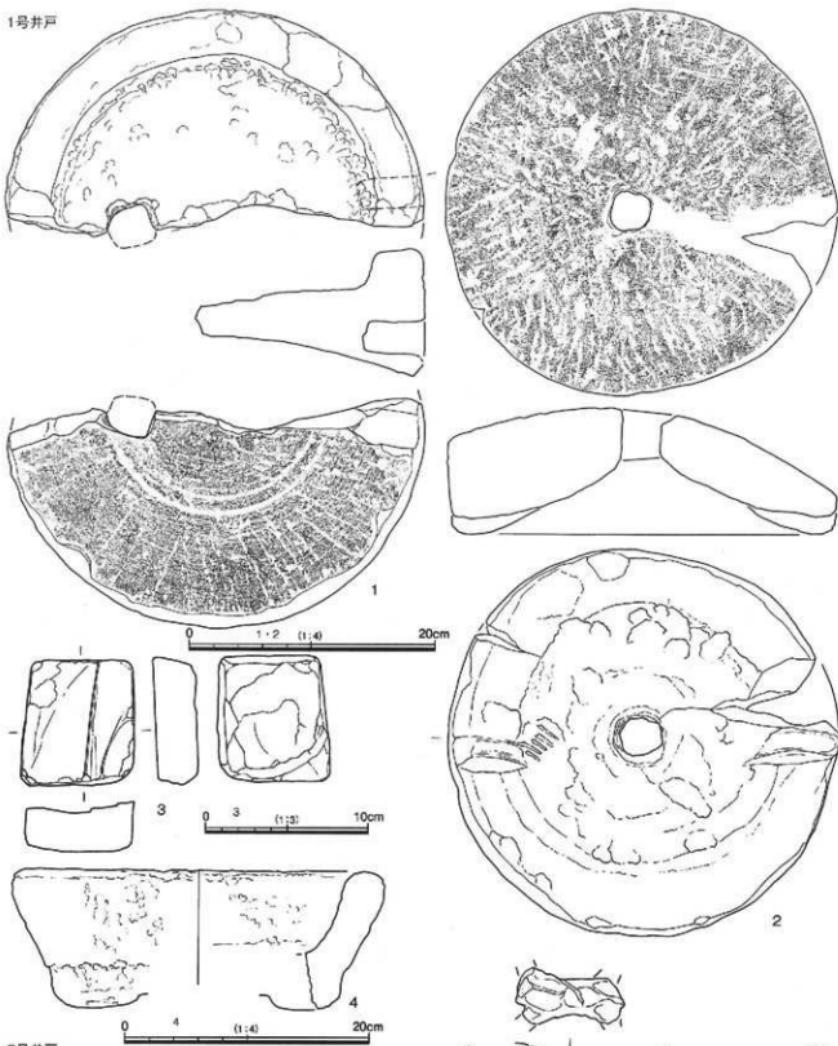
10褐色砂質土 (GVR3/1)

11深褐色土 (GVR2/2) やや砂質土。

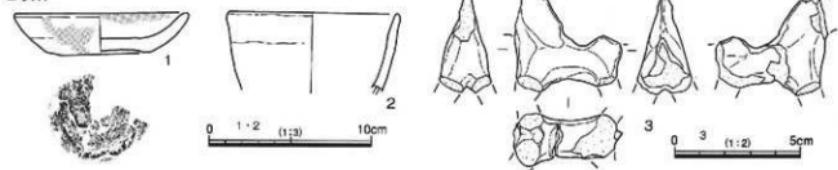


第13図 1～6号トレンチ

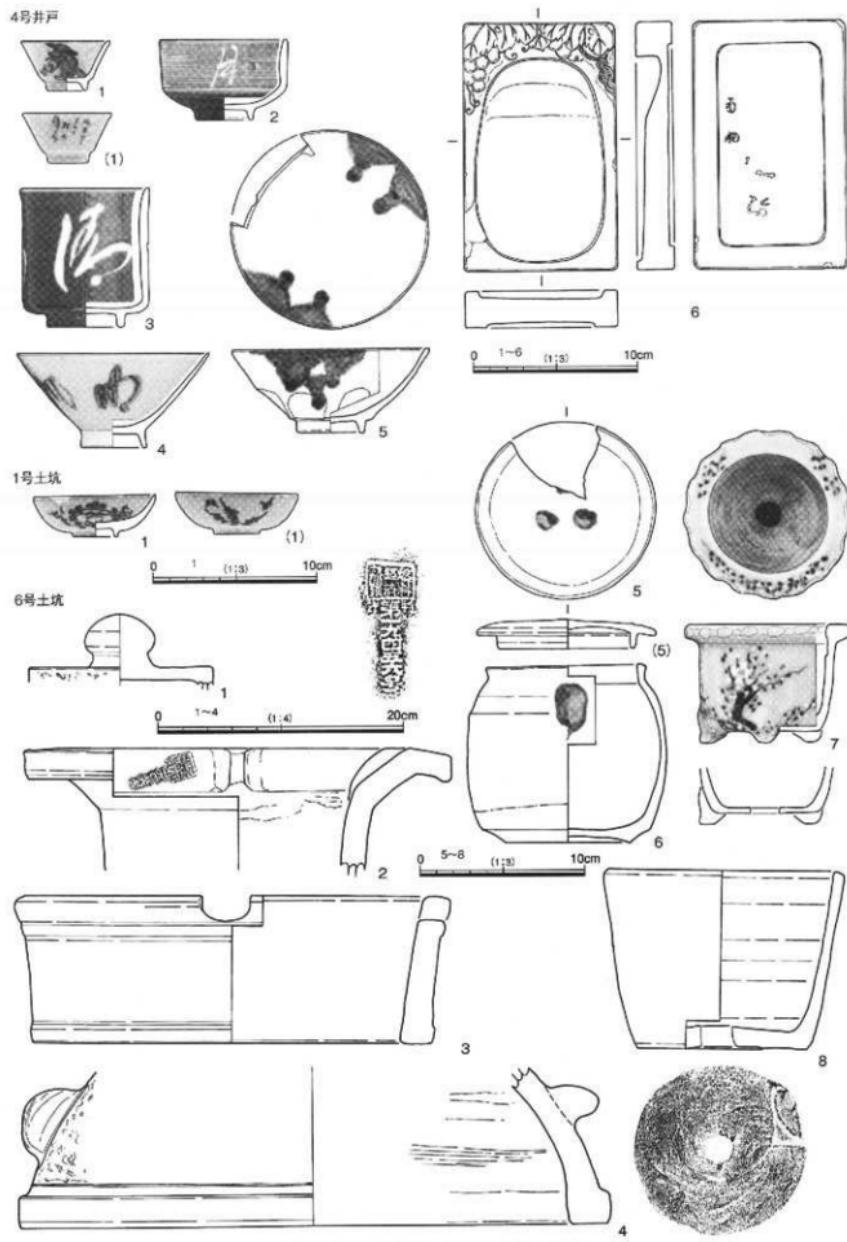
1号井戸



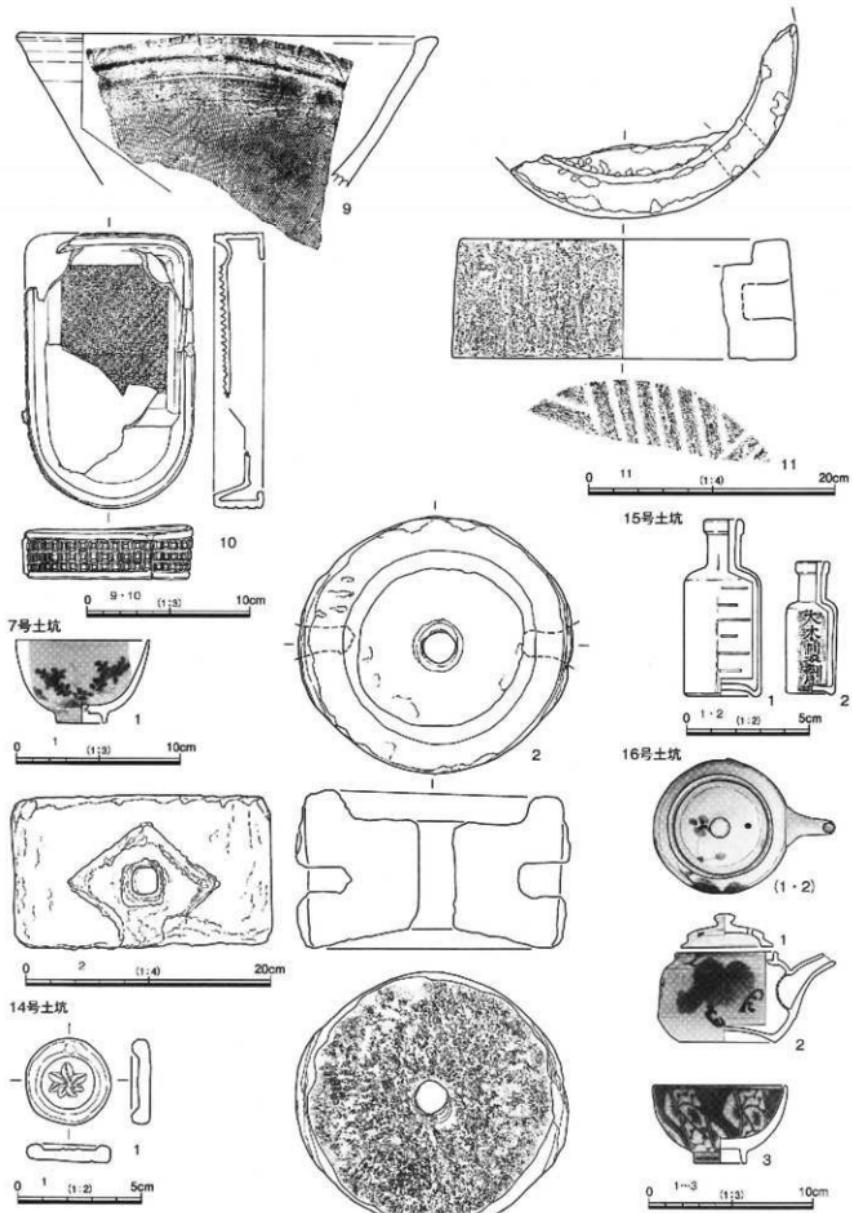
2号井戸



第14図 1・2号井戸 遺物



第15図 4号井戸、1・6号土坑 遺物



第16図 6・7・14~16号土坑 遺物

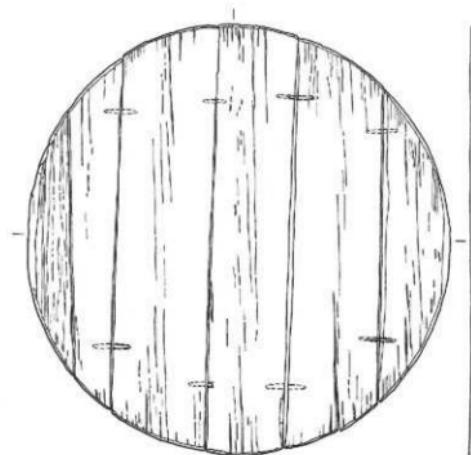


第17圖 16号土坑 遺物

17号土坑

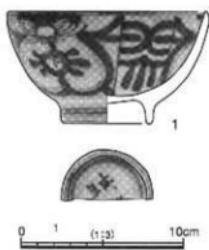


0 1 (1:3) 10cm



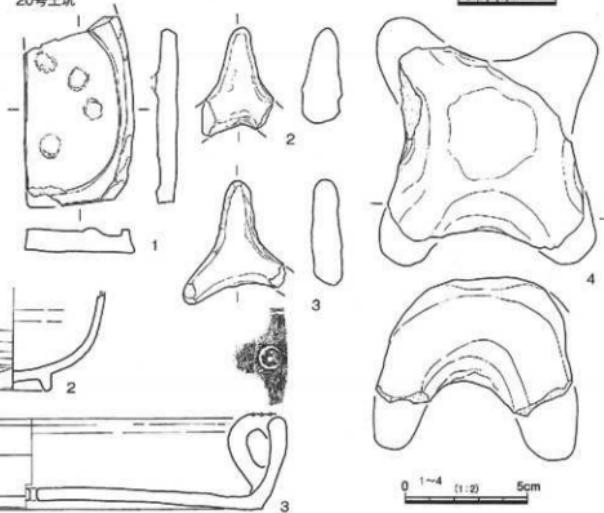
1

19号土坑



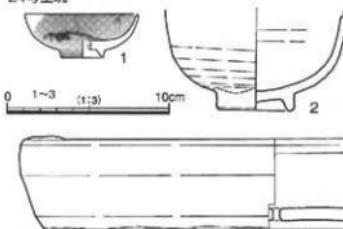
0 1 (1:3) 10cm

20号土坑



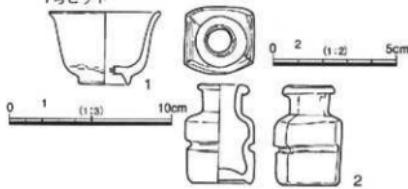
0 2 (1:10) 20cm

24号土坑



0 1~3 (1:3) 10cm

7号ピット



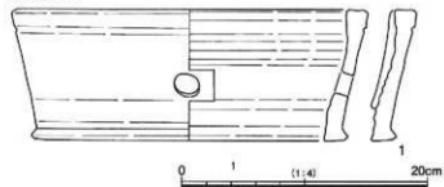
0

1

(1:3)

10cm

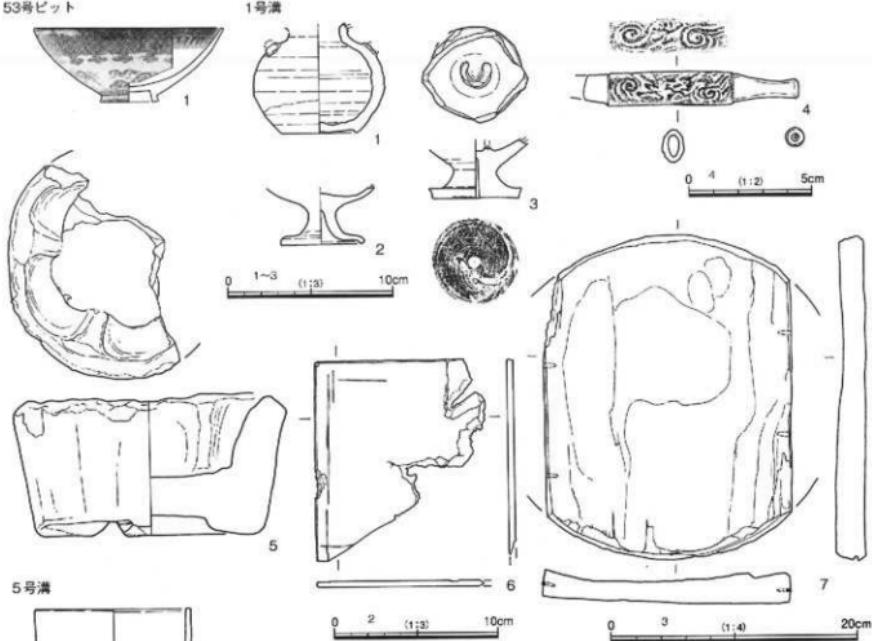
16号ピット



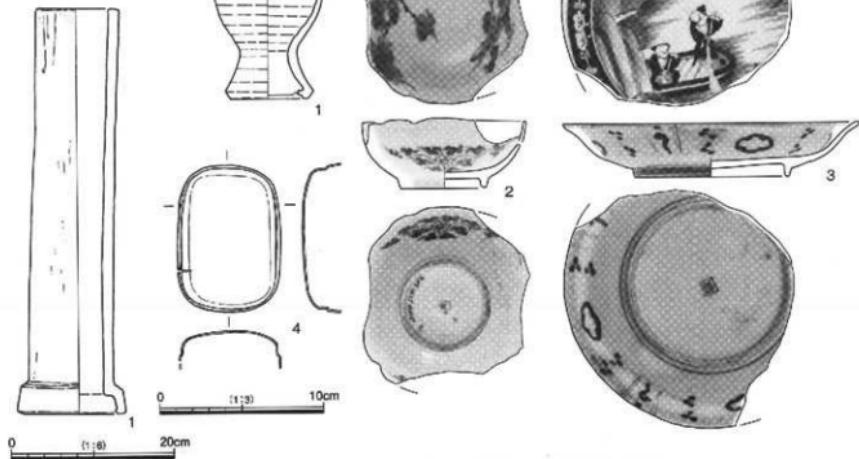
0 1 (1:4) 20cm

第18図 17・19・20・24号土坑、7・16号ピット 遺物

53号ピット

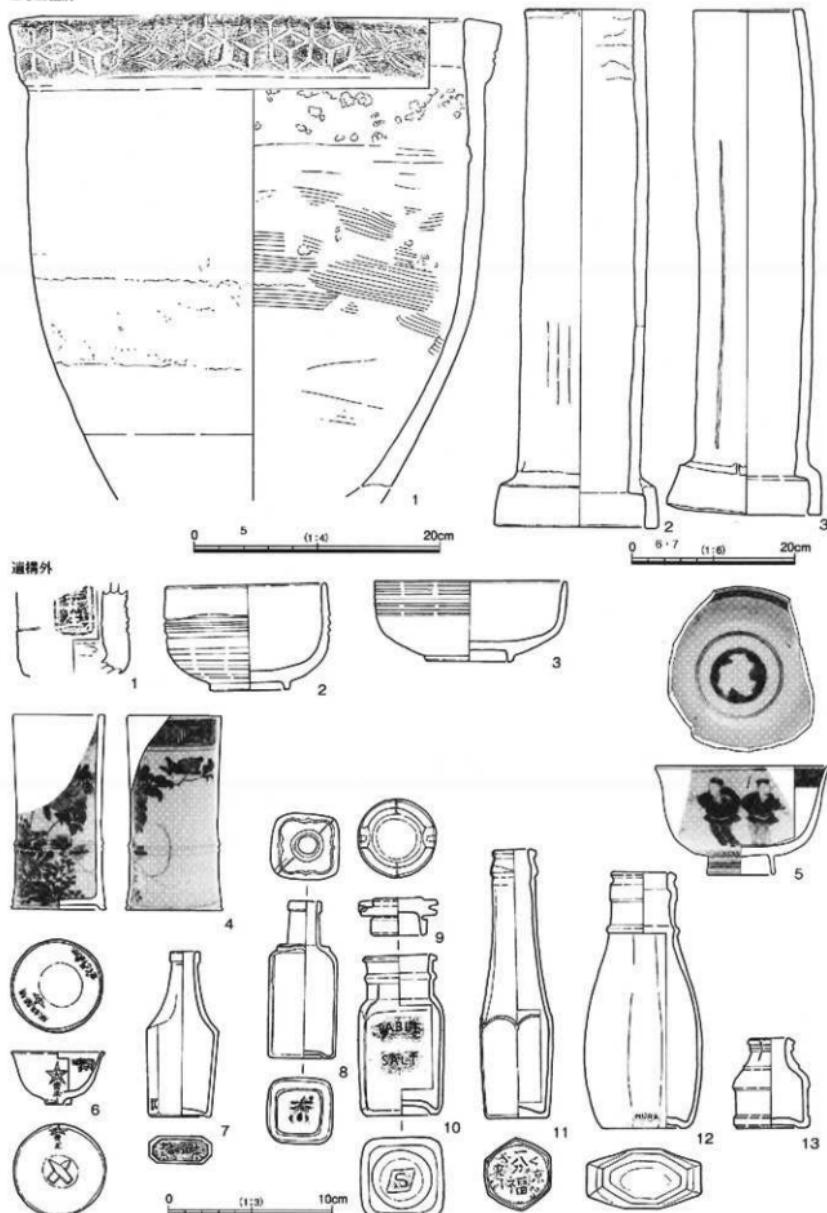


2号建物

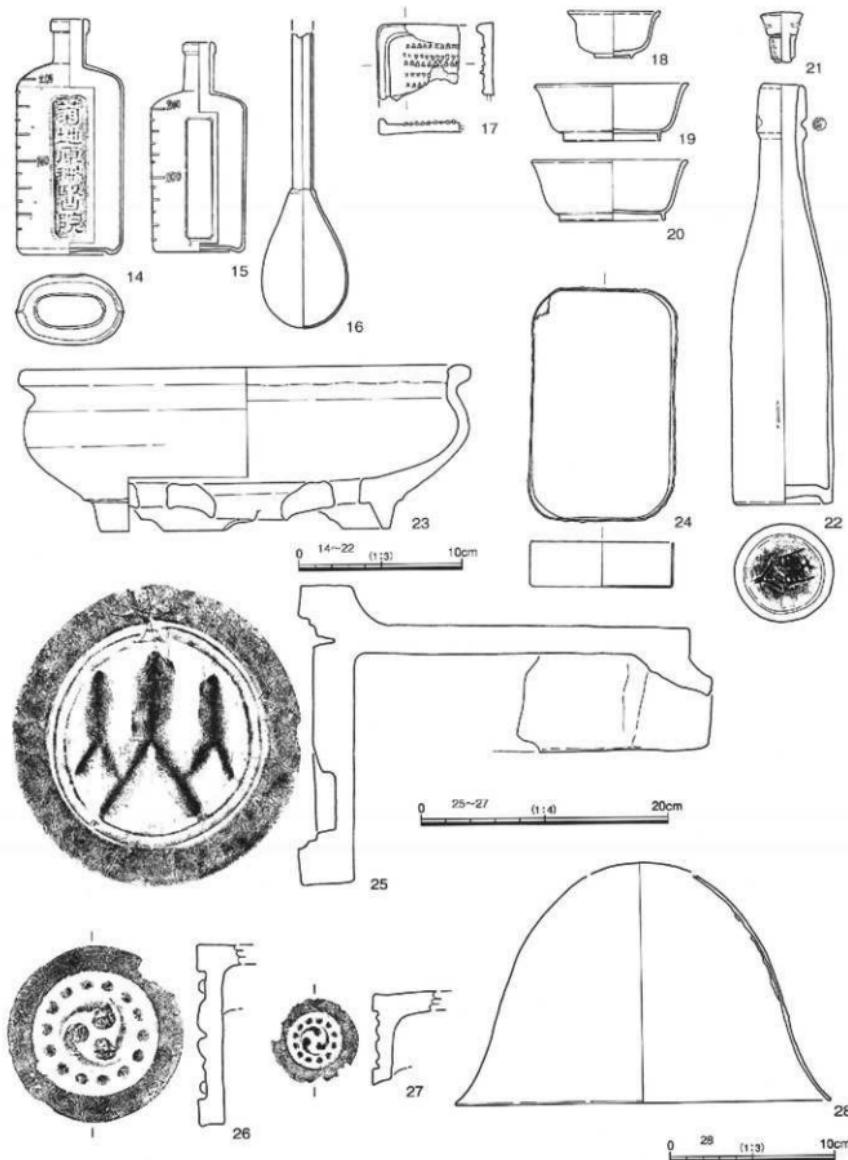


第19図 53号ピット、1・5号溝、2号建物、1号石組溝 遺物

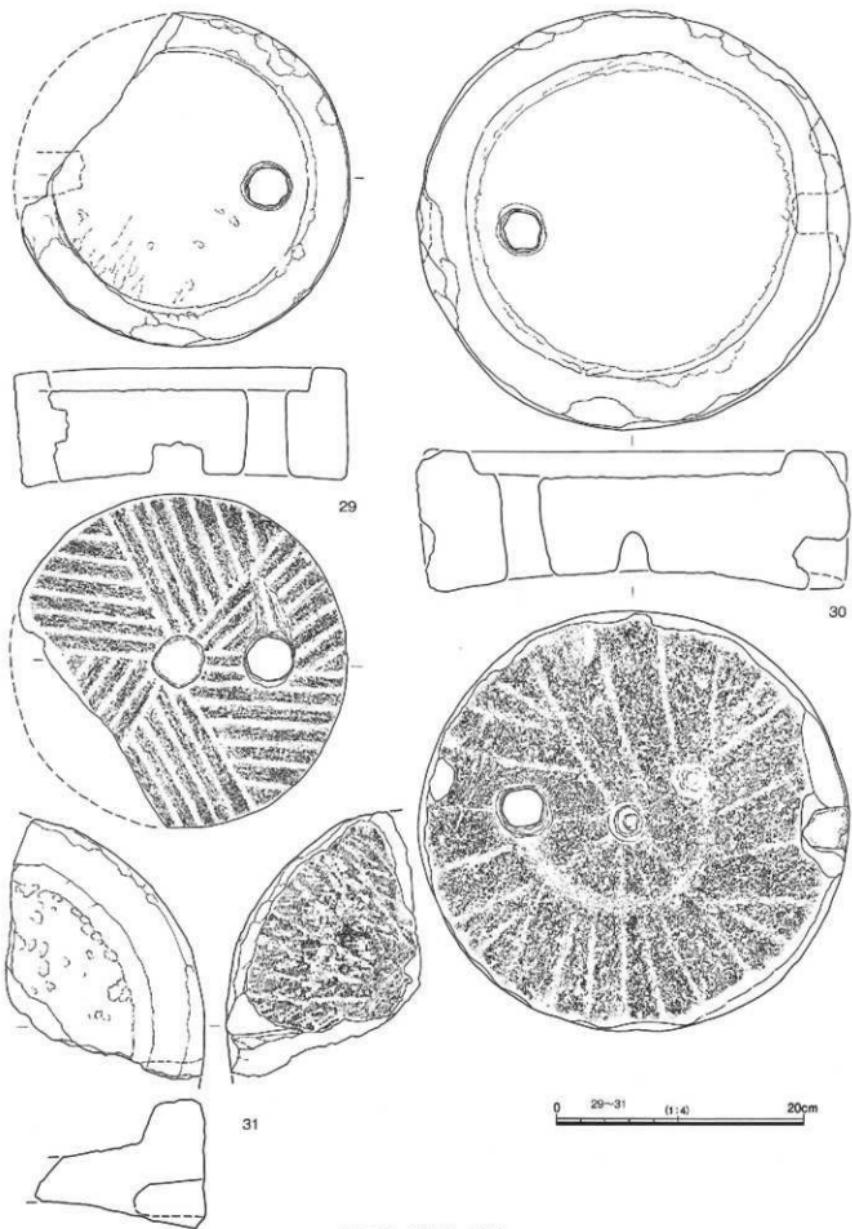
2号石組溝



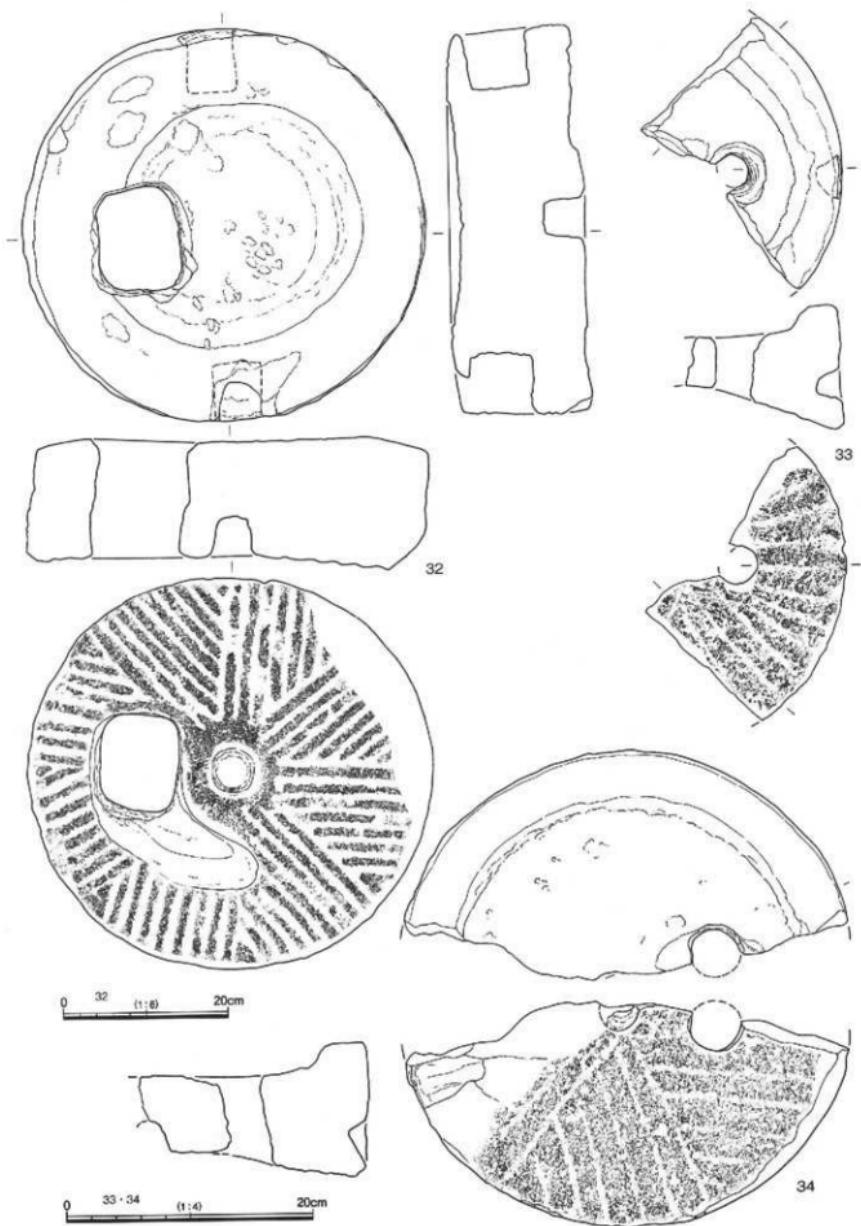
第20図 2号石組溝、造構外、遺物



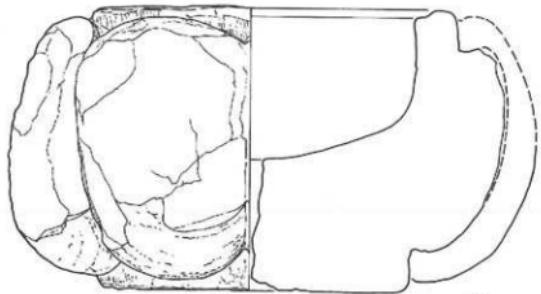
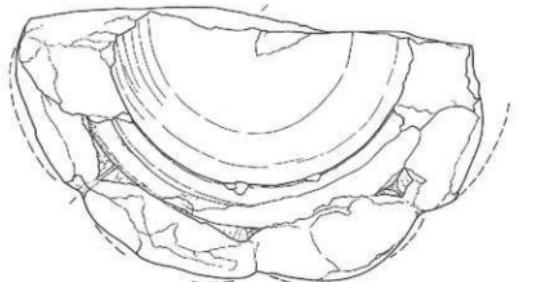
第21図 造構外 遺物



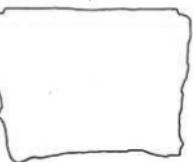
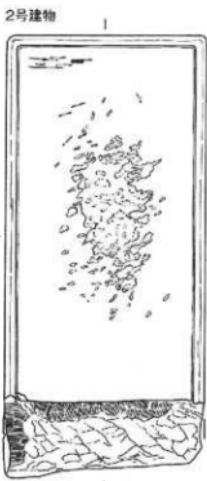
第22図 遺構外 遺物



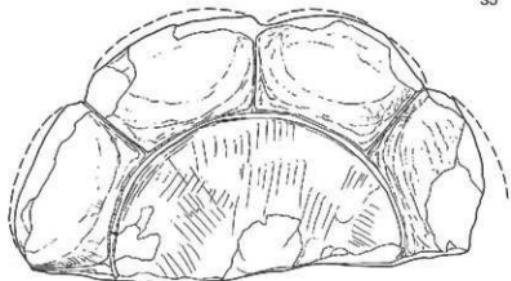
第23図 遺構外 遺物



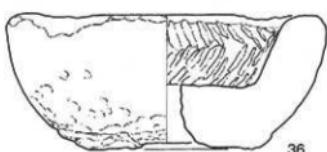
35



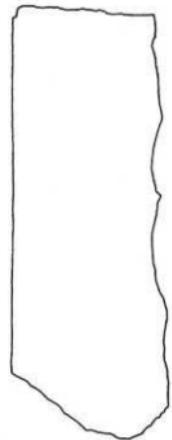
37



0 35・36 (1:4) 20cm

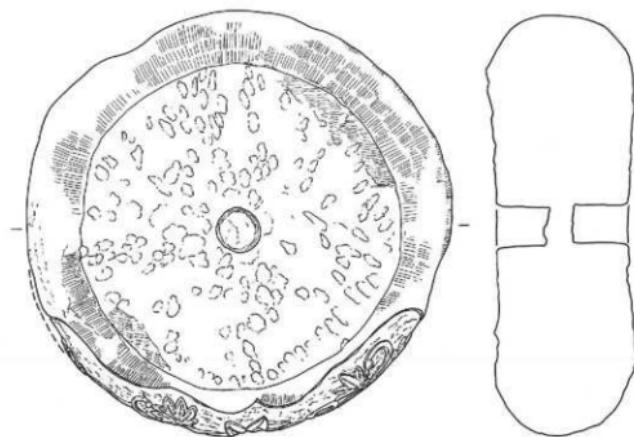


36

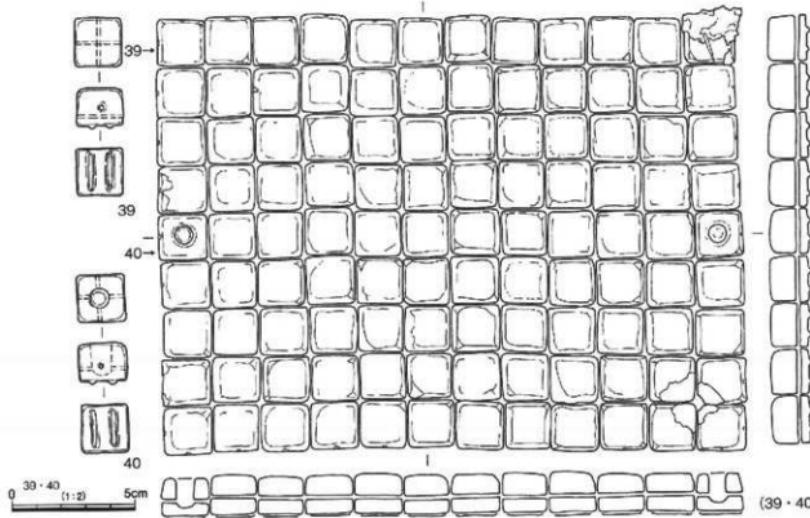


0 37 (1:6) 20cm

第24図 遺構外、2号建物、1号溝 遺物

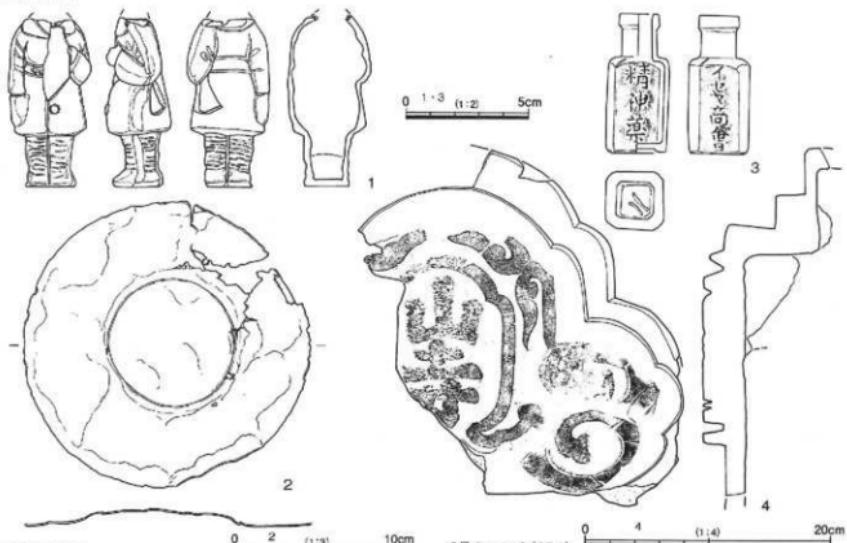


0 38 (1:6) 20cm

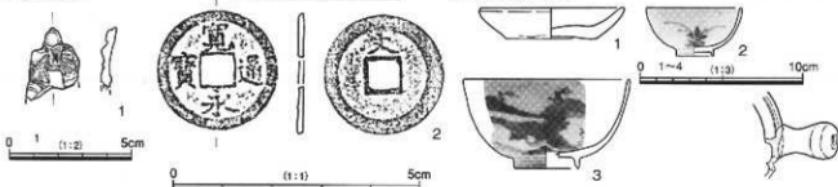


第25図 遺構外 遺物

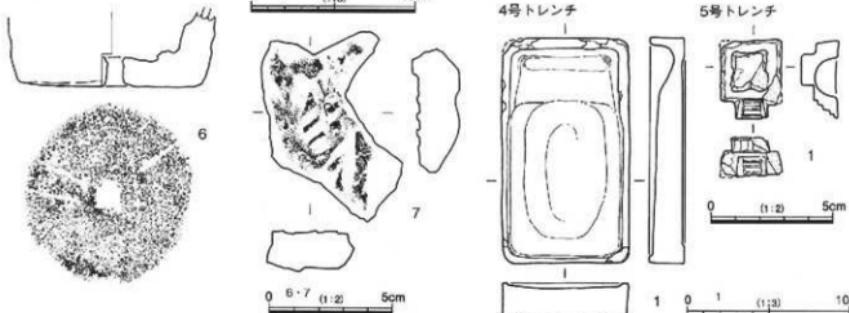
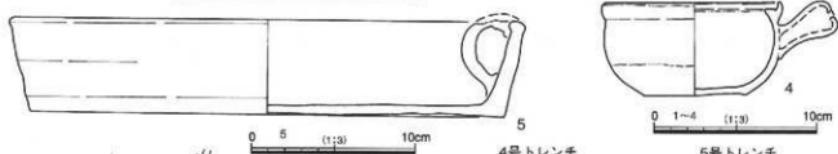
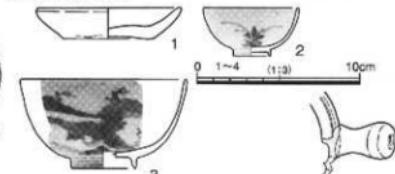
1号トレンチ



2号トレンチ



3号トレンチ (SD1)



第26図 1～5号トレンチ 遺物



1 調査前駐車場風景(東より)



2 二の堀現況(南東より)



3 調査区脇の金山神社



4 重機による表土剥ぎの様子



5 完成状況(上より)



6 完成状況(東より)



7 完成状況(北より)

図版 2



1 2号建物跡基礎(東より)



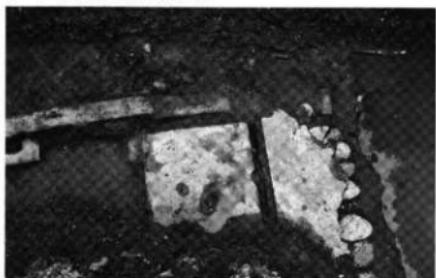
2 磨石に転用された石材



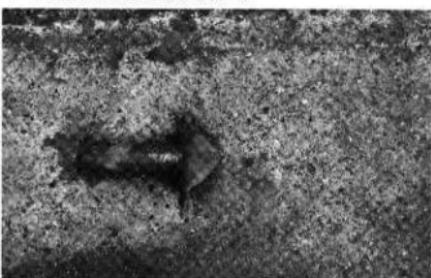
3 2号建物跡と石列(東より)



4 二の堀脇の瓦礫堆積状況(南より)



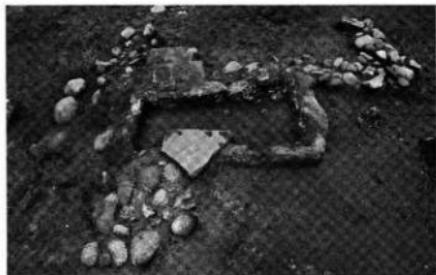
5 2号建物跡付属基礎



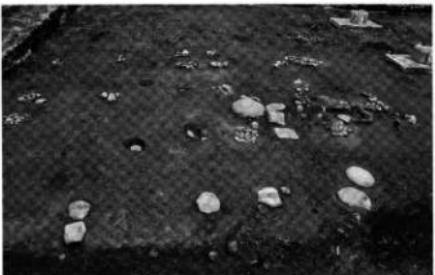
6 2号建物跡基礎のアンカーボルト



7 1号建物跡(北より)



1 1号建物跡長方形施設



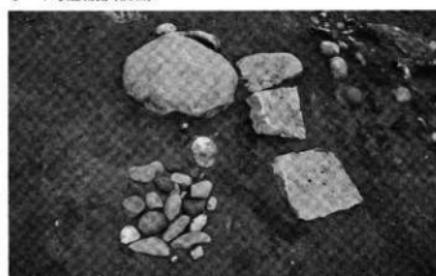
2 1号建物跡(東より)



3 1号建物跡(根石)



4 1号建物跡(東より)



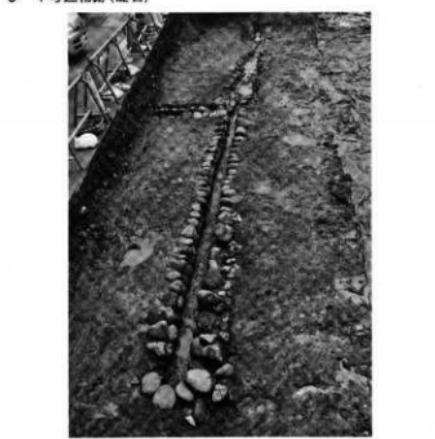
5 1号建物跡(礎石・根石)



6 1号建物跡(礎石)



7 1号石組溝確認状況(南より)



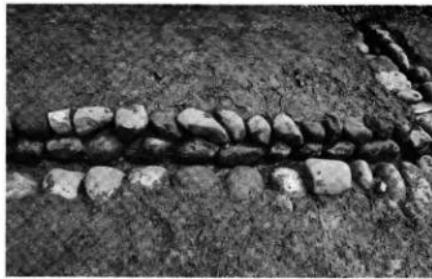
8 1号石組溝確認状況(南より)

9 1号石組溝(西より)

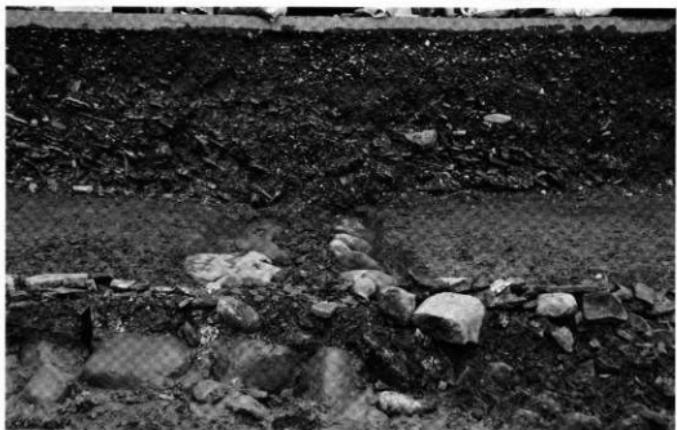
図版 4



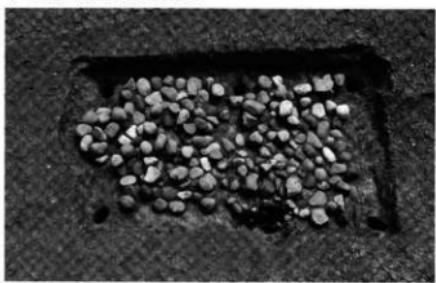
1 1号石組溝



2 1号石組溝



3 調査区北壁瓦礫堆積状況



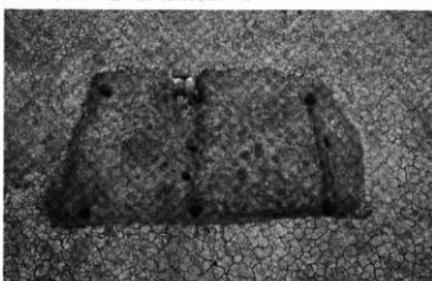
4 2号土坑礫堆積状況(北より)



5 2号土坑下層礫検出状況(南より)



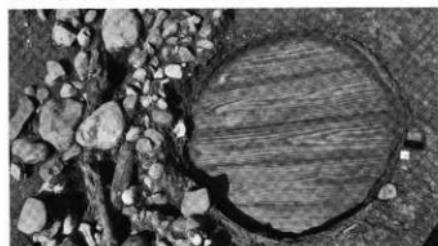
6 2号土坑部分



7 2号土坑ピット・溝検出状況



1 1号土管列と1号石組溝の連結部



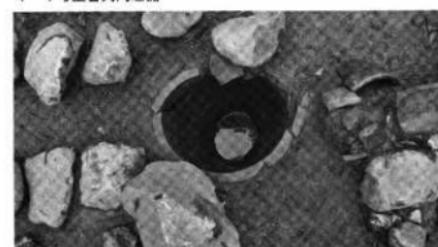
2 17号土坑の埋桶底



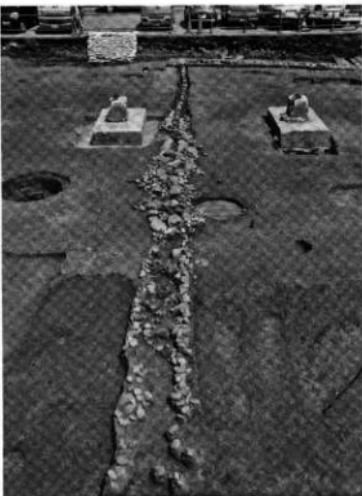
3 17号土坑と2号石組溝(南より)



4 1号土管列内埋桶



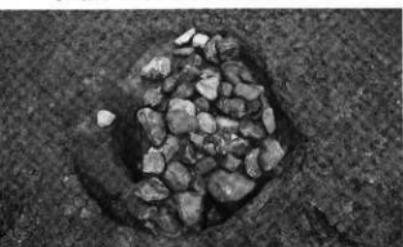
5 2号石組溝内埋桶(浸透枠)



6 1号土管列・2号石組溝



7 1号土管列・2号石組溝付近調査風景

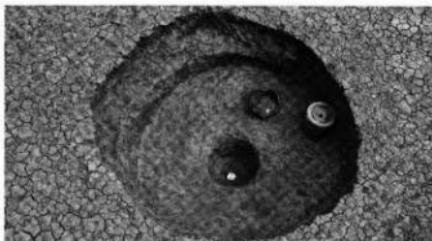


8 7号土坑壁検出状況(南より)

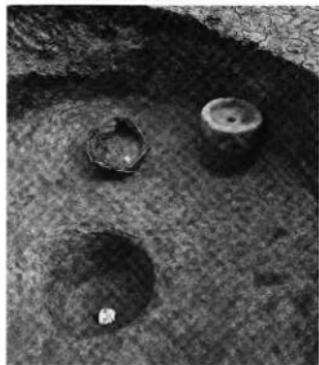
図版 6



1 7号土坑礫半截状況(西より)



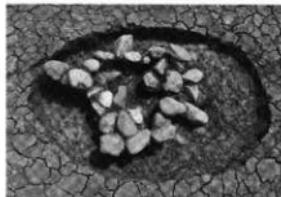
2 7号土坑完掘状況(南より)



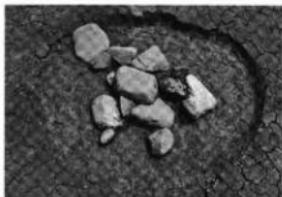
3 7号土坑遺物出土状況



4 3号建物跡(南より)



5 3号建物跡根石(49号ピット)



6 3号建物跡根石(50号ピット)



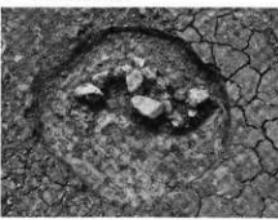
7 3号建物跡根石



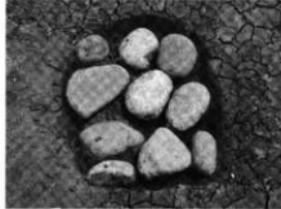
8 3号建物跡根石(62号ピット)



9 3号建物跡根石(63号ピット)



10 3号建物跡根石(59号ピット)



11 3号建物跡根石(48号ピット)



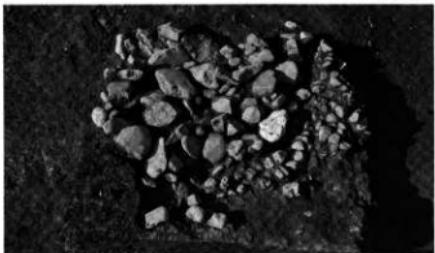
12 3号建物跡根石



13 3号建物跡根石



1 1～3号井戸(南より)



2 1号井戸上層集石



3 1号井戸集石断面(南より)



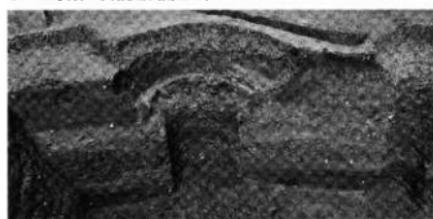
4 1号井戸内石組



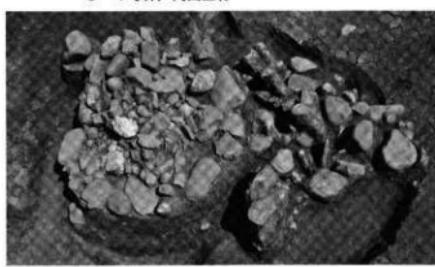
5 1号井戸半截状況(南より)



6 1号井戸内出土竹



7 1号井戸発掘状況(南より)



8 2号井戸上層集石

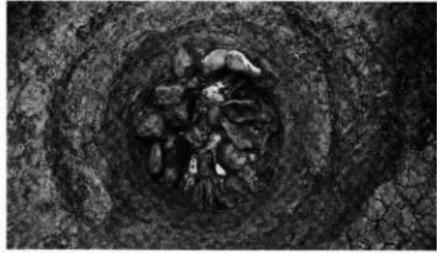


9 2号井戸上層集石半截(南より)



10 2号井戸上層集石内出土土馬

図版 8



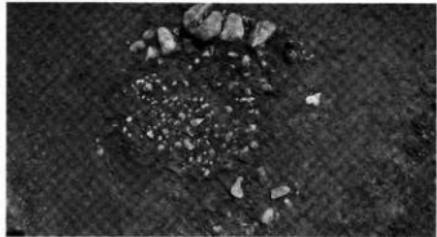
1 2号井戸下層集石



2 2号井戸上層集石半截状況(南より)



3 2・3号井戸半截・完掘状況(南より)



5 3号井戸確認状況



6 3号井戸半截状況



8 2・3号井戸調査風景



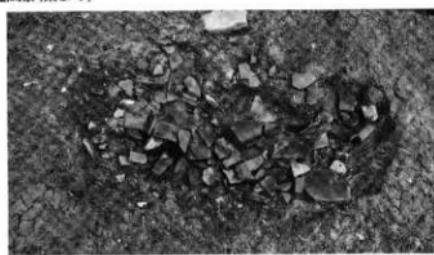
4 2号井戸半截状況(南より)



7 3号井戸石積(南より)



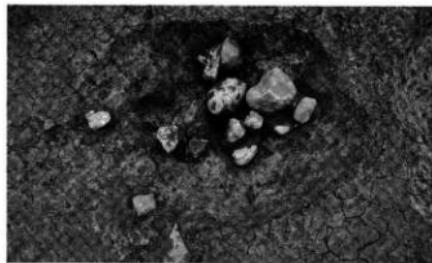
9 3号井戸半截状況(南より)



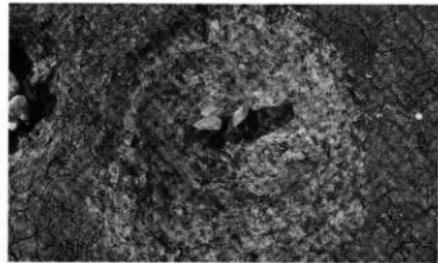
図版 10



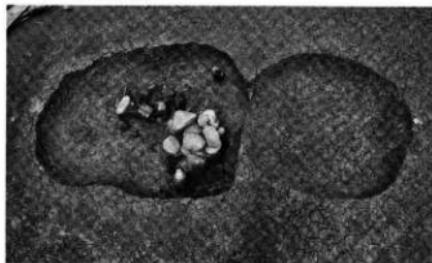
1 3号土坑(南より)



2 4号土坑(南より)



3 5号土坑(南より)



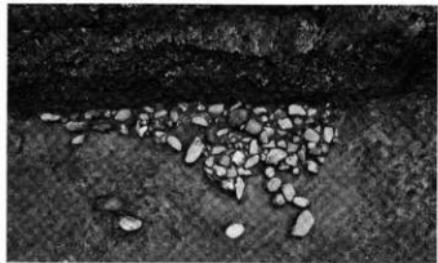
4 14・19号土坑(南より)



5 20号土坑遺物出土状況(北より)



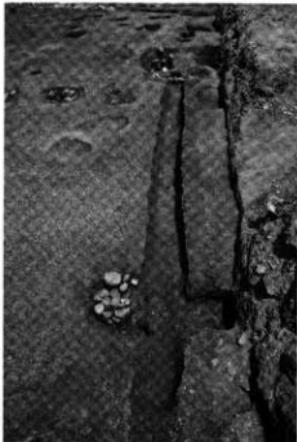
6 16号土坑遺物出土状況(南より)



7 24号土坑(北より)

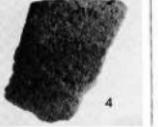
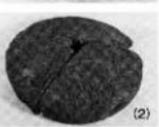
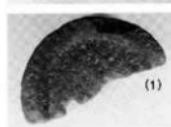


8 24号土坑内焰熔出土状況

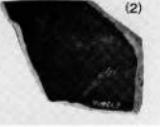


9 5号溝(南より)

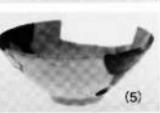
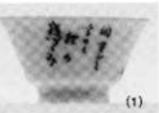
1号井戸



2号井戸



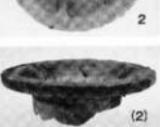
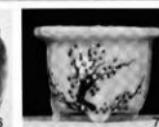
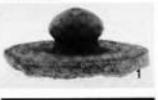
4号井戸



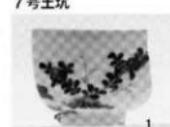
1号土坑



6号土坑



7号土坑

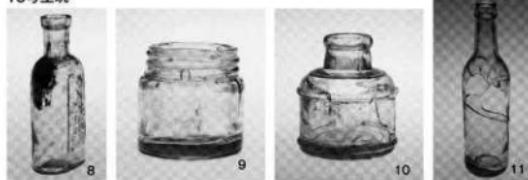


14号土坑



図版 12

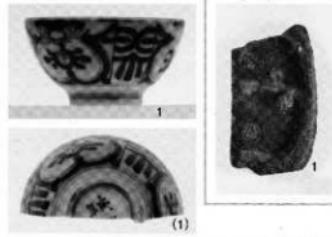
16号土坑



17号土坑



19号土坑



20号土坑



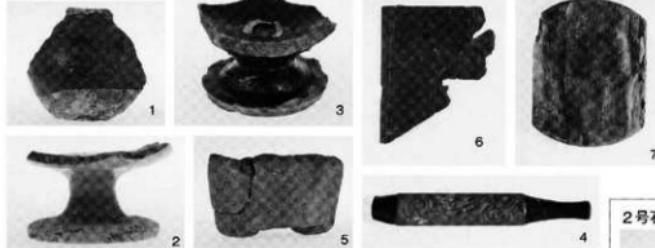
16号ビット



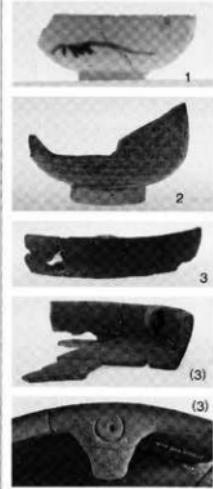
53号ビット



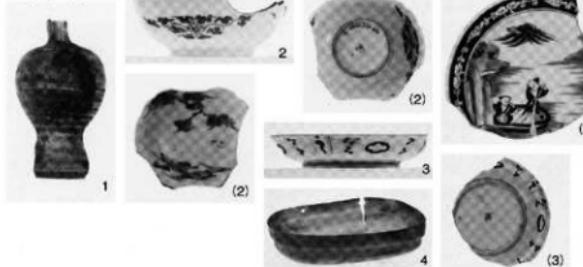
1号溝



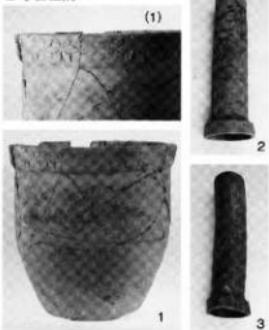
24号土坑



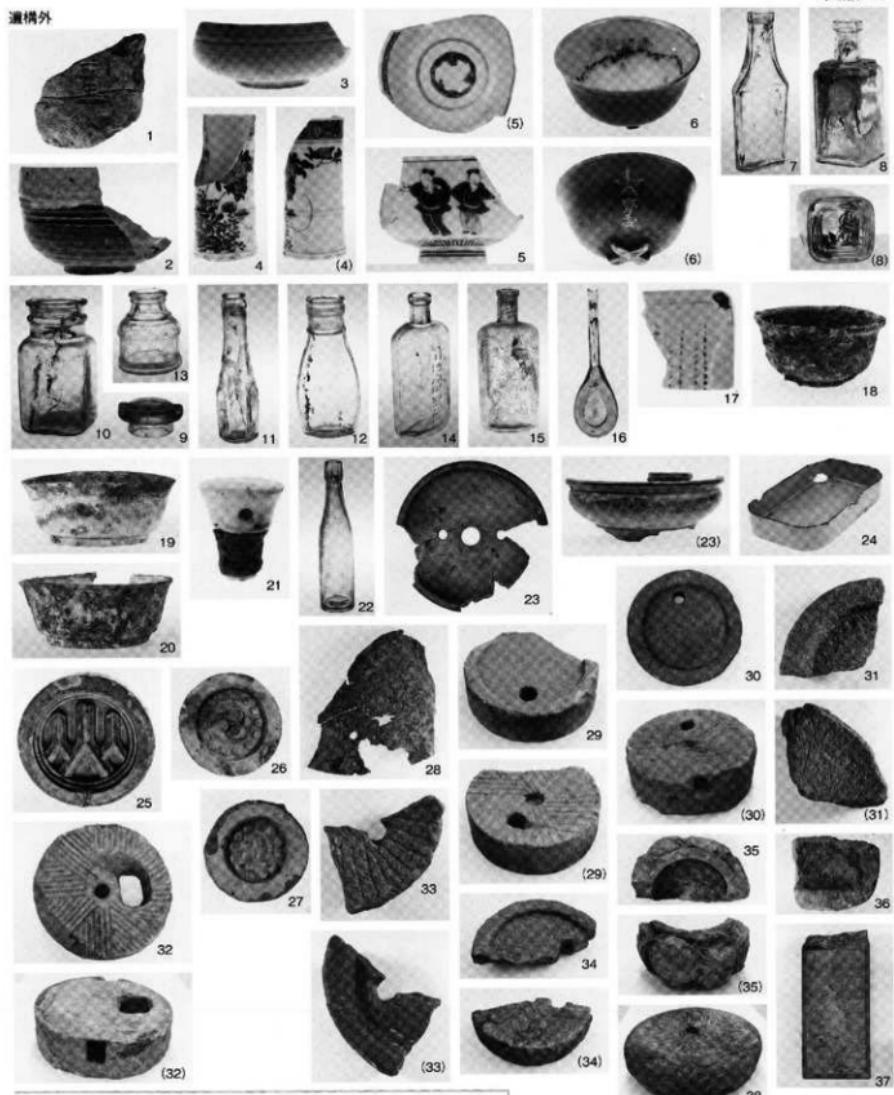
1号石組溝



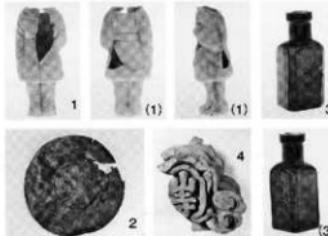
2号石組溝



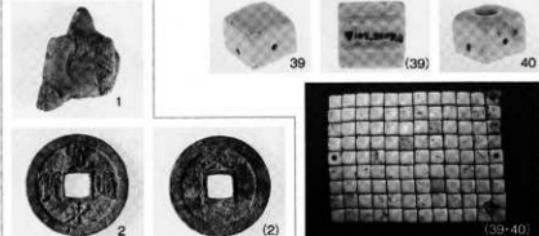
遺構外



1号トレンチ

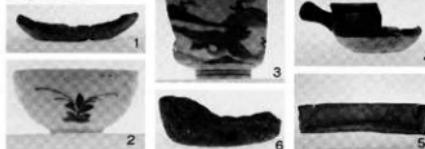


2号トレンチ



図版 14

3号トレンチ



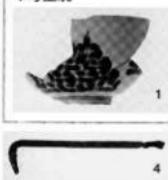
4号トレンチ



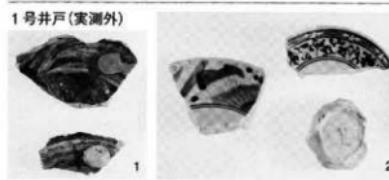
5号トレンチ



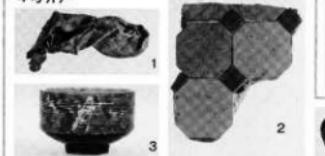
1号土坑



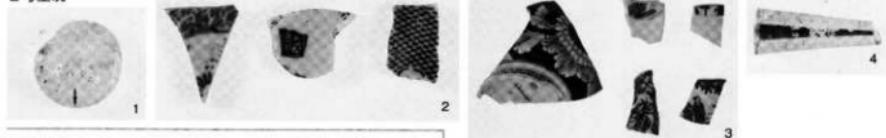
1号井戸(実測外)



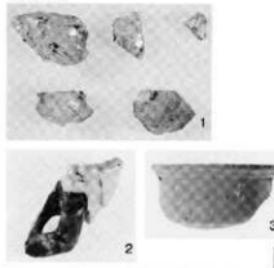
4号井戸



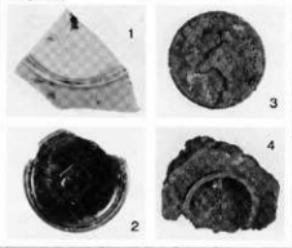
2号土坑



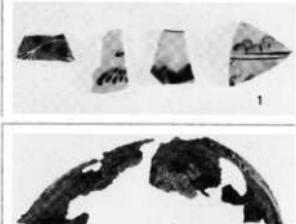
3号土坑



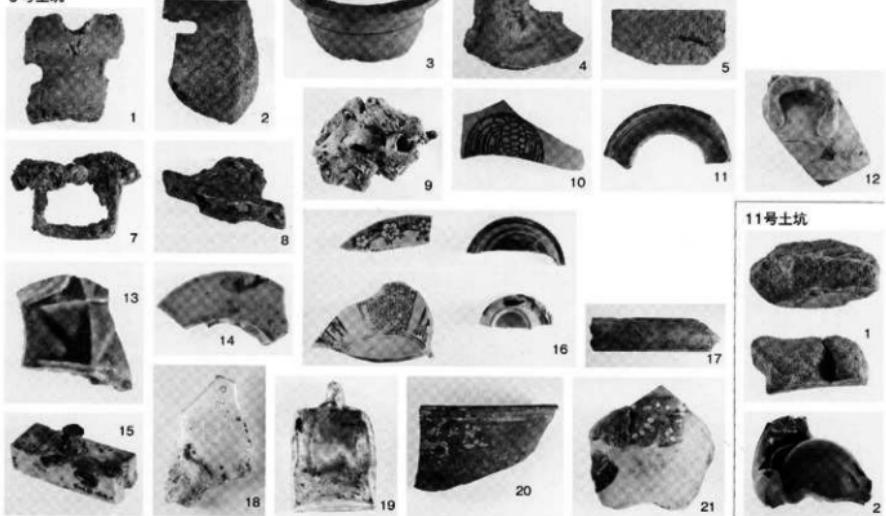
4号土坑



5号土坑



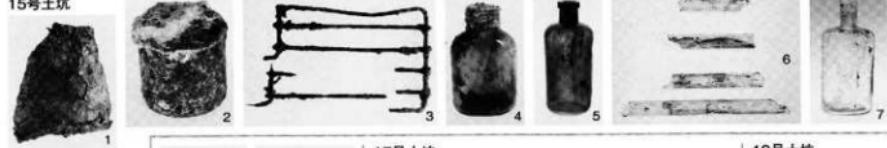
6号土坑



11号土坑



15号土坑



16号土坑



17号土坑



19号土坑



20号土坑



21号土坑



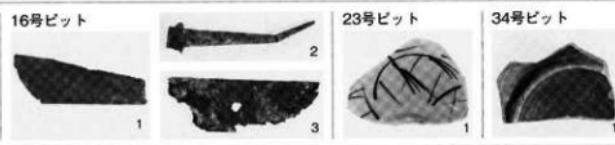
3号ピット



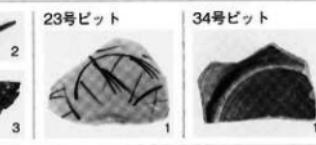
7号ピット



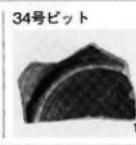
16号ピット



23号ピット



34号ピット



45号ピット



46号ピット



51号ピット



53号ピット

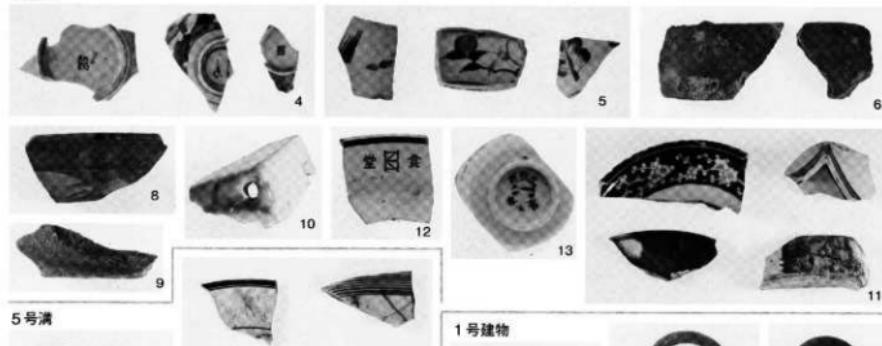


1号溝

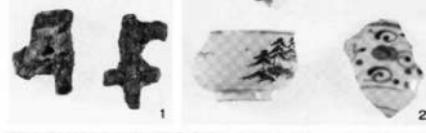


图版 16

1号溝



5号溝



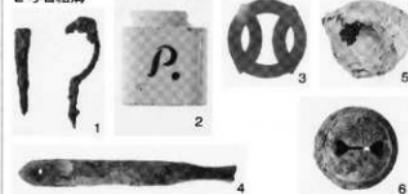
1号石組溝



1号建物



2号石組溝

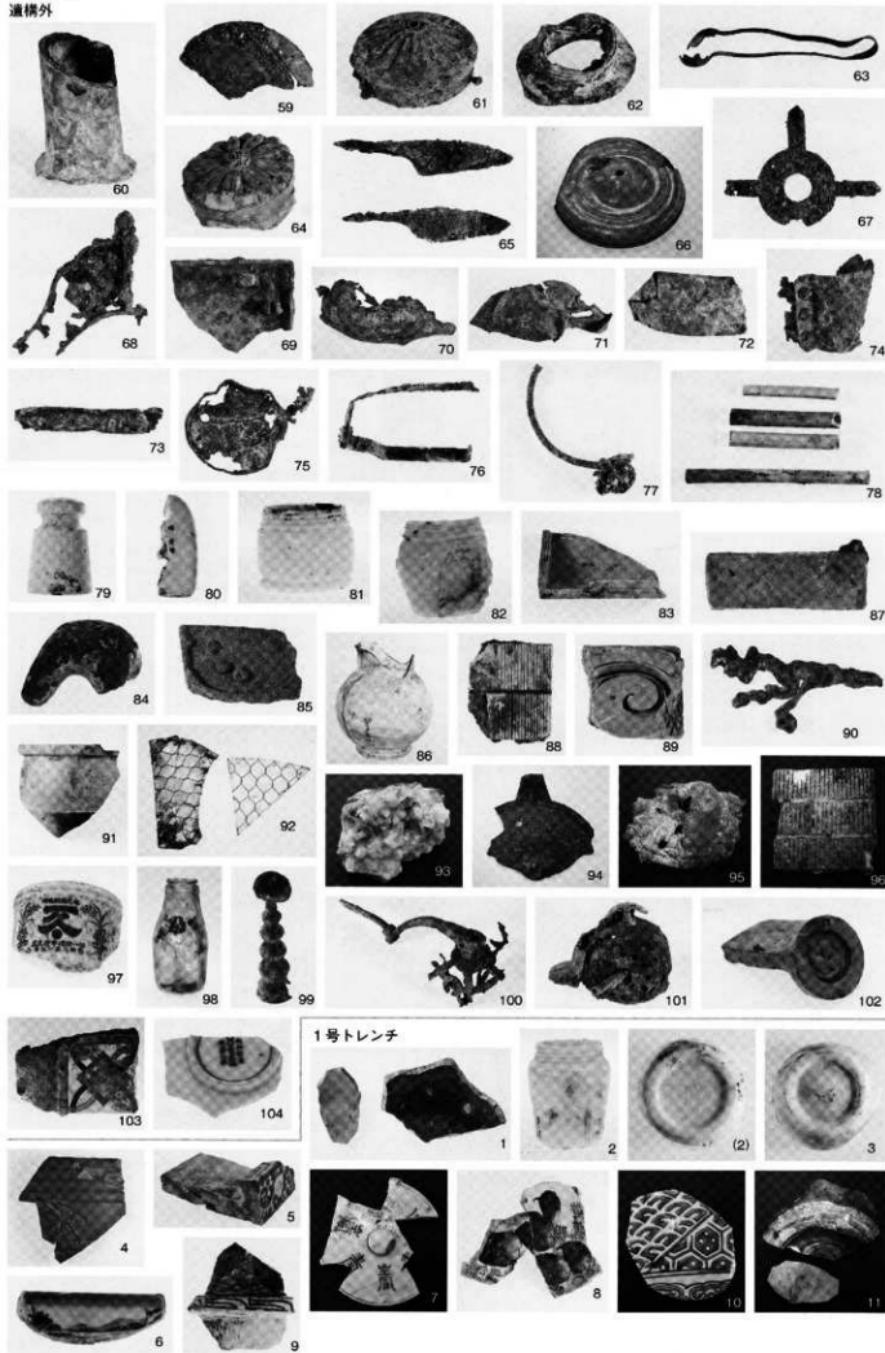


遺構外

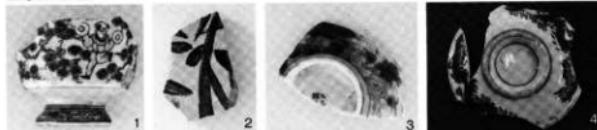


図版 18

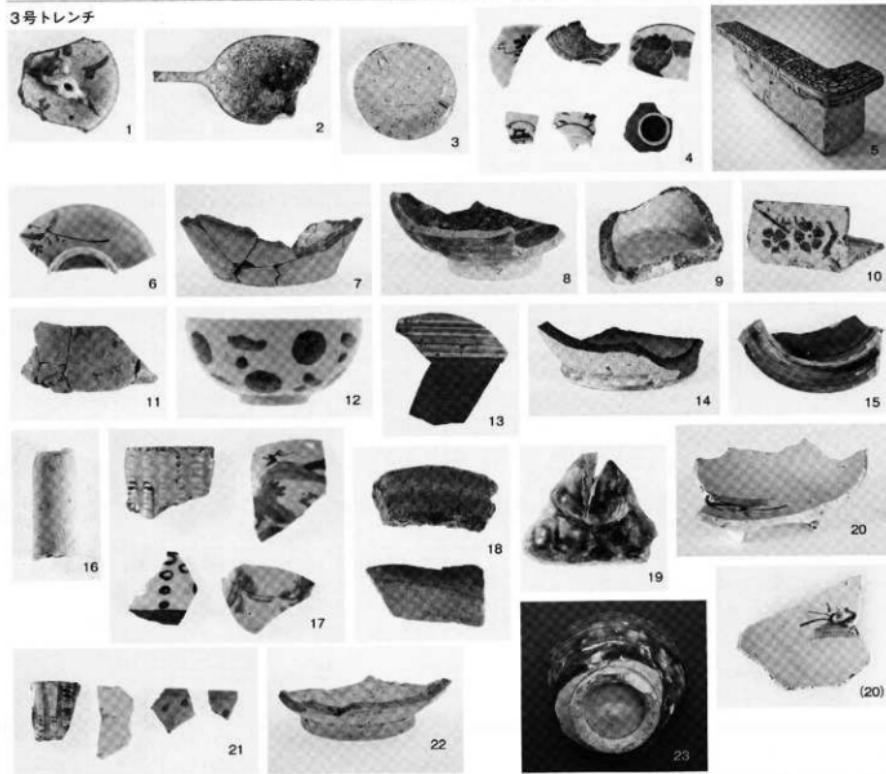
遺構外



2号トレンチ



3号トレンチ



5号トレンチ



6号トレンチ



報告書抄録

ふりがな	こうふじょうかまちいせき
書名	甲府城下町遺跡（丸の内二丁目109地点）
副書名	立体駐車場建設に伴う発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	柳原功一・植月学
編集機関	財團法人 山梨文化財研究所
所在地	〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場 1566 Tel 055-263-6441
発行年月日	西暦2011年9月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こうふじょう かまちいせき 甲府城下町遺跡 (丸の内二 丁目109地点)	やまなしけんこうふ しまるのうち 山梨県甲府市丸の内 二丁目109番地	19201	273	35° 40' 00.4759"	138° 33' 53.6180"	平成21 (2009)年 7月18日 ~9月1日	951.79	立体駐車 場建設

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
城下町 甲府市街地	近世～昭和 (戦前)	建物跡・井戸・溝・ 土坑など	上師質製品・陶磁器・瓦類・石臼・ ガラス瓶・土馬・トチン・鋳型・金属製品・硯など	表土直下から甲府空襲の片付けに伴う大量の瓦礫類、および空襲で被災した建物跡 2 棟、溝などを検出。近世の鉄鋳造に関する施廬土坑。

要約	甲府城下町遺跡のうち、甲府城西方、二の堀に面した地点で、近世遺構と二の堀の立ち上がりを確認することを主な目的として調査を実施した。その結果、近世後期の鑄物跡に関わる棋石を伴う建物跡と土坑、井戸などを検出し、二の堀立ち上がりについては把握できなかった。調査全域には上層に昭和20年7月6・7日の甲府空襲のち瓦礫を埋め立てた焼土混じりの層が厚く堆積しているのが見つかり、昭和20以前の様々な遺物が出土した。
----	---

甲府城下町遺跡（丸の内二丁目109地点）

—立体駐車場建設に伴う発掘調査報告書—

平成23年(2011)9月30日 発行

編集 財團法人 山梨文化財研究所
〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場1566 Tel 055-263-6441

発行 社團法人 山梨労働者医療協会・財團法人 山梨文化財研究所

印刷 勉帝京サービス

